

平成15年度～19年度 私立大学学術研究高度化推進事業

学術フロンティア推進事業 平成16・17年度 研究成果報告書

第1部門

中学生・高校生の育児体験学習
プログラムの開発

学術フロンティア推進事業 第1部門主任

聖徳大学人部学部児童学科

塩 美佐枝

生涯学習の観点に立った
「少子・高齢社会の活性化」
に関する総合的な研究

研究代表者 所長・教授 福留 強

SEITOKU UNIVERSITY
INSTITUTE OF LIFELONG LEARNING

聖徳大学 生涯学習研究所

はじめに

聖徳大学生涯学習研究所では、平成15年度、文部科学省採択の「学術フロンティア推進事業」における研究課題「生涯学習の観点にたった『少子高齢社会の活性化』に関する菅生的研究」について、5カ年にわたる研究を進めています。

研究計画は、少子化については子ども自身に関する研究、子どもと親、すなわち家庭教育の振興にかかる研究、子どもと家庭をめぐる地域システムの面から研究を、進めているところです。

一方、高齢者をめぐっては、その能力を地域の子どもの教育に、あるいは生きがいのために地域に自己の能力の活用を、あるいは退職後の仕事づくりなどをめぐって検討しています。同時に、中高年をめぐって様々な角度から人々の活性化、地域の活性化等を検討するために、多面的な研究を進めることにしています。

そして、具体的には、少子高齢社会におけるさまざまな具体的な方策を検討し、試行し、できれば政策提言を行うなど、社会的に貢献できる研究をめざしているものです。

この研究報告は、研究プロジェクト第1部門「少子化に関する地域システムの研究」に位置づけているのですが、この報告書は「中学生・高校生の育児体験学習プログラムの開発」として、新たに研究課題を設定したものについてまとめたものです。

子育てをまじかに控えた子育ての次世代である中学生、高校生に小さな子どもたちとのふれあいを通じて生活の楽しさ、子どもたちの生きる力、一人一人の存在の大切さを感じてほしいという研究です。いずれも5年間にわたる研究の一環ですが、個の成果の一端が少しでも活用されますよう、本研究のスタッフ一同、多くのご意見ご指導を念願しています。

聖徳大学生涯学習研究所
所長 福留 強

研究にあたって

育児不安の増大、幼児の虐待の増加、急激な少子化の進行など、子育てが社会問題になっています。その問題を解消するため、国は重要施策として子育て支援対策を実施しています。そして、幼稚園や保育所でも、子育て支援についてのさまざまな取り組みが行われています。しかし、そのほとんどは子育て途上の母親や父親を対象にしたものです。

育児不安増大の背景のひとつに、子育ての文化が伝承されていないことが指摘されています。

服部祥子、原田正文による兵庫レポートによると、子どもの要求がわからないという回答が多く出ており、心配項目も発達段階に応じて変化しています。自分の子どもの発達の姿にどのように対応したらよいかが分からず、しかも相談相手がいないことが育児不安を大きくしていると指摘しています。

人が成長していく段階で、幼い子どもたちとの触れ合いの中で、その子にあったかかわり方を学び、人に対する愛情を育み、命の大切さに気づく場を保障していく必要があるのではないかと思われます。

そこで、本研究ではこの点に着目し、子育てを間近に控えた、子育ての次世代である中学生、高校生に小さな子ども達との生活の楽しさ、子ども達の生きる力、一人一人の存在の大切さを感じてほしいと考え、「中学生・高校生の育児体験学習」の実践的研究を展開することにしました。

最近、幼稚園や保育所には中学生・高校生が訪問しています。しかし、その訪問は、職場体験としてのものが多く、保育者という職業体験を希望する生徒に対するものです。そこで、中学生・高校生の育児体験としての交流活動の在り方や事前指導の内容、方法等について実践的に研究することにしました。全国の保育所、幼稚園と中学生・高校生の交流活動が一層充実し、子育て支援の一助になることを願っています。

本研究の推進に当たってご協力いただきました、松戸市、松戸市立八柱保育所、子すずめ保育園、野菊野保育園、松戸市立第一中学校 聖徳大学附属高等学校の諸先生方に心から感謝申し上げます。

聖徳大学学術フロンティア推進事業
第1部門 主任研究員

塩 美佐枝

平成15～19年文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」
「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」

第1部門

少子化に関する地域システムの研究

第1グループ（次世代育成）

中学生・高校生の育児体験学習プログラムの開発

2006(平成18)年 3月

聖徳大学生涯学習研究所 発行

もくじ

研究目的	3
研究経過	4

活動内容

I. 平成16年度の取り組み

1. 大学を核とした地域との連携の試み	7
2. 高校生の育児体験学習	
1) 高校生の育児体験学習プログラムの作成過程	8
2) 高校生の育児体験学習プログラムの試行結果	16
3) 「子ども・子育てに対する意識調査」の結果	22

II. 平成17年度の取り組み

1. 大学を核とした地域との連携の試み	43
2. 高校生の育児体験学習	
1) 高校生の育児体験学習プログラムの改善	49
2) 高校生の育児体験学習プログラムの試行結果	53
3) 「子ども・子育てに対する意識調査」の結果	60
3. 中学生の育児体験学習	
1) 中学生の育児体験学習プログラムの作成過程	74
2) 中学生の育児体験学習プログラムの試行結果	77
3) 「子ども・子育てに対する意識調査」の結果	86
4. プログラム施行後の聞き取り調査	100

まとめと今後の課題	105
-----------	-----

◇ 参考文献

◇ 資料

研究目的

近年、少子化・核家族化の進む中、若者が親になる前に乳幼児と触れ合う体験が少ないことがさまざまな問題を投げかけている。国をあげて育児体験学習の必要性を提言してはいるが、その動きは個々の活動にとどまり、継続的・組織的に実施されているとは言いがたい現状である。しかし、子育ての支援とともに、近い将来親になり、次世代を担う大人になることが期待される中学生・高校生に適切に育児体験学習が実施されることの意義は大きいと考えられる。また、人間の生活で重要な子育ては、生活している地域の実情と密接に結びつき、その理解を抜きにしては成り立たない。そのため、地域の中で育児体験学習がシステムとして位置づけられなければならない。

本研究は、平成15年度より、少子社会において育児不安の根底にあるとされる子育て文化の伝承の世代間断絶に対応するための方策の一つとして、近い将来親世代になる若者（中学生・高校生）の育児体験に関するプログラムの開発を目的として始めた。これまでも先行研究により、「育児体験学習」は、少子化解消や親性準備性を高めるだけでなく、実際に乳幼児と触れ合うことにより、乳幼児の存在そのものを大切なものとして実感し、ひいては自分自身の存在や、命に対する肯定感や価値観を再確認するきっかけとなっていることが報告されている。さらに、「育児体験学習」により乳幼児の実態に触れ、子育ての難しさを体験することで、他者との関係を築き、社会性を身につけるきっかけとなることが期待されている。これらの成果を踏まえた上で、本大学が橋渡しの役を担う「子育て地域支援システム」の形成を目指し研究を進めてきた。研究目的は以下の6項目である。

1. 幼稚園・保育所（以下園とする）で行われている子育て支援の現状を把握する
2. 中学生・高校生の育児体験学習の現状を把握する
3. 中学生・高校生への育児体験学習プログラムを作成する
4. 作成したプログラムを試行する
5. プログラムの有効性を検証するとともに、適宜改善をはかる
6. 大学を核とした地域との連携を試みる

中学校・高等学校（以下学校とする）にプログラムを提供し、地域の保育施設や親子を結びつける「子育て地域支援システム」へと発展させる

研究経過

平成15（2003）年度から始まった研究活動は、1年目は子育て支援の現状を把握するために、幼稚園・保育所での意識調査や、先進地域の幼稚園の聞き取り調査を実施した。その結果を踏まえ2年目・3年目は以下のように推進してきた。

1. 平成16（2004）年度の研究経過

- (1) 中学校・高等学校の育児体験学習の実態調査（静岡県浜松市可美中学校、松戸市立第一中学校、聖徳大学附属高等学校）
- (2) 子育て支援の方策について、先進地域（スウェーデン・デンマーク）の視察
- (3) 地域の子育て支援の実態把握のために行政への聞き取り調査（千葉県松戸市）
- (4) 高校生の育児体験学習プログラムを作成
- (5) 高校生の育児体験学習の実践プログラムの試行
 - ①事前指導
 - ②保育所での体験学習
 - ③体験学習の振り返り（事後指導）
 - ④体験学習実施前後の子育てに対する意識調査
- (6) 非体験者への子育てに関する意識調査

2. 平成17（2005）年度の研究経過

- (1) 地域の子育て支援の実態把握のために松戸市子育て支援センター施設の見学および実施状況観察
 - ・まめっちょフロア　・チェリッシュフロア
- (2) 育児体験学習修正プログラムの作成
 - 前年度の体験学習の結果を踏まえ、事前指導・実施・事後指導の内容を改善し修正プログラムを作成
- (3) 中学生の育児体験学習の実践プログラムの試行
 - ①事前指導
 - ②保育所での体験学習
 - ③体験学習の振り返り（事後指導）
 - ④体験学習実施前後の子育てに対する意識調査
- (4) 高校生の育児体験学習の実践
 - ①事前指導
 - ②保育所での体験学習
 - ③体験学習の振り返り（事後指導）
 - ④体験学習実施前後の子育てに対する意識調査
- (5) 育児体験を経験した当事者への聞き取り調査
 - ①松戸市立八柱保育所、野菊野保育園
 - ②松戸市立第一中学校

I. 平成16年度の取り組み

活動内容

I 平成16年度の取り組み

1. 大学を核とした地域との連携の試み

1) 行政との連携

○育児体験学習プログラムの試行にむけて、松戸市役所の保育課を訪ねて（2004.6.24）
保育課長・課長補佐に学術フロンティア推進事業および第1グループの取り組みについて説明し、併せて高校生の育児体験学習の実習園（保育所）を紹介していただくよう協力を依頼した。

市当局：次世代育成の一環としての保育所での育児体験は、厚生労働省でも推奨している事業であり、これまでも、小・中学校の「生活科」や「総合学習」の時間での体験学習は積極的に受け入れてきたので、是非協力したい。そのために、具体的な方法を提示して欲しい。受け入れ時の留意点として、事故の補償・保険の加入や、検便などの感染症対策などリスクマネジメントに留意してほしい。

○松戸市役所保育課より、育児体験学習の受け入れ園として、松戸市立八柱保育所を紹介され、八柱保育所と直接、日程、体験内容等の打合せを行った。

○打合せ内容により、2日間の育児体験学習のプログラムを作成し、要項を松戸市役所保育課と八柱保育所に届けた。

2) 中学校、高等学校との連携

《中学校》

○次世代育成支援にむけて、松戸市内の中学校・高等学校との連携を考えたが、まずは聖徳大学に隣接する松戸市立第一中学校に働きかけることにした。

○第一中学校に出向き、教頭先生と家庭科担当教諭に学術フロンティア推進事業と、次世代育成支援についての共同開発の可能性を打診したが、時間の確保が困難であるなど、あまりよい反応は得られなかった。

《高等学校》

○育児体験学習の試行の参加対象としては、時間的な制約もあり、聖徳大学附属高等学校にお願いした。附属高校では6年生（高校3年生）で保育関係への進学希望者に呼びかけ、15名の参加が決まった。

○育児体験学習の要項と「しおり」を作成して届け、「しおり」を参加者に配布した。

○9月に育児体験学習に参加しなかった6年生を対象に意識調査を実施した。

○年度末に担当教諭に報告書（写真）と、意識調査のまとめと考察を手渡し、来年度も育児体験学習を継続したいと伝えた。その際来年度は「ふれあい体験」とし、学習対象者を広げたいと伝えたが、同意を得ることはできなかった。

2. 高校生の育児体験学習

学術フロンティア推進事業5ヵ年の研究計画の2年目にあたる平成16年度は、実際に「育児体験学習プログラム」を作成し、高校生にこのプログラムを試行した。以下に、プログラムの作成過程、作成したプログラムの内容、プログラムの試行とその結果、および考察と今後の課題について報告する。

1) 高校生の育児体験学習プログラムの作成過程

(1) プログラム作成のための検討課題

本研究1年目に行った幼稚園における子育て支援事業の実態調査、および中学校・高等学校で行われている育児体験の実態調査（資料1. 参照）の結果をもとに本研究グループ独自のプログラム作成に取り組んだ。

現在、既にほとんどの園では、中学生・高校生（以下、「生徒」とする）との異年齢交流が行われており、また多くの学校では保育・職業体験が実施されている。しかしながら、このような交流や体験から、次のような問題点が明らかになった。

①園と学校との連絡の問題

②交流・体験の具体的実施方法に関する問題

③事前・事後指導の内容についての問題

の3点である。プログラム作成にあたっては、これらの問題に本研究グループがいかに取り組むかが検討課題となった。

以下にそれぞれの問題について述べる。

①園と学校との連絡の問題

「1」において本研究グループと行政や学校との連携について前述したとおり、交流・体験に際しては、学校と園とが何度も連絡を取り合い、調整を行う必要がある。その場合、それぞれの組織の管理者同士はもちろんのこと、具体的には学校の担当教諭（家庭科担当教諭であったり、「総合的な学習の時間」の担当教諭であったりする）と園の保育者（主として園長や所長の場合が多い）とがいかに連絡を密にし、調整を重ね、関係を作り上げていくかが交流・体験の成果を左右すると言える。

本研究1年目のアンケート結果（資料1）から明らかなように、学校側は園での体験を希望する生徒全員を送り出す相手先を探すことに苦慮している場合が多い。また、実施にあたって園側の都合が優先され、交流・体験の前後に園と連絡をとりにくいということが問題点として挙がってきている。交流・体験においては、乳幼児の日常の生活に十分配慮した上で、園と学校とが綿密に打ち合わせを行い、生徒と乳幼児の双方にとって積極的な意義ある時間となるよう心がけなければならない。ここに、本研究グループがこの交流・体験における調整役としての役割を果たす意義が求められることになる。

②交流・体験の具体的実施方法に関する問題

本研究1年目のアンケート結果によれば、日程の組み方、次の実施に向けた事後の連絡や反省の機会がもちにくいこと、学校の学事日程へ組み込むことの難しさ、園生活が分断される不都合、学校行事・園行事の間で単発の交流・体験に留まること、事前指導が不十分であること、などが明らかとなった。

本研究グループが連携の調整を行う際には、これらの点について解決していく必要がある。

③事前・事後指導の内容についての問題

多くの学校現場で「総合的な学習の時間」や家庭科の授業を通じて保育・職業体験が行われているが、そこでの事前学習の内容は、園で行う活動の準備（紙芝居、人形劇、合唱など乳幼児の前に出て演じる活動が多い）やおみやげのプレゼント作り、ビデオや講義による学習、そして個人やグループによる課題学習などとなっている。また、職場体験の場合は、「保育者」という職業をよりよく知ることを目的として生徒が主体的に取り組むことが重視され、具体的な事前準備から生徒自身が行うため、学校としての事前指導がほとんど行われていない場合もある。

もっとも、本研究2年目の平成15年6月に視察した静岡県浜松市立可美中学校の職業体験学習のように、大変きめ細かい事前・事後指導を行っている例もある。可美中学校の職業体験学習は、生徒のもっている力を最大限に引き出すことに重点をおいており、生徒に自分の生き方そのものを見つめさせ、人とのかかわりを通して社会の一員としての自覚をもたせることを目的に体験学習が計画的に実践されている。（資料2．参照）

さらに、アンケート結果によれば、学校側の現場の事情として、限られた授業時間数のなかで十分な事前指導が行えないという現状もある。

（2）検討結果

○園と学校の決定

第1回目の試行では、協力校として本学の附属高等学校を選定したため、参加生徒は全て女子になった。また、育児体験学習を行う保育所は、松戸市役所保育課を通じて紹介された「松戸市立八柱保育所」に決定した。

○試行日程の調整

育児体験学習プログラムの実施にあたり、本研究グループが園・学校双方の実施可能な日程や時間の調整を行う必要があった。本研究グループが両者の間に入り、それぞれの授業計画および保育計画においてどのような時期にどのような方法で行うことで実現可能となるかを模索した。その際、留意した点は、園の乳幼児の生活への影響に配慮した時期の設定ということと、生徒の学校生活へ組み込むことが可能な時期

の設定という2点であった。検討の結果、試行時期は夏休み中の2日間に決定した。

検討段階の2番目の課題として、学校のカリキュラムにどう位置づけていくかという問題があったが、今回は授業カリキュラムに影響のない夏休み中を日程に選んだ。そのため学校カリキュラムとの関係は、今後も検討課題として継続することになった。

○人数・対象学年・希望者の募集・生徒の安全確保など

試行時期の検討と同時に、具体的な試行方法についても検討を重ねた。高校生の参加人数はどのくらいまで可能か、対象学年をどうするか、実際の参加者募集をどのように行うか、参加生徒の大学・保育所への往復の安全をどのように確保するか、保育所と高等学校との継続的な連絡（＝保育所での育児体験内容の調整、試行後の成果のまとめと伝達、継続的な取り組みへの努力など）をどのように続けていくか、といったような問題について討議した。

参加生徒の募集に関しては、園と連絡・調整を行い1回の育児体験学習で受け入れ可能な人数を15人～20人とし、実際の募集作業は全面的に高校側にお願いした。その結果、対象学年は附属高等学校6年生（高校3年生）となった。

また、事前・事後指導、園での体験学習全般を本研究の研究員が担当することになった。

○参加希望者への「育児体験学習のしおり」の配布

参加希望者には、体験学習のねらい・集合場所や日時・持ち物・予定表・注意事項などをまとめて冊子にした「しおり」を事前に手元に届くようにした。

○当日のクラス配属・名札

希望者の募集が済んだ時点で、園に参加希望者の名簿を提出した。生徒たちのクラス配属は、園で決めていただいた。乳幼児の生活に負担や悪影響を強いることなく実施するためには、極力、試行日時直前ではなく伝える必要がある。そのために、希望者の募集を早い時期から計画的に行う必要がある。

生徒たちがつける「名札」は、乳幼児に危険のないようにガムテープとマジックを用意し、直接服に貼り付けるものとした。

○事前・事後指導の内容

事前・事後指導の内容は、育児体験学習の目的に応じて考えていく必要があった。まず、体験学習により、乳幼児に対する意識の変化を知るため意識調査を実施した。次に事前指導については、生徒が乳幼児とかかわる際の具体的なかかわり方を知り、安全に乳幼児とふれあうことが出来るような内容を考慮した。人形を使った育児の疑似体験は、一般的にも行われている指導内容の1つではあるが、乳幼児の発達を知るために講義と組み合わせて必要な内容を盛り込むことにした。

事後指導については、体験直後に実習園内において反省会をし、すぐに自分の体

験を振り返ると同時に友達の体験に耳を傾け、保育所長からの話を聞く機会を設けることにした。また、大学に戻り「子ども・子育てに対する意識調査」を行うことで、生徒各自が自分の体験を振り返ることができるようとした。

育児体験学習プログラムは、試行を続けていくなかで園と学校との連携を支えつつ、改善を図っていくものであるとした。

(3) 高校生の育児体験学習プログラムの内容

第1回目の試行案として組み立てたプログラムの概要は以下のとおりである。

【第1回 高校生の育児体験学習プログラム概要】

- 1日目：①事前指導・講義編（大学にて）／「乳幼児の発達と安全」ビデオほか教材使用
②事前指導・実技編（大学にて）／手洗いの仕方、人形を使った抱っこ・授乳・おむつ交換の疑似体験
- 2日目：①育児体験および直後の事後指導（保育所にて）／各自の体験発表
②体験の振り返りの事後指導（大学にて）／意識調査

○育児体験学習の目的

- ・子育ての楽しさや子育ての具体的方法について体験を通して学ぶ。
- ・乳幼児とのふれあいを通して、乳幼児への理解を深める。

○大学での事前指導

オリエンテーション：今回の育児体験学習に関して [10分]

意識調査1：「子ども・子育てに対する意識調査」実施 [30分]

事前指導1：乳幼児の発達の理解（ビデオ視聴と講師による解説）[20分]

※ビデオ教材「初めての一歩」

事前指導2：乳幼児の安全（講師による講義）[20分]

※資料「事故から子ども守るには」朝日新聞記事

事前指導3：育児の方法（人形を使った実技指導）[35分]

①手洗いの仕方とうがい ③授乳の仕方

②抱き方と寝かせ方 ④おむつ交換の仕方

事前指導4：保育所での育児体験についてのオリエンテーション [15分]

○保育所での育児体験

①保育所の概要について（保育所長による講義）[15分]

②0歳児～1歳児との育児体験（抱っこ、おむつ交換、食事風景の観察）
③2歳児～5歳児との育児体験（水遊びの着替えを援助、遊ぶ）} [2時間]

※②と③は、参加生徒15名を2グループに分けローテーションする。

④反省会（体験の発表、保育所長との質疑応答、保育所長の講評）

○大学での事後指導

①「子ども・子育てに対する意識調査」への記入を通じて体験の振り返りを行う。

②体験学習の様子を撮影したビデオを視聴し、感想を述べる。

1時間半

○高校生の育児体験学習実施要項

松戸市役所保育課、松戸市立八柱保育所、聖徳大学附属高等学校へ提出した育児体験学習の実施要項は以下のとおりである。

1. 目的

- (1) 子育ての楽しさや子育ての具体的方法について体験を通して学ぶ。
- (2) 乳幼児とのふれあいを通して、乳幼児の理解を深める。

2. 対象

聖徳大学附属高等学校 3年生の希望者 15名

3. 実施日時・内容・場所

日 時	内 容		場 所
7月28日 (水)	13：00 ～13：45	調査 子育てについての意識調査 事前指導1 乳幼児の発達の理解 事前指導2 乳児と安全	聖徳大学内教室 (7311教室)
	14：00 ～14：45	事前指導3 育児の方法 ・人形による抱っこ ・おむつ交換の体験	聖徳大学内教室 (7313教室)
8月6日 (金)	9：30 ～12：00	育児体験 保育所での育児体験 ・0歳児、1歳児の観察 ・2～5歳児と遊ぶ	松戸市立八柱保育所
	13：00 ～14：00	事後指導 体験のまとめ ・感想文 ・意識調査用紙記入	聖徳大学内教室 (7311教室)

※所在地

松戸市立八柱保育所

松戸市〇〇〇〇〇

聖徳大学・聖徳大学短期大学部

松戸市〇〇〇〇〇

4. 担当者：聖徳大学学術フロンティア推進事業第1部門研究員

5. 服装・持ち物

◇ 7／28（水）：聖徳大学

- | | | |
|-------|-------|-------------------------|
| ・制服着用 | ・筆記用具 | ※持ち物は自己管理する。貴重品は持ち込まない。 |
| ・しおり | ・上履き | ※往復は制服を着用する。 |

◇ 8／6（金）：保育所での育儿体験あり

- | | | |
|--------------------------|------|-------------------------------|
| ・動きやすい服装（ズボン、Tシャツ、体操着など） | | |
| ・上履き | ・帽子 | ※往復は制服を着用し、保育所についてからすばやく着替える。 |
| ・お弁当 | ・飲み物 | ※清潔と安全に配慮した身だしなみを心がける。 |
| ・筆記用具 | ・しおり | ※長い髪は1つに束ね、爪は短く切る。 |

6. 集合場所と時間

- | | | |
|----------|-------|-----------------|
| ・7／28（水） | 13：00 | 聖徳大学 大学7号館1階ホール |
| ・8／6（金） | 9：00 | 新京成電鉄八柱駅南口側交番前 |

7. 保育所での留意事項

- ・乳幼児に身近に接することにより、その発達段階や実際の保育について学ぶ貴重な機会であるので真剣な態度で参加すること。
- ・集合場所までの往復は、事故のないように十分に注意すること。
- ・保育所の職員や保護者には、感謝の気持ちをもって礼儀正しく接すること。
- ・落ち着いた行動と節度ある言葉遣いを心がけること。
- ・子どもたちの生活リズムを壊さないように気をつけ、不明な点は必ずそばにいる保育者に相談しながら行動すること。
- ・勝手な行動は慎まねばならないが、自分にできることを探して積極的に動くこと。
- ・健康管理に留意すること。もし、体調が悪かったら無理をせずに欠席すること。その際、必ず欠席の連絡をすること。

※連絡先電話番号；○○○-○○○○-○○○○

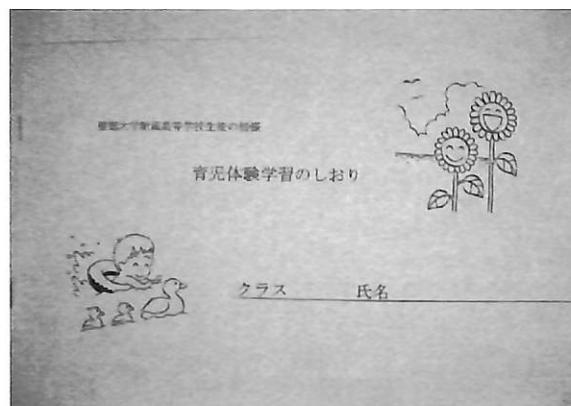
7／28（水）は12：00～13：00の間に連絡を入れる。

8／6（金）は9：00までに八柱保育所に連絡する。

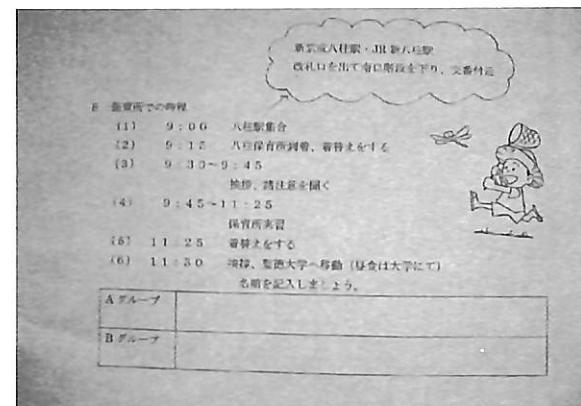
○参加生徒用「育児体験学習のしおり」(H16年度高校生版)

育児体験学習実施に先立ち、聖徳大学附属高等学校の参加生徒用として「育児体験学習のしおり」を作成し事前に配布した。(全8ページ)

「H16年度 育児体験学習のしおり」(高校生)



【図-1 表紙】



【図-2 保育所での予定】

2) 高校生の育児体験学習の試行結果

作成した育児体験プログラムを試行した実際を以下に示す。

(1) 事前指導の様子

育児体験学習の参加者は、聖徳大学附属高校3年生の保育関係への進学希望者15名であった。

○子育てについての意識調査では生徒に緊張の様子が見られたが、ビデオ教材「初めての一歩」の視聴では、担当者による解説に耳を傾け、画面の子どもの様子を真剣に見入っていた。子どものかわいいしぐさには時折笑顔が見られた。

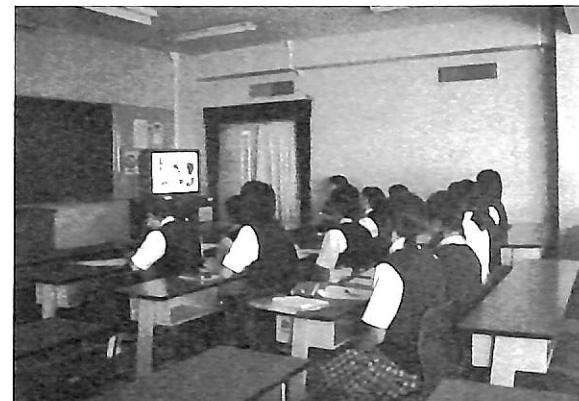
○乳幼児の安全についての講義では、子どもは頭が大きいので転びやすく、また高いところから転落しやすいため、安全には十分留意する事が重要であると聞き、大きく頷く姿があった。

○乳幼児とかかわる前に手を洗うことの大切さについて学んだ後、手洗いの仕方の指導にそって生徒全員が手を洗った。手の甲や指を1本1本丁寧に洗い、「気持ちいい」と感想を言い合い、普段何気なく洗った時よりも清潔に洗えたことを実感したようである。

○育児方法では、講義と違って生徒自身が、実際に正しい手洗いの仕方を体験したり人形を使って擬似育児体験をしたりする内容のため、緊張感もほぐれ少し和らいだ雰囲気となった。

○人形を使って赤ちゃんの「抱き方」や「おむつ交換」の実技を交えた説明では、生徒は真剣な表情で受け止めていた。実際に、人形で擬似体験学習をする時には、「見てみると簡単そうだが、難しい」「人形でも緊張する」などという声が聞かれた。初めは恐々扱っていたが練習を重ねるうちに、次第にコツをつかみ、手つきもよくなり慣れていく様子が伝わってきた。他の生徒が

練習している姿から学ぼうとする様子や納得いくまで「抱き方」や「おむつ交換」を繰り返し試みるなど積極的な取り組みが見られた。事前指導を通して、保育所で乳幼児とかかわる育児体験学習へ向けた期待と意欲が高まっている様子が見受けられた。



【ビデオ視聴の様子】



【手洗いの仕方】



【人形を使った抱っこ】



【人形を使った寝かせ方】



【人形を使った授乳】

<考察>

生徒にとって、育児体験学習を行う会場が聖徳大学の教室であり、しかも、我々研究員とも初対面であったため緊張感が大きかったようである。プログラムを実施するにあたり、今後もこの条件は変わらないことを考えると、少しでも馴染みやすい雰囲気づくりや育児体験学習の内容の組み方を工夫することが生徒の緊張感を和らげることに繋がると感じた。

人形を使っての擬似育児体験では、生徒は人形であるにもかかわらず、本当の赤ちゃんを扱うような思いで抱っこやおむつ交換などに取り組んでいることから、次の保育所での体験学習に繋がると考えられる。このことから育児体験学習の内容の一つとして、人形での擬似育児体験は欠かせない内容であった。

事前指導の時間は、全体で75分としたが、内容からみて少し無理があったように思われた。次回の事前指導には90分の時間を確保し、合わせて内容の充実を検討していくことが大切であると考える。

(2) 八柱保育所での育児体験学習

育児体験学習の第2日目は、午前9時30分から12時まで八柱保育所で行った。生徒は動きやすい服装に着替え意欲的であった。

①保育所長による話

主に保育所の概要説明であり、生徒はメモを取りながら聞いていた。配属クラスや子どもとのかかわりに当たっての注意事項を真剣に頷きながら聞き、早く子どもとかかわりたいという期待と意欲が窺えた。



【所長の話を聞く様子】

②体験内容

保育所で実際に体験した内容は次の通りであった。

- ・ 0～1歳児の赤ちゃんの抱っこやおむつ交換
- ・ 0～1歳児の赤ちゃんの授乳や食事の観察
- ・ 0～1歳児の赤ちゃんをあやす、遊ぶ（水遊び、ふれあい遊びなど）
- ・ 2～5歳児の着替えの介助
- ・ 2～5歳児と遊ぶ（水遊び、プール遊び、体操、ブロックや絵本など）
- ・ 2～5歳児の食事の観察
- ・ 4～5歳児が午睡の布団敷きをする時の援助

③生徒の様子

初めは、戸惑う様子が見られたが、生徒へ興味を示し、かかわってくる乳幼児の相手をしたり、様子を見たりすることで、次第にその場の雰囲気に慣れ、表情も和らいでいった。また、自分から子どもにかかわろうとする姿も出てきた。

<0～1歳児とのかかわり>

乳児を恐々抱っこする手つきは「緊張」「不安」に満ちていたが真剣そのものであった。人形より本当の赤ちゃんは「重い」と実感したようである。次第に乳児の表情や様子を見ながら腕の位置を動かすなど、乳児にとって気持ちよい抱っこの仕方を体験を通して学んでいた。

おむつ交換は、事前指導で人形で擬似体験をしていたが、予想以上に難しい様子で、保育士から具体的にアドバイスを受けながら積極的に取り組んでいた。機嫌の悪い乳幼児や泣いている乳児とのかかわりでは戸惑いが見られた。保育士が、泣いている乳児とかかわると、それまで泣いていた乳児が泣き止み落ち着きを取り戻した。その様子を観察しながら乳児の思いや欲求を受け止め対応する保育士のかかわりに感心していた。



【着替えの介助】

< 2～3歳児とのかかわり >

2～3歳児の着替えの場面では、どのように声をかけたり手伝ったりすればよいのか戸惑っている様子であった。生徒は、子どもにやってあげることが「援助」であり「やさしい」とことと思っていたようであるが、「できるよ、見ててね」と自分に言い聞かせるように頑張



【寝かしつけ】

る子ども、自分でできるのに「やって」と甘える子どももいることに気付き、子どもは一人一人皆違うこと、そしてその幼児に合った援助の難しさを実感したようである。

2～3歳児のクラスでは、乳幼児が持ってきた絵本やブロックの遊びを通して、乳幼児の様子に合わせながらかかわろうとする姿が見られた。乳幼児から話しかけられたり、こちらからの働きかけに乳幼児が応えたりすることに喜びを感じ、「楽しい」との感想が聞かれた。

< 3～5歳児とのかかわり >

3歳以上の配属クラスでは、生徒は幼児に誘われて、一緒に準備体操をすることにより緊張が解けたようである。水遊びの場面では、生徒に興味を示し、故意に水をかける幼児の対応に困った表情ではあったが、次第に衣服が濡れることも気にせず、子どもの要求に応えながら、子どもの思いつくことや子どものすることの楽しさを受け止め、かかわる姿が見られた。濡れた水着を脱いで保育室へ移動の場面では、濡れた床面を拭きながら子どもたちに滑らないように声をかける姿も見られた。

午睡のための布団を敷く場面では、4～5歳児の子どもに敷き方を教えてもらいながら手伝っていた。この年齢になると言葉での説明で内容が伝わることや生活習慣が身に付いていること、何でも自分たちでやっていこうとする意欲、様々なことに興味や関心を示すことに驚いていた。同時に生徒に興味を示しかかわってくる元気のよい幼児の対応に困惑している様子も見られた。

配属クラスの交代時には、「せっかく慣れたのに」と前半に所属したクラスの子どもとの別れを惜しみ、育児体験学習の終了時には「もっと一緒に遊びたい」と子どもとかかわりたいという意欲の高まりが見られた。

③生徒の感想

- ・赤ちゃんは思っていたより「重い」と感じた。赤ちゃんは言葉を話すことはできないが接して慣れてくると表情から赤ちゃんの思いが分かるような気がした。
- ・子どもが話しかけてくれたり、「ニコッ」と笑顔を見せてくれたりした時にはより一層「かわいい」と思った。
- ・子どもって「おもしろい」「かわいい」「元気がいい」と感じた。一つ一つのしぐさや動きがかわいい。また、パワーのすごさを感じた。
- ・子どもは、1歳の違いによって大きな違いがあることを知った。
- ・育児体験学習をする前に思っていたよりも、子どもとかかわるのは難しいと思った。特に4~5歳児は自分でなんでもできるので、実際どのようにかかわったらよいのか困惑した。
- ・もっと、保育所や幼稚園で子どもとかかわりたいという思いが強くなった。そのためにも、子どものことに関して勉強したい。
- ・子どもとかかわると、何か真剣になれるし笑顔になれるし楽しいと感じた。

(3) 事後指導

事後の指導は、体験したことを振り返りその内容を意識していくことに繋がる重要な意味を持つ。また、他の人の意見を聞くことにより多くのことを学び自分の考えを深めていくきっかけともなる。育児体験学習後の感想・反省は、保育所で行ったので、大学に移動後、「子ども・子育てに対する意識調査」アンケートへの記入を通じて育児体験学習を振り返ると同時に、育児体験学習の様子を撮影したビデオを視聴することにした。その時の様子は次の通りである。

①事後アンケートの記入

リラックスした様子ではあるが、質問に対しては、真摯に育児体験学習を思い出したり自分のことを見つめ直したりして考えている様子であった。

②育児体験学習のビデオ視聴

自分が映っている場面を視聴するのは恥ずかしいという声が聞かれた。しかし真剣に見ながら、その時の子どもや自分の姿を確認したり友達と共に感したりしていた。「参加してよかったです」「ちょうど慣れてきたところで終わってしまったので残念な気がする」「もっと子どもと遊びたい」「疲れたけれど楽しかった」「子どもは元気がいい」「かわいい」「子どもは力がある」「赤ちゃんでも握ったり掴んだりする力はすごい」「泣いている赤ちゃんをどうあやしたらいいか分からない」等の率直な感想が聞かれた。

<考察>

生徒は、保育所に到着と同時に、乳幼児のことが気になる様子で、かかわりを求めてくる子どもに対して挨拶を交わしたり手を振ったりし、早くかかわりたいという思いが感じられた。しかし、配属されたクラスでは、友だちと一ヶ所に固まり緊張した面持ちで子どもの様子を見ていた。子どものほうから声をかけられ、かかわるきっかけを得る様子が見られるようになった。しばらく観察してからは、自分から声をかけるなどして自然に乳幼児とかかわっていた。

配属クラスに入った直後は、保育所に着いた時の意気込みとは一転し、一見消極的に見えるが、実は子どもの様子を観察しかかわるタイミングを自分で模索していたのだと捉えることができる。数時間のうちに、生徒も乳幼児も次第に慣れて、かかわりの中で言葉も交わされ、動きも自然になるなど時間と共にうちとけていく様子が伝わってきた。生徒にとって、この最初の出会いは「乳幼児を観察する」貴重な体験として意味がある。生徒のほうから乳幼児とかかわるきっかけは、ほとんどが「もの」(玩具)を媒介にしていた。事前指導で簡単な玩具作りをしたり、その玩具で遊べるようにするなど、かかわりのきっかけづくりなども指導内容に入れていく必要性を感じた。

体験学習を通して、生徒は0～5歳児とかかわり、年齢差による乳幼児の違いを実感し驚いている。また、体験後の感想に見られるように、生徒は、乳幼児と直接かかわることで、今まで想い描いていた乳幼児とは違い、「重い」「力がある」「元気がいい」等、乳幼児の生きる力を実感したようである。また泣いている乳児や欲求をそのままぶつけてくる乳幼児の対応の難しさにも直面している。生徒は、約2時間の中で乳幼児を観察したりかかわったりしたことにより「子ども観」に変化が現れ、ただ、「かわいい」だけではなく、「子どもの対応の難しさ」を感じることができたのである。

育児体験学習後の生徒の感想の中の「もっと子どもと遊びたい」「疲れたけれど楽しかった」「子どもとかかわると、何か真剣になれるし笑顔になれるし楽しいと感じた」などから、生徒にとって育児体験学習が充実したものであったと受け止めることができる。

育児体験学習直後、生徒が感想を述べ合い話し合いをする時間をもつことが可能であれば、生徒自身が子ども・子育てについての意識をさらに高めることに繋がるのではないかと推察できる。このことからも事後指導の持つ意味は重要であるが、時間を改めてとることや場所の確保などが大きな課題である。

3) 「子ども・子育てに対する意識調査」の結果

(1) 体験者の事前・事後の意識調査

1. 事前調査

目的

本調査の目的は、育児体験学習を経験する前の高校生が、子どもや子育てに対して抱いているイメージを明らかにすることである。また、育児体験学習後にも同様の調査を行うことにより、育児体験学習が子どもや子育てなどについての態度に与える影響についても検討する。同時に、育児体験学習プログラムの一環として本調査を行うことにより、参加者の子どもや子育てに対する意識を活性化することも目的とする。

方法

調査対象者 育児体験学習に参加した高校3年生女子 14名

調査項目 調査項目は、以下のようであった。

- ①生育環境：きょうだいの数とそのうちの何番目であるか、幼い頃に年下のきょうだいやいとこと遊んだ経験、幼い頃のいちばん楽しかった思い出、父母の就労状況、幼稚園・保育所への通園状況、学童保育の経験の有無
- ②現在の状況：乳幼児と遊ぶことがあるか、乳児を抱いたことがあるか、乳児の世話をしたことがあるか、小さな子どもに対するイメージとその理由、子育てに対してのイメージとその理由
- ③将来設計：自分の結婚についての考え、自分の子どもについての考え、就労に対しての考え、子どもを育てるのは誰か
- ④この育児体験学習への期待

手続き 調査は、育児体験学習プログラムの一環として、事前指導の冒頭で一斉に行われた。調査用紙を配布し、事後調査との対応をとるための記名を求めた。所要時間は約30分であった。調査項目への回答は、設問により、選択式、自由記述によって行われた。小さな子どもに対するイメージと子育てに対するイメージについては、30項目について5件法で回答を求めた（まったくそうだ：1、まったくそうではない：5）上で、最も強いものを1つだけ選ばせた。

結果

①生育環境

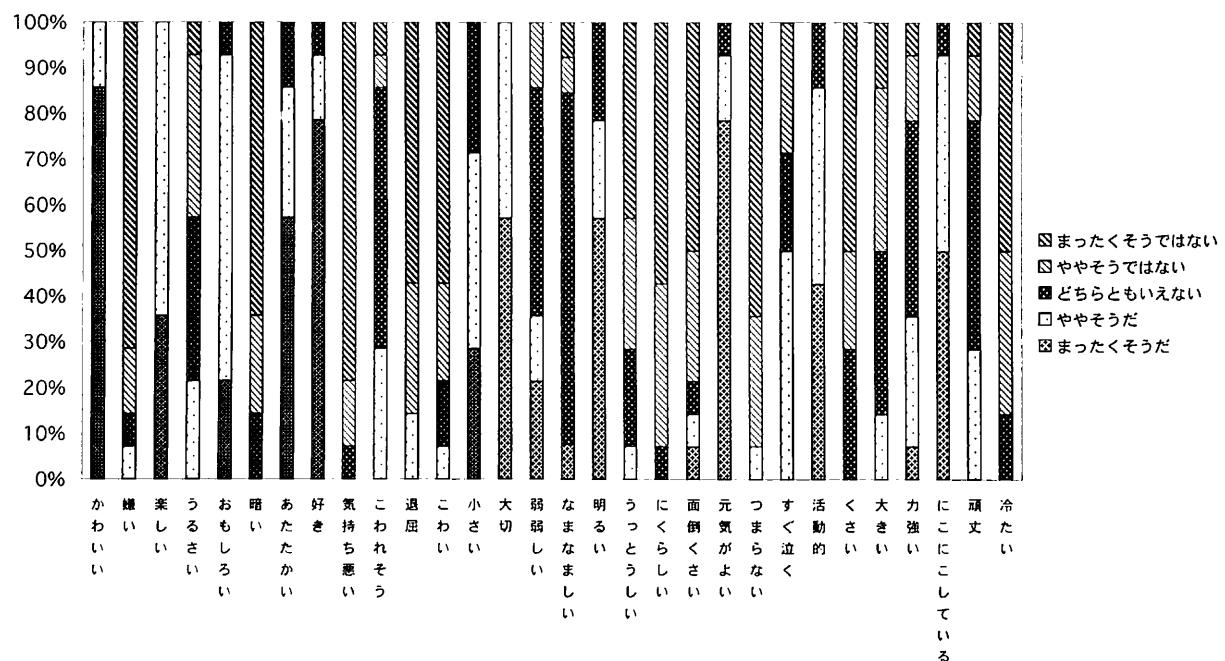
きょうだい数は2人が9名と最も多く、ついで3人が3名、1人が2名であり、そのうち第1子である人が7名、第2子である人が6名、第3子である人が1名であった。幼い頃、年下の子どもと遊んだ経験は、程度の差はあるが、全員が持っていた。

また、幼い頃のいちばん楽しかった思い出については、日常の遊びに関するここと、旅行や遊園地などのイベント的なものが多くあげられた。それらの思い出に登場するのは、日常の遊びに関してはきょうだい、友達が多く、イベント的なものについては家族、親戚が多かった。全員の父親が、対象者が生まれたときから働いており、また、9名の母親が働いていた。母親の就労開始時期は、対象者が生まれたときからが4名、対象者の小学校入学頃からが1名、中学校入学頃からとそれ以降が各2名であった。幼稚園に通っていた生徒が10名、保育所に通っていた生徒が4名であり、通園開始時期は1歳からが1名、2歳からが3名、3歳からが4名、4歳からが5名、5歳からが1名であり、学童保育に通った生徒は1名であった。

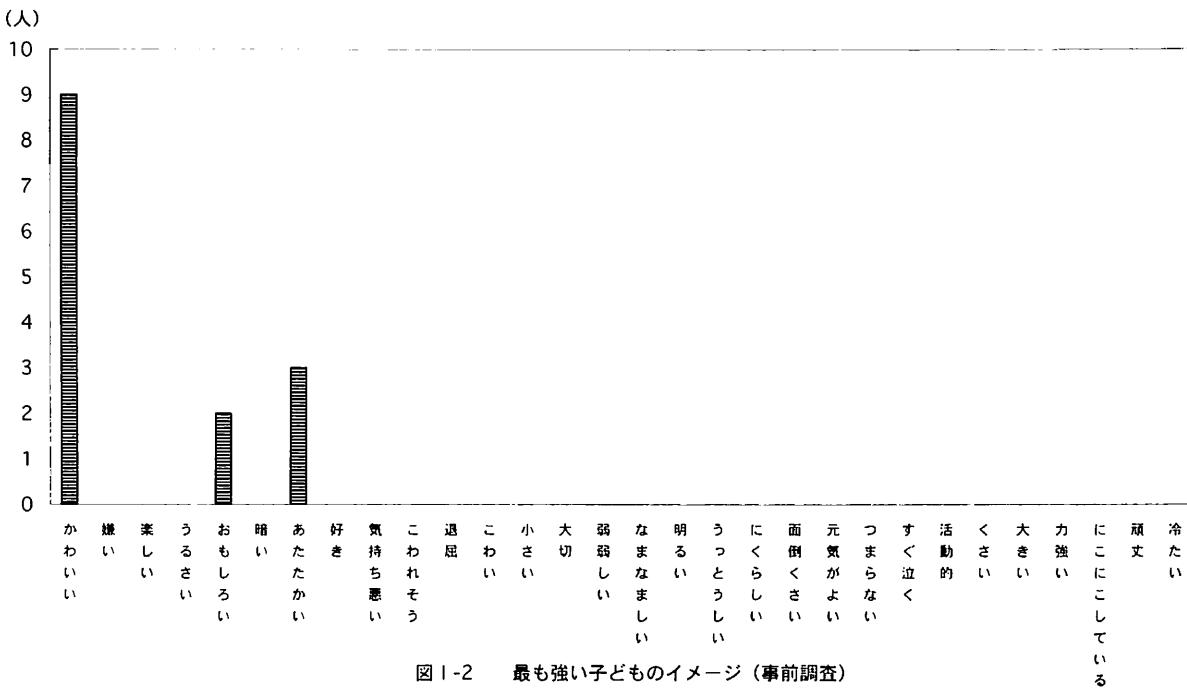
②現在の状況

現在、乳幼児と遊ぶ機会について、たびたび遊んでいる生徒、時々遊んでいる生徒が各2名、あまり遊んでいない生徒、滅多に遊んでいない生徒、まったく遊んでいない生徒が各3名であった。乳児を抱いたことがある生徒は11名、乳児の世話をしたことがある生徒は7名であり、世話の種類としては、遊ぶことをあげた生徒が最も多く7名、ミルクを飲ませたことがあるものが6名、あやすが4名、おむつの交換、着替え、寝かしつけが各2名であった（複数回答）。

小さな子どもに対するイメージの結果を図I-1、図I-2に示す。図I-1は項目ごとの対象者の回答の割合、図I-2はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。



図I-1 子どものイメージ（事前調査）



多くの生徒が肯定したのは、「かわいい」「楽しい」「おもしろい」「あたたかい」「好き」「小さい」「大切」「明るい」「元気がよい」「活動的」「にこにこしている」の項目であり、多くの生徒が否定したのは、「嫌い」「暗い」「気持ち悪い」「退屈」「こわい」「うつとうしい」「にくらしい」「面倒くさい」「つまらない」「くさい」「冷たい」であった。「うるさい」「こわれそう」「弱々しい」「なまなましい」「すぐ泣く」「大きい」「力強い」「頑丈」は、肯定・否定ともにあり、中立の回答も多かった。また、最も強い子どもの印象は、「かわいい」が9名で最も多く、ついで「あたたかい」3名、「おもしろい」2名であった。そのような印象を持つ理由としては、表情や行動、外見をあげる生徒が多く、実際に子どもと接した経験からと答える対象者もいた。

子育てに対するイメージの結果を図I-3、図I-4に示す。図I-3は項目ごとの対象者の回答の割合、図I-4はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

多くの生徒が肯定したのは、「大変」「楽しい」「おもしろい」「当然」「やりがいがある」「しあわせ」「義務」「大切」「むずかしい」「明るい」「元氣がでる」「うれしい」「不安・心配」「よろこび」の項目であり、多くの生徒が否定したのは、「暗い」「損だ」「面倒くさい」「うつとうしい」「苦しい」「不幸」「権利」であった。「社会のため」「老後の保障」「恩返し」「つらい」「疲れる」「得だ」「自分のため」「自分の自由がなくなる」「権利」は、肯定・否定ともにあり、中立の回答も多かった。また、最も強い子育ての印象は「大変」が最多の5名、次いで「しあわせ」3名、「おもしろい」「やりがいがある」「大切」「むずかしい」「元氣が出る」「よろこび」が各1名であった。そのような印象を持つ理由とし

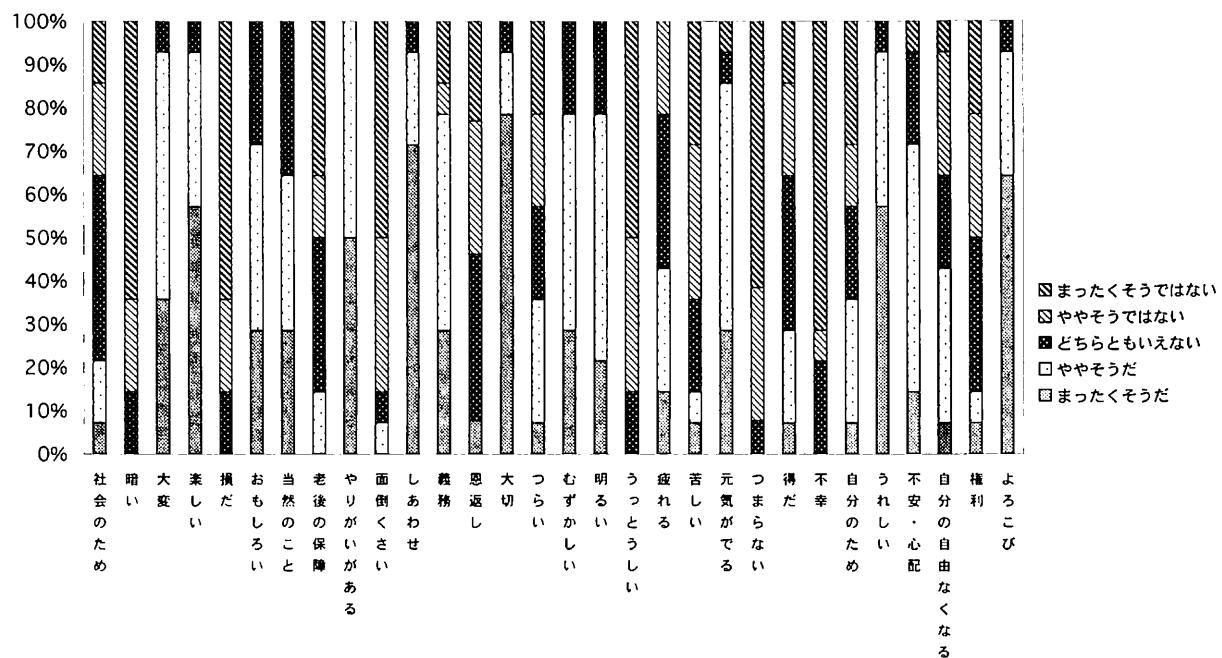


図 I-3 子育てのイメージ（事前調査）

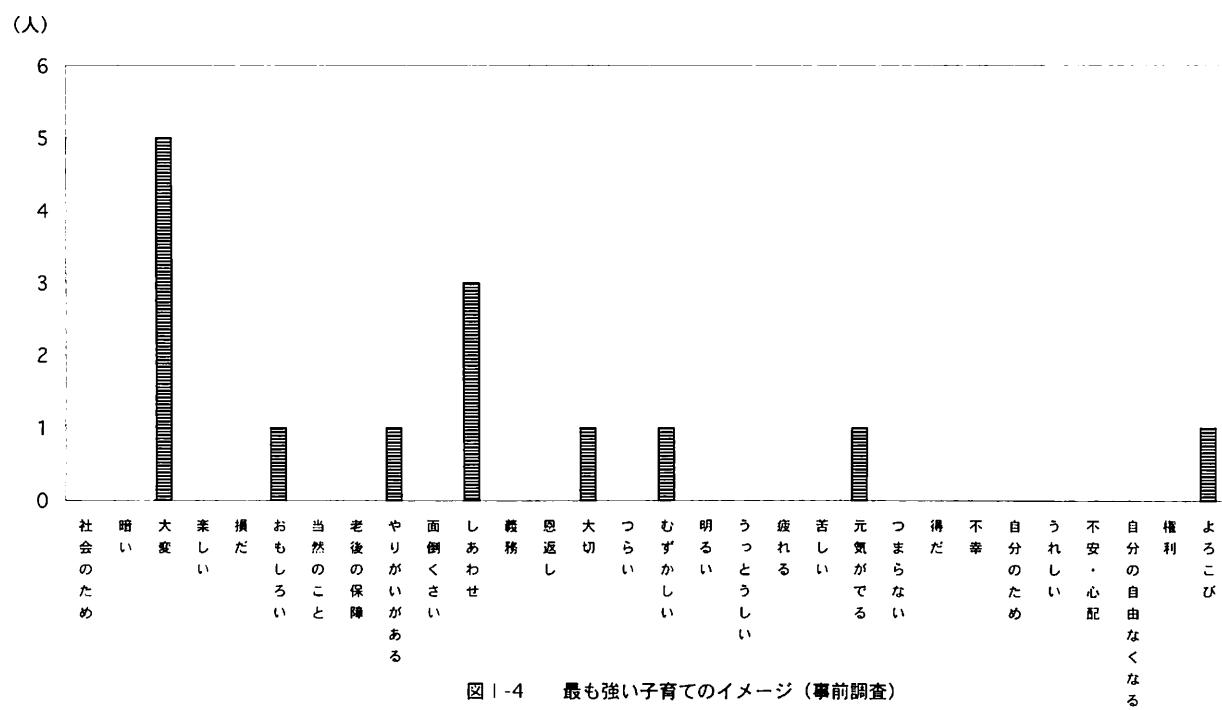


図 I-4 最も強い子育てのイメージ（事前調査）

ては、親や周りの人たちの姿を見たり、話を聞いたりしたことがあげられている。また、乳児の特性（言葉が交わせない、成長する、病気をしやすいなど）や親になるとことそれ自体、現代の社会情勢などもあげられた。

③将来設計

自分の結婚については全員が考えたことがあり、結婚したい生徒が13名、結婚したくない生徒が1名だった。結婚したい理由として、「自分の家庭を持ちたい」13名、「あこがれ」12名、「好きな人と暮らしたい」10名が多く、「なんとなく」2名、「当然のこと」1名、「子どもがほしい」1名であった。結婚したくない理由としては、「面倒くさそう」「必要を感じない」「仕事を続けたい」があげられた（複数回答）。

自分の子どもについても全員が考えたことがあり、ほしい生徒が13名、ほしくない生徒が1名だった。子どもがほしくない生徒は、結婚したくない人と同じである。子どもがほしい理由として、「楽しそう」11名、「あこがれ」「子どもが好き」各10名が多く、「当然のこと」2名、「子どもを持って一人前」1名であった。子どもがほしくない理由としては、「経済的負担が大きい」「今の社会に子どもを送り出したくない」があげられた（複数回答）。

就労について、将来働きたいと考えている生徒は13名、働きたくないと考えている生徒は1名であった、働きたいと考えている生徒に対して、いつまで働きたいかをたずねたところ、「年をとって働けなくなるまで」5名、「子どもができるまで」「結婚あるいは出産まで働き子どもが成長したらまた働く」各3名、「50歳くらいまで」2名、「結婚するまで」1名という回答であった。また、仕事と子育ての両立についてたずねたところ、11名は考えたことがあり、2名は考えたことがなかった。仕事と子育ての両立について考えたことのある生徒に対して、その考え方を問うと「両立させたい」2名、「両立させたいが難しそう」9名であった。

子どもを育てるのは誰だと思うかという質問に対しては、13名が「子どもの両親」と答え、1名が「子どもに関わるすべての人」と答えた。

④育児体験学習への期待

この育児体験学習に期待することとしては、ほとんどの生徒が「子どもの接し方を知りたい」と答えた。また、子どもの心理や行動特性、発達差、個人差などについても知りたいという意見が述べられていた。

考 察

生育環境としてきょうだいの数をきいたところ、多くの生徒がきょうだいがいると答えしており、出生順も上の生徒が多かった。このことによるものか、幼い頃に年下の子どもと遊ぶという経験は全員が持っていたが、高校生となった現在、小さな子どもと遊ぶ機会は

ほとんどなくなったようである。一般に、少子化の影響もあって最近の子どもたちは異年齢児との交流が少なくなってきており、特に自分より年少の子どもと関わる機会がほとんどなく、それが成人後の育児困難と関係しているといわれているが、成長するに伴い、小さい子どもと接する機会が少なくなるということは、この結果からも示されている。このような機会の減少は、たとえば高校生と乳幼児との生活が、時間・空間ともに隔絶していることもその原因の一つと考えられる。上記のようなことが問題であるとするならば、乳幼児や小学生と中学生・高校生とが関わることを保証する必要があると思われる。そのような場の一つとして、本プログラムは考えられるものである。

本調査の対象者は、職業としての保育者を志望するものであり、本プログラムが「職場体験」としてもとらえられている可能性はある。このような対象者の特性のためか、「子ども」に対するイメージは、全体として好意的なものであった。子どものイメージとして最も強いのは「かわいい」であり、そのイメージの源泉は、一般的に流布している子ども観、たまたま見かけた子どもの様子などであり、自分の実感とは隔たった観念としての子どものイメージのように見受けられる。こうした子どものイメージが持たれるのも、子どもと接する場が少ないということがその原因の一つとしてあげられるであろう。

「子育て」のイメージについても同様のことがいえる。全体として子育てを重要なものとして位置づけているが、最も強い子育てのイメージは「大変」というものであった。そのイメージの源泉は、自分の親や周りの人、あるいはメディアなどで見聞きしたことが大きい。次世代を育成する立場にある大人が、次世代に対して「育児は大変」というメッセージを送り続けているのだとしたならば、片方で子どもを増やそうという働きかけをしても、その効果があがるかは疑問である。現在、子育て支援の必要性を訴えるためもあってか、子どもを育てていく上の障害がいかに多くあるか、子育てがいかに大変かということが、連日報道されている。しかしながら、そのような内容を次世代も受け取っているのだということには注意しなければならない。

メディアや身近な人たちからの情報が影響を与えていていると考えられるものとしては、将来の就労についての考え方があげられよう。いわゆる「M字カーブ（女性の就労者が、いわゆる子育て世代に少なく、M字型になっている）」にのった考えをもつ生徒が少なからずいた。また、将来自分の子どもをもちたくないと考える生徒がその理由としてあげていることも、やはりそうであると考えられる。

現在、子どもが減少することの問題として、社会の維持が困難になるということがあげられている。しかしながら、対象者は子育てを「社会のため」「老後の保障」とは言い切っていない。同時に、「自分のため」とも言い切っていない。自分が将来子どもをもちたいと考える理由として、子どもが好きであること、楽しそうであることをあげているのと対照的である。

2. 事後調査

目的

本調査の目的は、育児体験学習を経験した後の高校生が、子どもや子育てに対して抱いているイメージを明らかにすることである。また、育児体験学習前に行った同様の調査と比較することにより、育児体験学習が子どもや子育てなどについての態度に与える影響についても検討する。同時に、育児体験学習プログラムの一環として本調査を行うことにより、参加者が保育所でのふれあい体験を振り返り、そこで得られたものを定着させることも目的とする。

方法

調査対象者 育児体験学習に参加した高校3年生女子15名。うち1名は事前学習を欠席し、事前調査に回答しなかった。

調査項目 調査項目は以下のようであった。

- ①保育所でのふれあい体験：乳幼児と遊んだか、どのような遊びをしたか、その際どのようなことを感じたか、乳児を抱いたか、その際どのようなことを感じたか、乳児の世話をしたか、どのような世話をしたか、実際に乳幼児と関わってみて最も印象に残っていること
- ②現在の状況：小さな子どもに対するイメージとその理由、子育てに対するイメージとその理由
- ③将来設計：自分の結婚についての考え方、自分の子どもについての考え方、就労に対する考え方、子どもを育てるのは誰か
- ④この育児体験学習全体の感想

手続き 保育所でのすべての体験を終えた後に調査を行った。他は事前調査に準ずる。

結果

①保育所でのふれあい体験

保育所で乳幼児と一緒に遊んだかという質問に対しては、程度の差はあるが、全員が遊んだと答えた。遊びの種類については、水遊びが多く、他にもブロックや積み木、車などのおもちゃを使った遊び、ごっこ遊び、抱っこして身体を揺するなどの遊びが行われていた。また、子どもと遊んで感じたことは、楽しかったという感想が多かった。また、遊びの様子から子どもの気持ちを考えたものや、年齢差、個人差についての言及もあった。

乳児を抱いてみた生徒は6名で、その感想としては「あたたかい」「やわらかい」「人形と異なり動く」というものがあげられた。乳児の世話をした生徒は12名で、世話の種

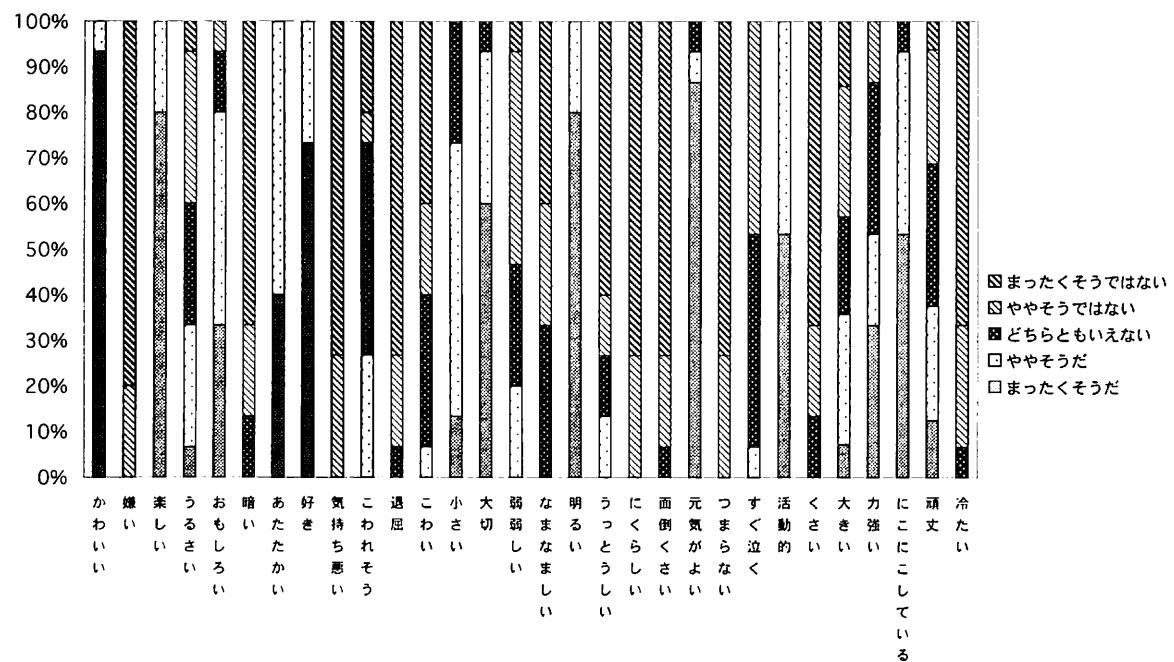
類（複数回答）は「遊ぶ」8名、「着替え」7名、「あやす」4名、「おむつ交換」3名、「食事の片づけ」「手を洗わせる」「寝かしつける」「泣きやませる」各1名であった。

乳幼児と関わって最も印象に残っていることは、「元気がいい」「かわいい」「慕ってくれてうれしい」といった一般的な回答もあったが、多くの生徒が具体的な場面をあげていた。

②現在の状況

小さな子どもに対するイメージの結果を図I-5、図I-6に示す。図I-5は項目ごとの対象者の回答の割合、図I-6はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

多くの生徒が肯定したのは、「かわいい」「楽しい」「おもしろい」「あたたかい」「好き」「小さい」「大切」「明るい」「活動的」「にこにこしている」の項目であり、多くの生徒が否定したのは、「嫌い」「暗い」「気持ち悪い」「退屈」「こわい」「弱々しい」「生々しい」「うつとうしい」「にくらしい」「面倒くさい」「つまらない」「くさい」「冷たい」であった。「うるさい」「こわれそう」「すぐ泣く」「大きい」「力強い」「頑丈」は、肯定・否定ともにあり、中立の回答も多かった。また、最も強い子どもの印象は、「かわいい」が6名で最多であり、次いで「元気がよい」4名、「おもしろい」「活動的」各2名、「にこにこしている」1名であった。そのような印象を持つ理由としては、実際に子どもと接したことや具体的なエピソードをあげる生徒がほとんどであった。



図I-5 子どものイメージ（事後調査）

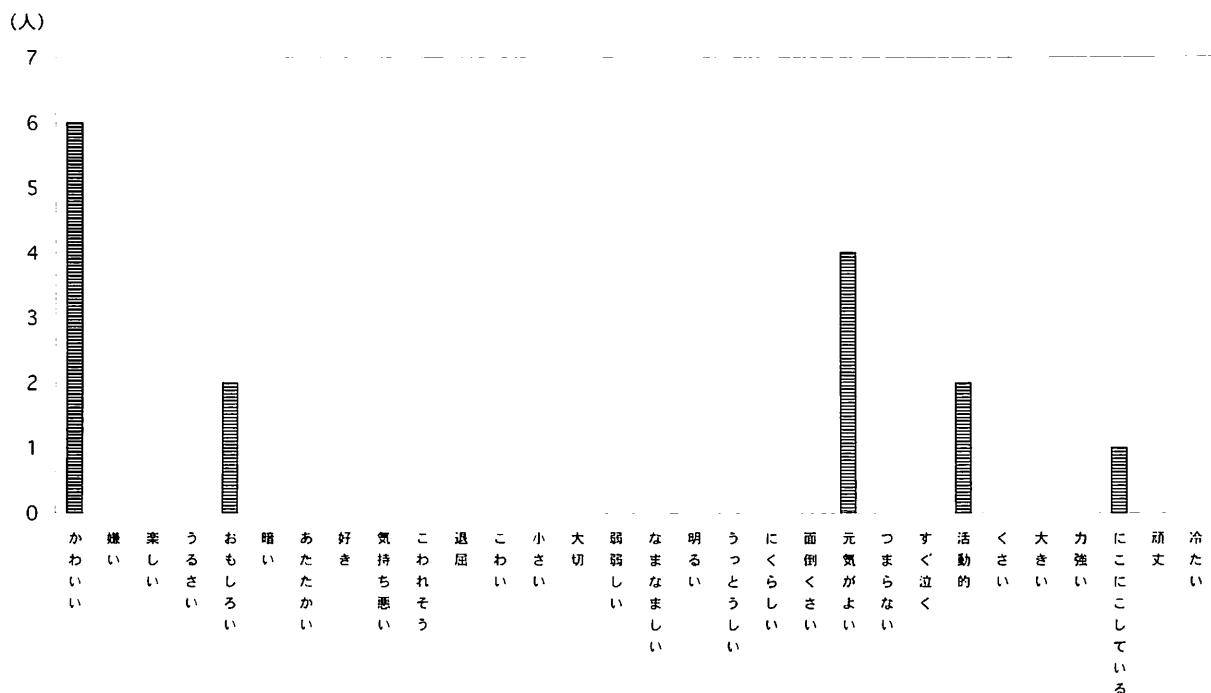


図 I - 6 最も強い子どものイメージ（事後調査）

子育てに対するイメージの結果を図 I - 7、図 I - 8に示す。図 I - 7は項目ごとの対象者の回答の割合、図 I - 8はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

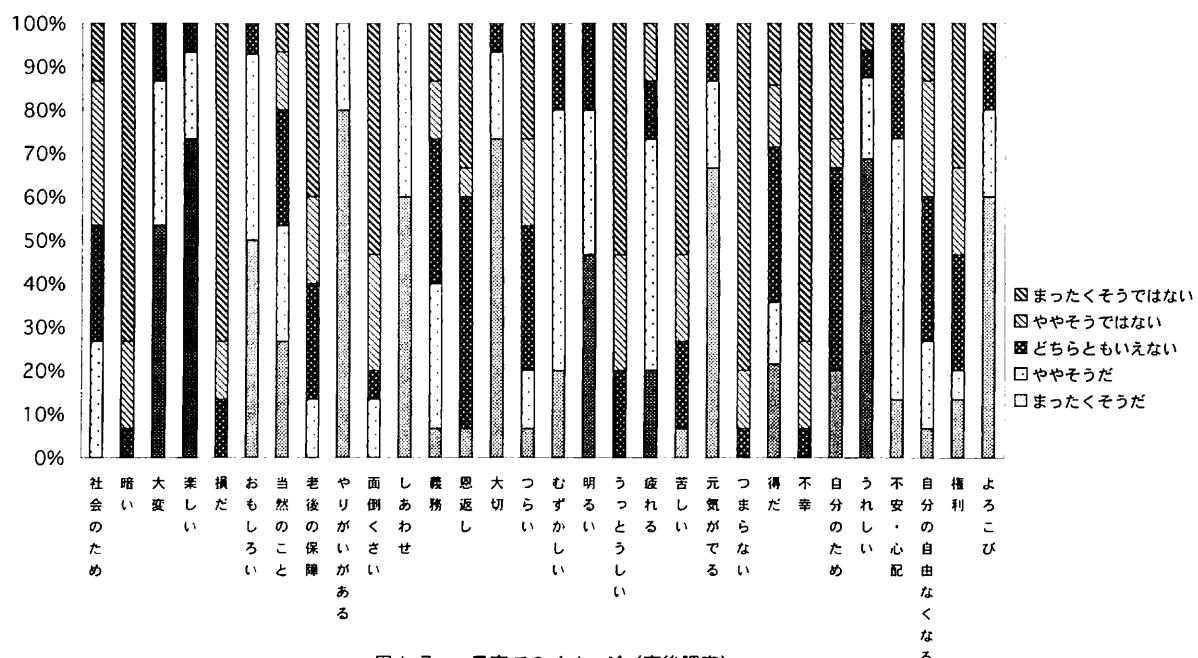


図 I - 7 子育てのイメージ（事後調査）

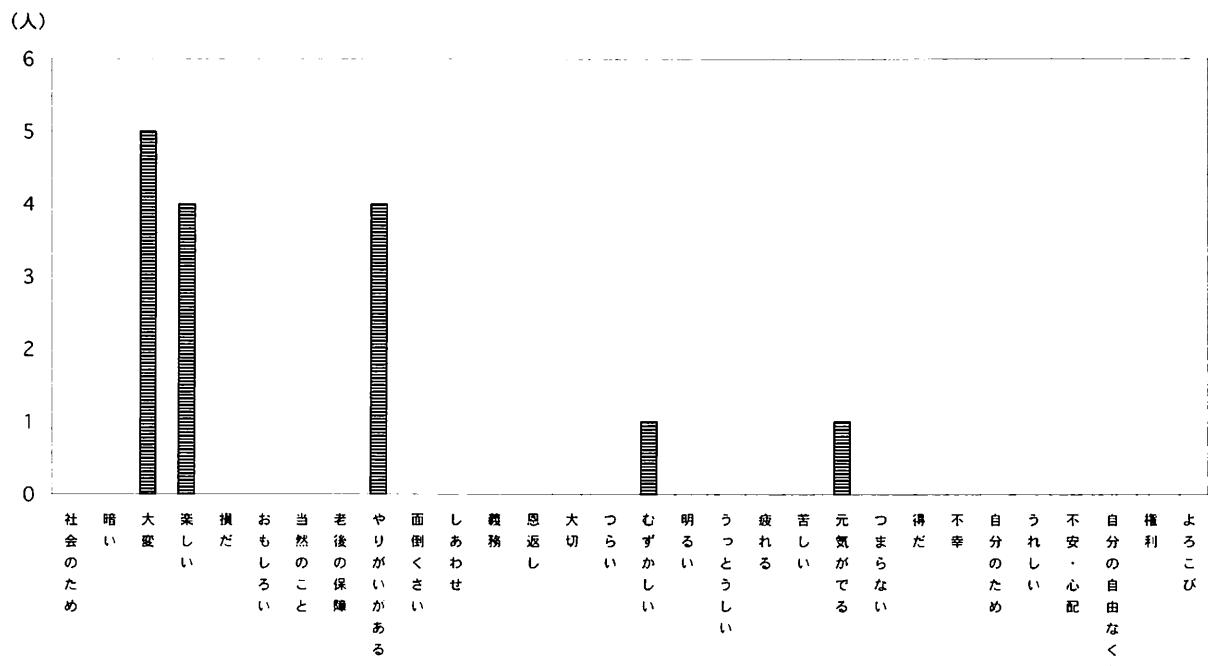


図1-8 最も強い子育てのイメージ（事後調査）

多くの生徒が肯定したのは、「大変」「楽しい」「おもしろい」「やりがいがある」「しあわせ」「大切」「むずかしい」「明るい」「つかれる」「元気がでる」「うれしい」「不安・心配」「よろこび」の項目であり、多くの生徒が否定したのは、「暗い」「損だ」「老後の保障」「面倒くさい」「恩返し」「うつとうしい」「苦しい」「不幸」「権利」であった。「社会のため」「当然のこと」「義務」「つらい」「得だ」「自分のため」「自分の自由がなくなる」「権利」は、肯定・否定ともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子育ての印象は「大変」が最多の5名、次いで「楽しい」「やりがいがある」各4名、「むずかしい」「元気が出る」が各1名であった。そのような印象を持つ理由としては、実際に乳幼児と関わってみて、うれしかったことや思っていたより大変だったこと、子どもの成長を実感したことなどが多くあげられた。

③将来設計

自分の結婚については全員が考えたことがあり、結婚したい生徒が14名、結婚たくない生徒が1名だった。結婚したい理由（複数回答）として、「自分の家庭を持ちたい」13名、「あこがれ」「好きな人と暮らしたい」各12名が多く、「なんとなく」3名、「当然のこと」1名、「子どもがほしい」1名であった。結婚したくない理由としては、「必要を感じない」があげられた。

自分の子どもについても全員が考えたことがあり、ほしい生徒が14名、ほしくない生徒が1名だった。子どもがほしくない生徒は、結婚したくない人と同じである。子

どもがほしい理由として、「子どもが好き」14名、「楽しそう」12名、「あこがれ」11名が多く、「当然のこと」3名、「子どもを持って一人前」2名、「なんとなく」1名であった。子どもがほしくない理由としては、「経済的負担が大きい」「今の社会に子どもを送り出したくない」があげられた（複数回答）。

就労について、全員が将来働きたいと考えていた、いつまで働きたいかをたずねたところ、「年をとって働けなくなるまで」「子どもができるまで」各5名、「結婚あるいは出産まで働き子どもが成長したらまた働く」3名、「50歳くらいまで」「結婚するまで」各1名という回答であった。また、仕事と子育ての両立についてたずねたところ、13名は考えたことがあり、2名は考えたことがなかった。仕事と子育ての両立について考えたことのある生徒に対して、その考え方を問うと「両立させたい」4名、「両立させたいが難しそう」9名であった。

子どもを育てるのは誰だと思うかという質問に対しては、13名が「子どもの両親」と答え、各1名が「地域の人たち」「子どもに関わるすべての人」と答えた。

④この育児体験学習全体の感想

参加者のほとんどが、「楽しかった」「よい経験であった」「充実していた」という感想を書いていた。同時に、子どもと関わることの大変さ、難しさを知ったという意見も多かった。子どもそのものへの興味がより深くなり、将来への希望をふくらませているという生徒も複数みられた。

考 察

前述したが、保育所での「ふれあい体験」に関する質問への自由記述の多くでは、具体的なエピソードが述べられ、それに対する感想が書かれている。具体的なエピソードとは、ある特定の場面での乳幼児の言動であったり、それに対する自分の対応への乳幼児の反応であったりした。感想も、肯定的なものが多い。また、「人形とは違う」という感想を書いた生徒もあり、実際の乳幼児と関わることの意義が、ここにもあるといえよう。

子どもに対するイメージは、事前調査でも好意的であったが、事後調査ではそれがより鮮明になったといえる。最も強いイメージが「かわいい」であることは事前調査と同様であるが、その割合は低下し、他の項目をあげる生徒が多くなった。中でも、事前調査では誰もあげなかつた「元気がよい」が次点であり、これは、育児体験学習の影響であると考えられる。

この設問では、一般論として子どものイメージを問うたが、イメージの源泉として、ほとんどの生徒が保育所での「ふれあい体験」でのエピソードや感想をあげており、このことからも、育児体験学習、中でも実際に乳幼児と接する体験がいかに大きな印象を

残すのかがわかる。しかしこのことは、諸刃の剣でもある。もし、乳幼児との関わりの中でいやな思いをしたとすれば、それは特定のエピソードから子ども一般への感じ方へと容易に変化することが予想できる。今回の参加者は、前述したように、もともと乳幼児と接することへの動機付けが高く、子ども観も肯定的であったため、様々な体験を好意的に受け止めたと考えられるが、今後育児体験学習プログラムを開発していくときには、以上のこと留意する必要があると考えられる。

子育てに対するイメージでは、肯定・否定の割合が変化した項目があった。肯定から否定へ、否定から肯定へという大きな変化ではないが、「当然」「義務」は肯定から中立へ、「老後の保障」「恩返し」は中立から否定へ、「疲れる」は中立から肯定へと変化した。また、子育てに対するイメージのうち、最も強いものとしてあがったのが「大変」であるのは、事前調査と同じであるが、「やりがいがある」をあげた生徒が増え、さらに、事前調査では皆無であった「楽しい」と答えた生徒が、この「やりがいがある」と同数であった。このように、子育てに対するイメージは、事前調査と事後調査とでは大きく変化したが、その原因として、やはり育児体験学習プログラムに参加したことが考えられる。最も強いイメージの源泉について、子どものイメージの時と同様、保育所での「ふれあい体験」でのエピソードや感想、あるいは実体験に裏付けされた知識があげられている。こうしたことから、実際に乳幼児と関わることで、「子ども観」のみならず「子育て観」も変容する可能性が示唆される。

しかしながら、このような体験も、自身の結婚や子ども、就労についての考えをえるまでには至らない。一般論として考えるときと自身の問題としてとらえるときに相違があることはある意味で当然だといえるが、事前調査で「結婚したくない、子どももほしくない」と答えた参加者は、事後調査でも、その理由も含めて同様に答えている。また就労について、どのように働きたいかという質問に対する回答は、事前調査と事後調査とで変化した生徒はいなかった。仕事と子育ての両立に関しては、「両立させたいが難しそう」から「両立させたい」へ変わった生徒が2名いた。参加者が職業としての保育者を志望していることと併せて考えると、育児体験学習に参加したことにより、職業としての保育と自分の子どもを育てることとの双方への意欲が、より高まったといえるのではないだろうか。

以上のように、育児体験学習プログラムは、参加者の子どもや子育てに対するイメージに正の影響を与えるといえる。特に乳幼児と直接関わることで、現実の乳幼児を実感し、相互交渉の相手として乳幼児をとらえることを可能にし、さらに、個人差や発達差を目の当たりにすることにより、乳幼児が成長途上にあることを認識する。このような体験は、現在小さな子どもと関わる機会のほとんどない高校生にとって貴重なものであろう。

(2) 非体験者の意識調査

目的

本調査の目的は、育児体験学習を経験しない高校生が、子どもや子育てに対して抱いているイメージを明らかにすることである。加えて、体験者の事前調査の結果と比較することも目的とする。

方法

調査対象者 育児体験学習への参加者と同じ高校に通う高校3年生女子138名

調査項目 体験者への事前調査の項目に準ずる。ただし、④育児体験学習への期待は除いた。

手続き 体験者への調査手続きに準ずる。ただし、実施は学校に依頼し、記名も求めなかつた。

結果

①生育環境

きょうだい数は2人が49%と最も多く、ついで3人が27%、1人が17%、4人と5人以上が各4%であり、そのうち第1子である人が51%、第2子である人が38%、第3子である人が10%、第4子である人が1%であった。幼い頃、年下の子どもと遊んだ経験は、「いつも遊んだ」36%、「たびたび遊んだ」22%、「時々遊んだ」20%、「あまり遊ばなかった」7%、「滅多に遊ばなかった」5%、「まったく遊ばなかった」9%であった。また、幼い頃のいちばん楽しかった思い出については、日常の遊びに関するここと、旅行や遊園地などのイベント的なものが多くあげられた。それらの思い出に登場するのは、日常の遊びに関してはきょうだい、友達が多く、イベント的なものについては家族、親戚が多かった。96%の父親が働いており、そのうちの97%が対象者が生まれたときから働いている。64%の母親が働いており、母親の就労開始時期は、対象者が生まれたときからが40%、3歳頃からが3%、対象者の小学校入学頃からが22%、中学校入学頃からとそれ以降が各17%であった。幼稚園に通っていた生徒が74%、保育所に通っていた生徒が26%であり、通園開始時期は0歳からが8%、1歳からが5%、2歳からが7%、3歳からが37%、4歳からが36%、5歳からが7%であり、学童保育に通った生徒は20%であった。

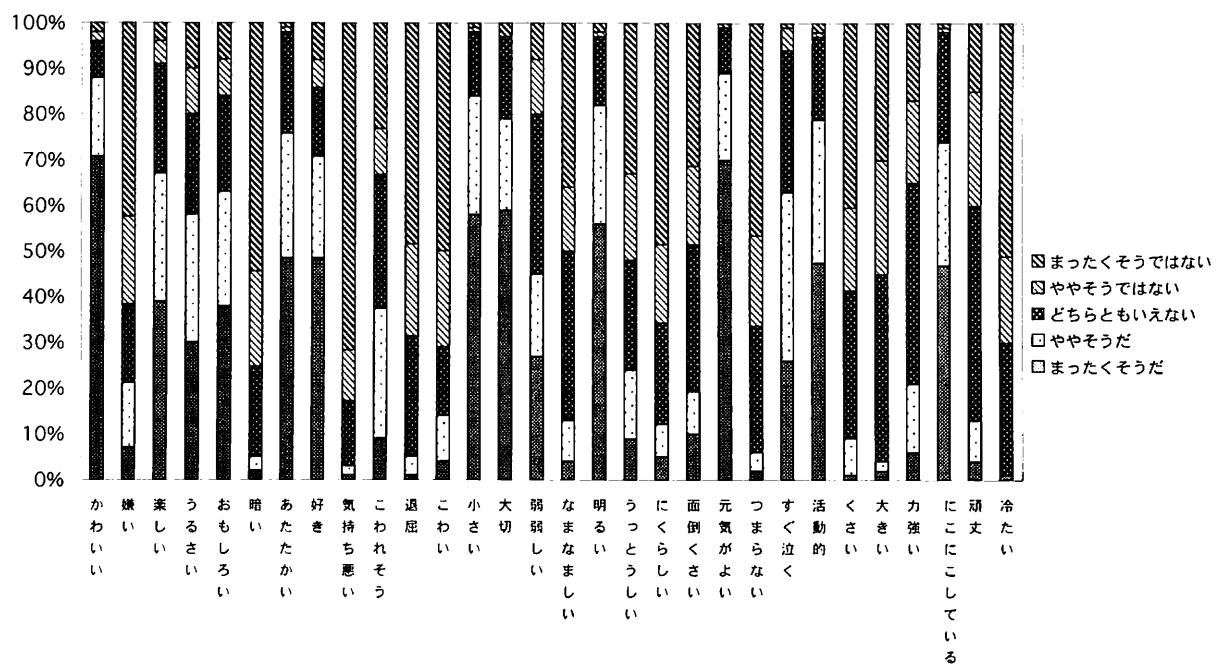
②現在の状況

現在、乳幼児と遊ぶ機会について、「いつも遊んでいる」3%、「たびたび遊んでいる」14%、「時々遊んでいる」25%、「あまり遊んでいない」10%、「滅多に遊んでいない」18%、「まったく遊んでいない」30%であった。乳児を抱いたことがある生徒は

82%、乳児の世話をしたことがある生徒は59%であり、世話の種類としては、遊ぶことをあげた生徒が最も多く23%、あやすが21%、ミルクを飲ませる、寝かしつけるが各12%、おむつの交換、着替えが各11%、ミルクの用意が6%、お風呂に入れるが3%であった（複数回答）。

小さな子どもに対するイメージの結果を図I-9、図I-10に示す。図I-9は項目ごとの対象者の回答の割合、図I-10はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

半数以上の生徒が肯定したのは、「かわいい」「楽しい」「うるさい」「おもしろい」「あたたかい」「好き」「小さい」「大切」「明るい」「元気がよい」「すぐ泣く」「活動的」「にこにこしている」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「嫌い」「暗い」「気持ち悪い」「退屈」「こわい」「うつとうしい」「にくらしい」「つまらない」「くさい」「大きい」「冷たい」であった。「こわれそう」「弱々しい」「なまなましい」「面倒くさい」「力強い」「頑丈」は、肯定・否定ともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子どもの印象は、「かわいい」が46%で最も多く、ついで「うるさい」「元気がよい」が各10%、「あたたかい」9%、「すぐ泣く」5%、「おもしろい」5%、「小さい」3%、「大切」「明るい」「にくらしい」「活動的」「にこにこしている」各2%、「楽しい」「好き」「弱々しい」「うつとうしい」「くさい」各1%であった。そのような印象を持つ理由としては、表情や行動、外見をあげる生徒が多く、実際に子どもと接した経験からと答える対象者もいた。



図I-9 こどものイメージ（非体験者）

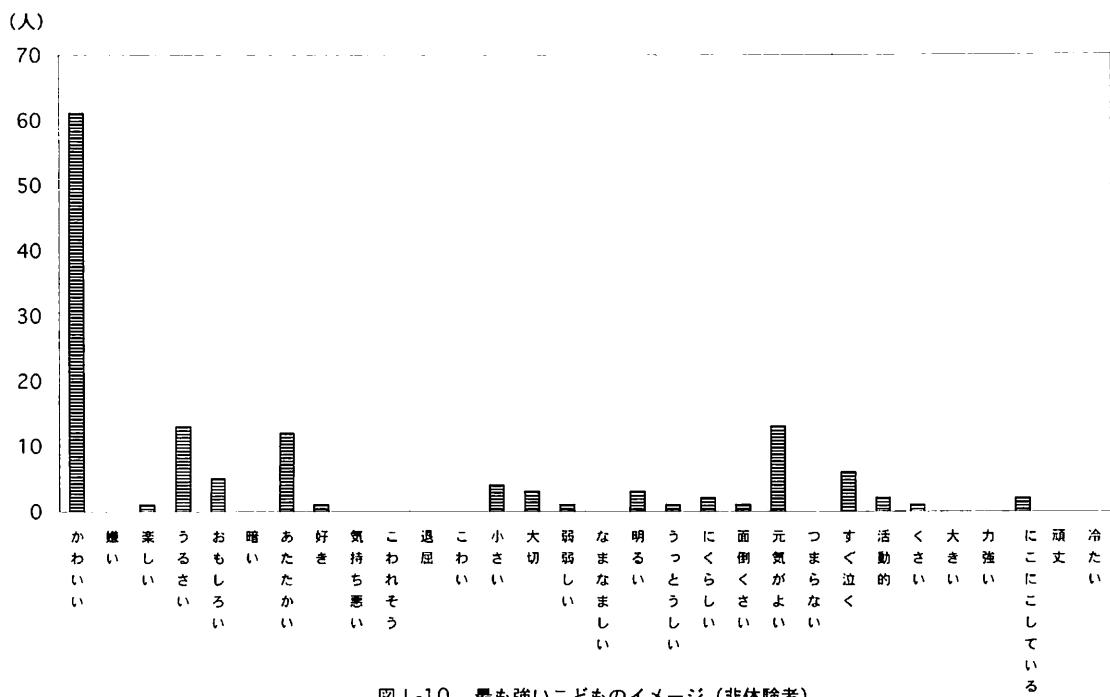


図 I-10 最も強い子どものイメージ（非体験者）

子育てに対するイメージの結果を図 I-11、図 I-12に示す。図 I-11は項目ごとの対象者の回答の割合、図 I-12はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

半数以上の生徒が肯定したのは、「大変」「楽しい」「おもしろい」「当然」「やりがいがある」「しあわせ」「義務」「大切」「むずかしい」「明るい」「疲れる」「元気ができる」「うれしい」「不安・心配」「よろこび」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「暗い」「損だ」「うつとうしい」「つまらない」「不幸」であった。「社会のため」「老後の保障」「面倒くさい」「恩返し」「つらい」「苦しい」「得だ」「自分のため」「自分の自由がなくなる」「権利」は、肯定・否定ともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子育ての印象は「大変」が最も多く24%、次いで「しあわせ」21%、以下、「大切」「よろこび」各7%、「楽しい」6%、「やりがいがある」「不安・心配」各5%、「むずかしい」「自分の自由がなくなる」各4%、「当然のこと」「疲れる」各3%、「義務」「つらい」「元気ができる」「うれしい」各2%、「社会のため」「暗い」「おもしろい」「面倒くさい」「恩返し」「明るい」各1%であった。そのような印象を持つ理由としては、親や身近な人たちの姿を見たり話を聞いたりしたこと、テレビなどからの情報、好きな人と結婚することを前提とした理想の家族像などがあげられている。また、乳児の特性（泣く、成長する、病気をしやすい、世話を必要など）や親になるということそれ自体、現代の社会情勢などもあげられた。

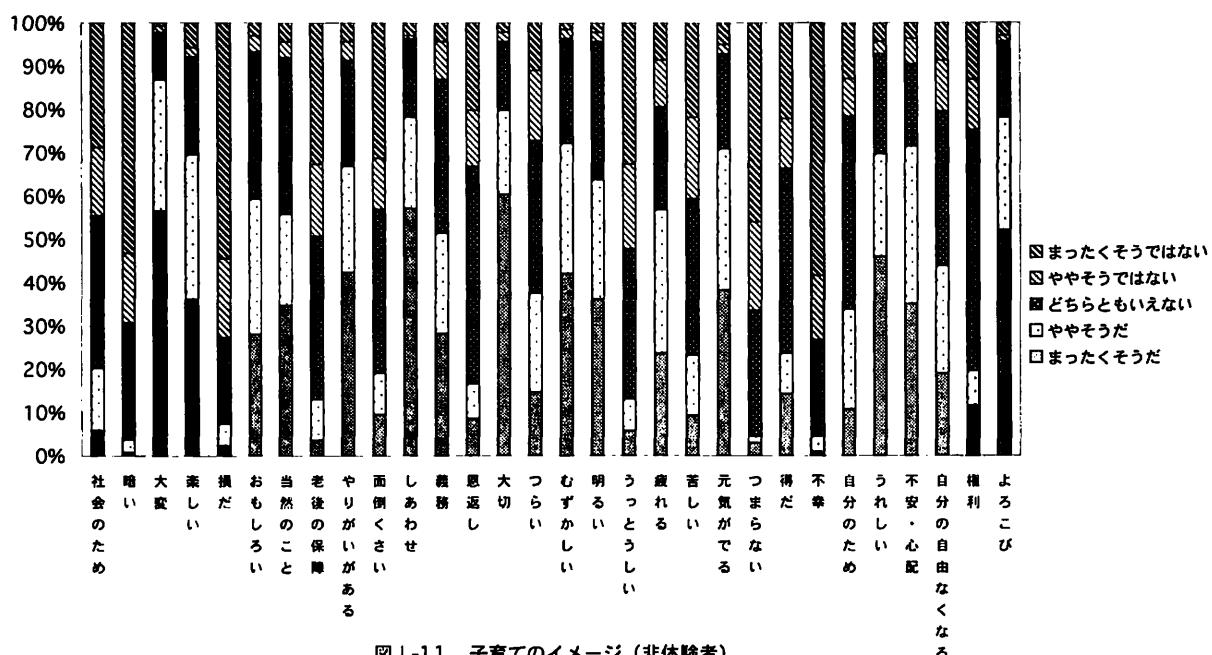


図1-11 子育てのイメージ（非体験者）

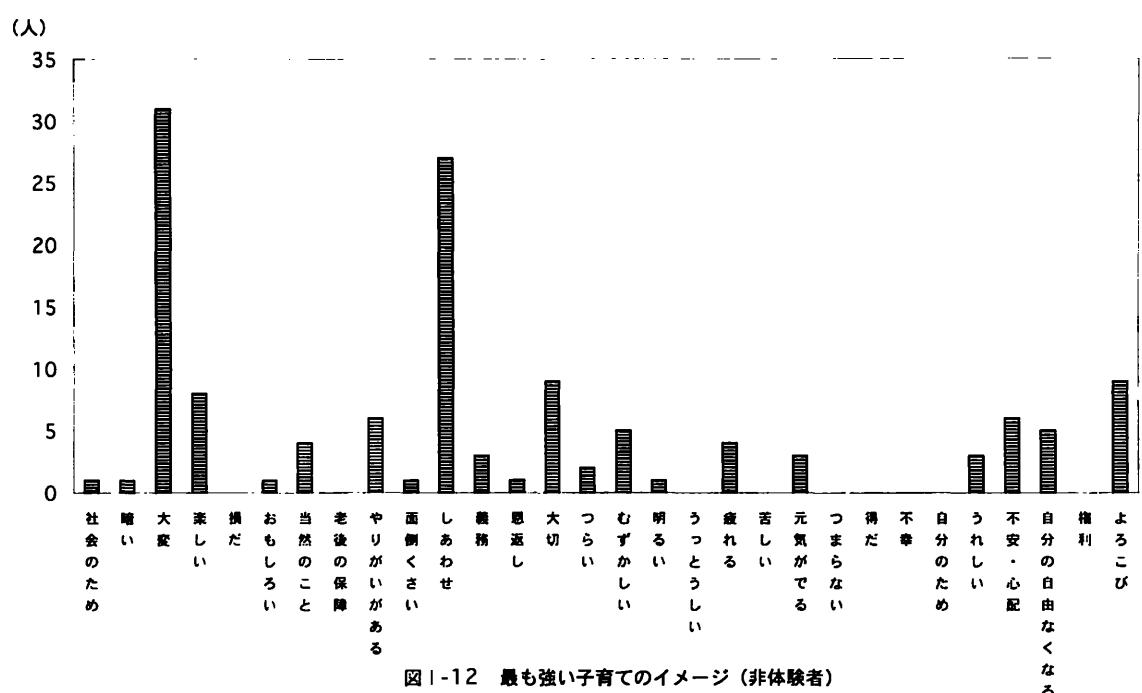


図1-12 最も強い子育てのイメージ（非体験者）

③将来設計

自分の結婚については88%が考えたことがあり、そのうち結婚したい生徒が85%、結婚たくない生徒が15%だった。結婚に肯定的な理由として、「好きな人と暮らしたい」22%、「自分の家庭を持ちたい」21%、「あこがれ」19%が多く、「なんとなく」9%、「当然のこと」5%、その他として「(好きな人との)子どもがほしい」「遊びたい」があった。結婚に否定的な理由としては、「仕事を続けたい」6%、「一人で自由に暮らしたい」5%、「面倒くさそう」「必要を感じない」各3%、「自分には結婚生活に向いていない」2%、「結婚に幻滅している」1%、その他として「まだやりたいことがある」「まだ自分に自信がない」「うざい」「嫌い」があげられた（複数回答）。

自分の子どもについては86%が考えたことがあり、そのうちほしい生徒が87%、ほしくない生徒が13%だった。子どもがほしい理由として、「楽しそう」22%、「あこがれ」「子どもが好き」各19%が多く、「子どもを持って一人前」7%「なんとなく」6%、「当然のこと」5%、その他として「自分の遺伝子を残す」「老後が不安」「好きな人の子どもがほしい」「自分の親を早く亡くしたので一緒にいたい」「やらせたいことがある」「理想の家族像がある」があった。子どもがほしくない理由としては、「自分には子どもは育てられない」4%、「面倒くさそう」「一人で、あるいは配偶者と二人だけで暮らしたい」「経済的負担が大きい」「子どもが嫌い」「自分のやりたいことのじゃまになる」各3%、「自分の遺伝子を残したくない」「今の社会に子どもを送り出したくない」各1%、その他として「今は自分のことが先」「よけいなものはいらぬい」があげられた（複数回答）。

就労について、将来働きたいと考えている生徒は92%、働きたくないと考えている生徒は8%であった、働きたいと考えている生徒に対して、いつまで働きたいかをたずねたところ、「年をとって働けなくなるまで」36%、「50歳くらいまで」19%「子どもができるまで」22%、「結婚するまで」15%であり、その他としては「結婚あるいは出産まで働き子どもが成長したらまた働く」「自分の気の済むまで」という回答がそれぞれ複数あった。また、仕事と子育ての両立についてたずねたところ、60%は考えたことがあった。これらの生徒に対して、その考え方を問うと「両立させたい」38%、「両立させたいが難しそう」52%、「両立しない」6%、「自分には関係がない」2%、「この2つを対立させること自体がおかしい」1%であった。

子どもを育てるのは誰だと思うかという質問に対しては、76%が「子どもの両親」と答え、「子どもの母親」11%、「子どもの祖父母」「幼稚園や保育園の、学校の先生」各3%、「子どもの父親」2%、「地域の人たち」1%、また、「その他」3%はすべてが「子どもに関わるすべての人」と答えた。

考 察

対象者の人数に大きな隔たりがあり、直接比較することはできないが、育児体験学習プログラムの非体験者の回答の傾向は、体験者の事前調査のそれとほぼ同様であるといえる。このことから、プログラムへの参加者は保育者を志望してはいるが、これまでの子どもと関わった体験や、子どもや子育てに対する興味が、非参加者に比べて特に優っているというわけではなく、同時に子ども観や子育て観も、同じ年代の者が持つそれと何ら変わることろがないと考えられる。強いていうならば、非体験者の中には子どもや子育てに対して、あるいは自分の結婚や子どもに対して否定的なイメージを持つもののがいるという点が異なる。そして、このような考えを持つ者は、必ず一定の割合で存在するのではないだろうか。

次世代育成ということから考えると、特に職業として保育者を志しているわけではない生徒たちが、育児体験学習プログラムに参加することの意義は大きいと考えられる。非体験者の多くは、子どもや子育てに対して、あるいは、自分の結婚や子どもに対して肯定的なイメージを持っており、こうした生徒が育児体験学習に参加することで、より肯定的な考えが強くなることは、体験者の結果から推測できる。また、否定的なイメージを持つ生徒に対しても、自身のことについての考えは変わらないかもしれないが、一般的な子ども・子育てに対するイメージは変化する可能性がある。子ども・子育てのイメージが、否定的なものからより肯定的なものになれば、将来、他人の子どもや子育てに対して寛容な気持ちを持つことができるだろう。これも、大きな意味での育児支援であり、次世代育成といえるのではないだろうか。

II. 平成17年度の取り組み

Ⅱ 平成17年度の取り組み

1. 大学を核とした地域との連携の試み

1) 行政との連携

- 5月初旬に松戸市役所保育課を訪問し、平成16年8月に松戸市立八柱保育所で実施した高校生の育児体験学習の報告書を手渡し、平成17年度も引き続き保育所での育児体験学習を継続していきたいという希望を伝え、協力をお願いした。
- 5月下旬に育児体験学習の受け入れ園を尋ねると、昨年同様八柱保育所でとの返答があり、「子ども子育て応援プラン」に沿って、体験学習の受け入れは八柱保育所の業務分担となったようである。

2) 松戸市子育て支援センターの見学

現在、松戸市内には地域子育て支援センターが下記の3カ所に開設され、

- ◇子育ての悩みと一緒に考える（電話・面接・メール）
◇子育てに関する情報を提供（子育て情報誌・子育てミニ講座）
◇子育てサークルの育成・支援
(サークル作りの手伝い・サークル活動の支援・運営の相談)
◇地域の保育の情報と集いの場の提供

などを主な内容として活動し、松戸市の広報やホームページで紹介している。

<http://www.intership.ne.jp/kosodate/>

♥ CMS 子育て支援センター	♥ チェリッシュサポートシステム	♥ 子すずめ子育て支援センター
電話相談（8:30～17:00） キッズテレホン 047-394-5590 CMS わくわくフロア ・毎週火曜日 9:30～11:30 (年齢制限はありません) ・毎週金曜日 9:30～11:30 (1歳半迄のお子さんと保護者) あおぞら教室 月1回木曜日 11:00～11:30 講座（毎月1回）要予約 ・ズバリ子育て講座 ・ベビーマッサージ 情報誌（年4回発行） CMS Letter サークル支援 必要に応じて	電話相談（8:30～17:00） チェリッシュテレホン 047-308-5880 チエリッシュフロア ・毎週火曜日 9:30～11:30 (年齢制限はありません) チエリッシュベビーフロア ・毎週金曜日 9:30～11:30 (1歳未満のお子さんと保護者) チエリッシュサロン 月1回 要予約 講座 詳細はチエリッシュだよりにて 情報誌（年4回発行） チエリッシュだより サークル支援 必要に応じて	電話相談（8:30～17:00） 子すずめテレホン 047-387-0124 まめっちょフロア ・毎週火曜日 9:30～11:30 (2歳までのお子さんと保護者) ・毎週水曜日 9:30～11:30 (2歳以上のお子さんと保護者) ・毎週金曜日 14:30～16:30 (2歳以上のお子さんと保護者) まめっちょサロン 月1回 要予約 まめっちょ講座 詳細はまめっちょだよりにて 言葉の相談 要予約 言語聴覚士によるものです 情報誌（毎月発行） まめっちょだより サークル支援 必要に応じて

私は中学生の育児体験学習を視野に入れながら、チェリッシュフロアとまめっちょフロアの2ヵ所を見学した。

〔チェリッシュフロア〕 平成17年4月1日(金) 10:00~11:30

野菊野保育園 (松戸市野菊野5 TEL 308-5880)

○1歳未満児の赤ちゃん対象のベビーフロアが4月から金曜日に開催されることになり、その初日であった。

1階の乳児プレイルーム(10組限定)に遊具が用意してあり、10時過ぎに5組の親子が参加していた。

乳児はそれぞれ思い思いに遊び、母親同士が子どもの遊びを見ながらおしゃべりをしているのをフロア担当の3人の保育士が見守っていた。

最終的には9組の参加があり、今まで火曜日のフロアに参加していた人と初めての人とが半々の割合で赤ちゃんの月齢も様々であった。



図II-1
チェリッシュベビーフロア

○センター長(野菊野保育園副園長) チェリッシュテレフォン担当保育士との懇談より

- ・電話相談の中で、引っ越してきて友達がない、初めての子育てで不安という声などがベビーフロアを始めるきっかけになった。
- ・チェリッシュフロアは毎週火曜日9:30~11:30に野菊野保育園の2階ホールで開催しているが、平成17年4月より毎週金曜日に1歳未満の赤ちゃんを対象にベビーフロアを10組限定で開催することになった。
- ・火曜日は0歳~3歳児の親子(休み中は4~5歳児も参加)が平均50組参加し、子育て支援センターのスタッフ2名が対応している。

子どもを遊ばせながら、母親からの相談に応じ、終了前に子育て情報を提供したり、みんなで手遊びや触れ合い遊びをするなど遊びの紹介をしている。

- ・地域に存在する50程のサークルにも相談を受けたり教材を貸し出すなどのサポートをしている。
- ・野菊野保育園には学童保育もある。
- ・3年前より、デイサービスセンター「エルダー野菊野」が併設され、センター長が兼務している。保育園児とデイサービス利用の高齢者の交流も定期的に行っている

が、回を重ねる度に園児の高齢者に対する違和感がなくなり、積極的に交流を楽しめるようになってきた。

- ・地域との連携として、近隣の小学2年生が総合学習で10数人保育園に来る。4~5歳児を対象に遊べるものを持ってきて一緒に遊んだり歌を歌ったり、ゲームをしたりすることが多い。
- ・近隣の中学校から職場体験で各学校6~7人の生徒が来る。園児とも遊ぶが、「保育士の仕事」に視点をおくようにしている。
- ・6年前より市の広報で募集し、夏休みに高校生を対象に、5日間の「保育体験サマースクール」を実施している。

最初の2日は午前のみで、夏祭りなども経験できるようになっている。参加者は検便、短期保険加入を義務付けている。

★中学生の育児体験と一緒に進めていきたいという希望をもって見学したが、是非中学生に体験させたいと感じる見学であった。

まめっちょフロア 4月6日(水) 10:00~12:00

子すずめ保育園 (松戸市日暮1-8-4) TEL 387-0124

- ・昭和46年に働く親達が作った保育園で現在110名の園児が在籍している。

- ・平成16年3月に3階建てに改築、完成した園舎で、明るく内部は木材が多く使われ、檜の香りに包まれていた。
- ・1階は0歳児1クラス（2週間の慣らし保育期間で泣いている乳児がいたり、保育士と共に乳児の世話をしている新入園児の母親の姿も見られた。）と1・2歳児の混合3クラス、2階に3・4・5歳児の混合3クラスの保育室があり、3階に調理室とホールが設置されていた。

- ・3階のホールで2歳未満児対象のまめっちょフロアが開催（9:30~11:30）されており、10組の親子が参加して自由に遊んだり、母親同士がおしゃべりしていた。その中で経験豊かな専任の保育士と言語聴覚士の2名が自然な感じで母親とコミュニケーションをとっていた。



図II-2
子すずめ保育園

○園長先生との懇談より

- ・平成15年10月より松戸市の委託を受けて、子育て支援フロアを開催している。広報松戸やインターネットを見て参加した人もいるが、殆どの参加者が病院や公園などでの口こみでフロアに参加しており、母親のネットワークの凄さに驚いている。無料で来やすいということが、最も大きいのではないかと思うが、そのいずれにも該当しない家庭が心配で、保健所などとつながる必要を感じている。
- ・保育園の職員体制も余裕をもてるようになっているが、松戸市から補助金が出るので、フロアにも主任保育士を経験した経験豊かな保育士と言語聴覚士を配置することができ、やってよかったです。
- ・学童保育もあり26人の小学生を預かっている。
- ・研究・研修にも力を入れ、ハンガリーにも姉妹園がある。
- ・昼間の子どもの生活にかかる部分は園の職員が精一杯かかわって昼間の家庭の役割を果たし、親子が安心して、拠り所となれるよう努力している。

★中学生の育児体験と一緒に進めていけそうな感触を感じる見学であった。



図 II - 3 · 4 まめっちょフロア

3) 中学校、高等学校との連携

《中学校》

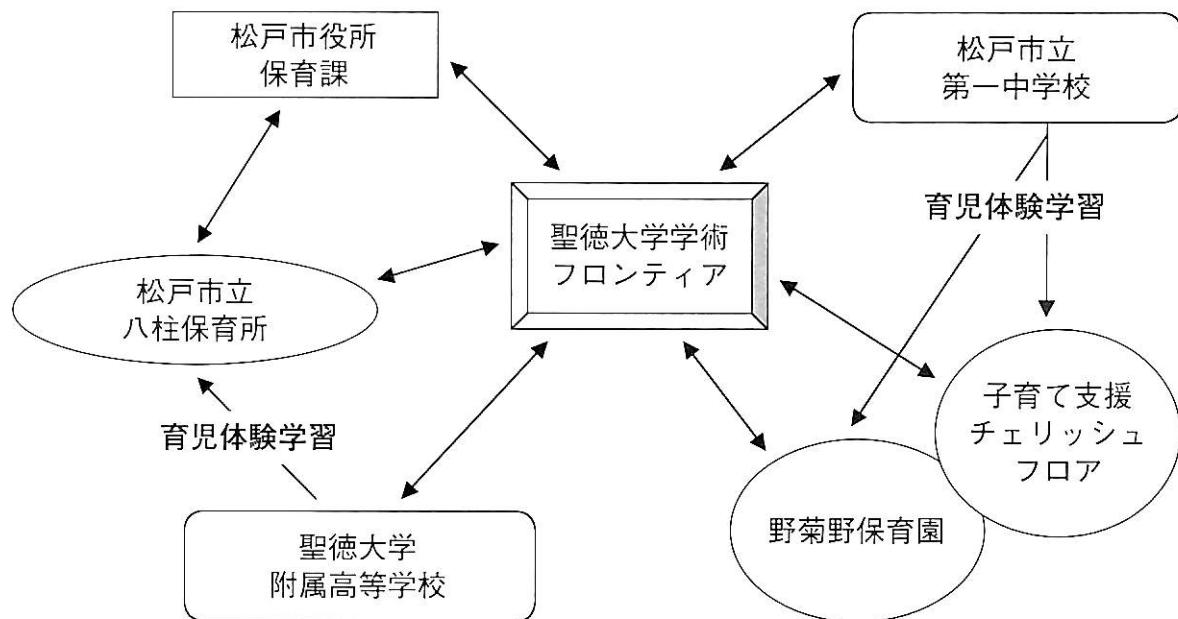
- 1年近く連絡が途絶えていたが、5月末に中学校を訪問し、教頭先生と家庭科教諭に会い、連携して「できること」から始めていきたいとの大学側の希望を伝え、同意を得ることができた。

その第一歩として、4月に見学した子育て支援センターの2園の内、第一中学校

から歩いて行ける野菊野保育園での育児体験学習を夏休みに「ふれあい体験」として実施したいと提案した。

中学校側は授業に組み込むことには消極的であったが、夏季休業中で、希望者を募る形であれば可能であるとの返答で、さらに保育園と日程や内容について交渉を進め、具体化してプログラム、要項を作成して届けることになった。

- 7月初めに要項を中学校と保育園に届けた。
- 7月中旬、育児体験参加者向けの「しおり」を届けた。
- 8月中旬、担当教諭に育児体験学習の実施の様子（写真）を届けた。
- 10月、育児体験学習参加者を除く1年生全員を対象に意識調査を依頼し実施した。



図II - 5 大学を中心とした地域支援システムの実際

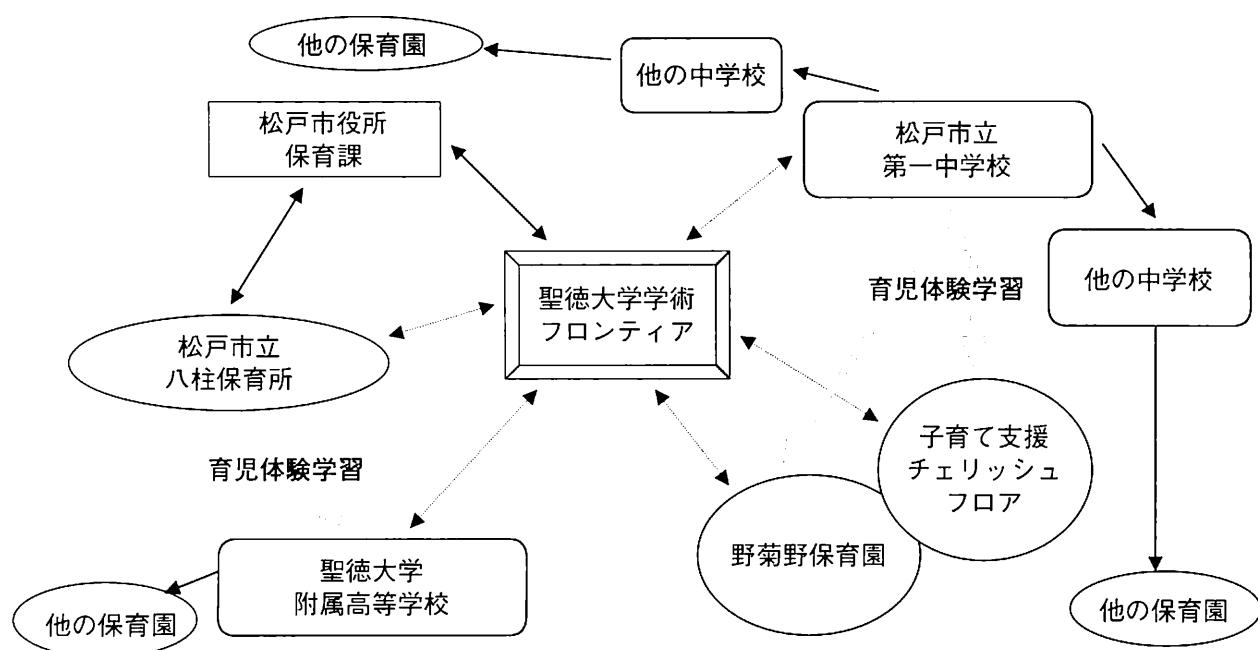
《高等学校》

- 平成17年度に6年生の主任教諭は変わったが、育児体験についての概要是引き継がれていた。
- 5月下旬の打合せで、昨年度と同様に育児体験学習を実施できることになり、高校側の日程の希望を聞き、後は保育所と日程調整したうえでプログラム、要項、「しおり」を作成し届けることになった。

《保育所》

○松戸市立八柱保育所との打合せでは、昨年度の反省点を考慮して、

- ・昨年の配属クラスは0歳～6歳であったが、今年は0歳～2歳の乳児に限定し、乳児とじっくり関われるようにしたい。
 - ・体験時間ができる限り長くとれるように場所の移動を減らし、無駄な時間を省いたスケジュールを考えたい。そのために、事後指導を乳幼児のお昼寝の時間に充てれば、保育室を貸していただくことも可能か。また、午前とは異なった午睡後の乳児とのかかわりも経験できるのではないだろうか。
 - ・所長さんの事前の説明は、保育所の概要等最小限度にしていただき、体験後に詳しく話していただいた方が、さらに理解が深められるのではないか。
- など、大学側の希望等を伝えながら話し合った。日程については保育所の希望にも沿えるように決め、育児体験学習プログラムの改善につなげるようにした。
- 以上のような経過を経ながら、一歩ずつではあるが、聖徳大学学術フロンティアを核とした「子育て地域支援システム」の土台ができはじめている。



図II - 6 子育て地域支援システムの構想

2. 高校生の育児体験学習

1) 高校生の育児体験学習プログラムの改善

(1) 平成16年度と平成17年度のプログラム比較

前年度のプログラム試行結果から得られた反省と課題についての検討を行い、第2回目のプログラム内容を以下のようにした。前年度との違いを明らかにするために両者を図表により対比させたものが 次ページの表Ⅱ－1であり、表中の★印は第1回目のプログラム内容を試行した成果を基に改善されたプログラム内容の部分を表わしている。

(2) 改善点の内容

平成16年度と平成17年度のプログラムの違いをまとめると以下のようになる。

①事前指導の内容を時間的にも内容的にも充実させた。

- ・講義から入らず、実技を先に行った。
- ・実技編として「妊婦体験ジャケット」着用による生活動作体験を加えた。
- ・遊びのきっかけ作りとして「スライムづくり」「ふれあい遊び」を加えた。
- ・ビデオ教材を乳幼児と保育所に関するものに変更した。
- ・追加プログラムにより全体の時間を約1時間延長した。

②保育所での体験学習の内容を変えた。

- ・体験クラスを0、1、2歳児の乳児クラスのみとした。
- ・体験の時間を延長し、午後までとした。
- ・午睡後に再び子どもたちとかかわる時間を設けた。

③事後指導を午前中の体験と午後の体験の間に行行った。

- ・午睡時間を利用して、事後指導を行い、時間と場所の移動の無駄を省いた。

④その他

- ・「育児体験学習のしおり」の内容を検討し、生徒に見やすく、分かりやすいものにするため、図示するページを多くした。
(全11ページ。図Ⅱ－7～10参照)
- ・事前指導用に「ふれあい遊び」の配布資料を作成した。

なお、改善理由については、表Ⅱ－2に一覧にして示した。

【表Ⅱ-1 高校生の育児体験学習プログラム—平成16年度と平成17年度の比較—】

項目	平成16年度 プログラム	平成17年度 プログラム
目的	(1)乳幼児との安全なかかわり方を知る。 (2)かかわる体験を通して年少の子どもたちに愛情を感じる。 (3)子育ての楽しさを味わう。	具体的なかかわり方↓ 乳幼児への理解↓ 乳幼児と楽しくふれあいましょう! ↑ 安全なかかわり方
実施日	2004年7月28日、8月6日(2日間)	2005年8月8日、9日(2日間)
参加者	聖徳大学附属高等学校 保育・幼児教育進学希望者(3年生)15名	聖徳大学附属高等学校 保育・幼児教育進学希望者(3年生)13名
体験先	松戸市立八柱保育所	松戸市立八柱保育所
対象児	0歳児クラス～5歳児クラス(乳児・幼児)	0歳児クラス～2歳児クラス(乳児のみ)★
事前指導の内容	1. オリエンテーション 2. 「子ども・子育てに対する意識調査」① 3. 事前指導1:乳幼児の発達の理解(講義) ※ビデオ教材「初めての一歩」(20分) 4. 事前指導2:乳幼児の安全(講義) ※新聞資料「事故から子どもも守るには」 5. 事前指導3:人形による実技指導(実技) ①手洗いの仕方とうがい ②授乳の仕方 ③抱き方と寝かせ方 ④おむつ交換の仕方 6. 事前指導4:保育所体験学習の オリエンテーション	1. オリエンテーション 2. 「子ども・子育てに対する意識調査」① 3. 事前指導1:育児の模擬体験学習(実技)★ ①手洗いの仕方とうがい ②人形による抱き方と寝かせ方 ③人形によるおむつ交換の仕方 ④「妊娠体験ジャケット」着用体験★ 4. 事前指導2:保育所の1日の生活(講義) ※ビデオ教材「乳児保育の実際」(30分)★ 5. 事前指導3:乳幼児の安全とかかわり方(講義) 6. 事前指導4:スライム(=教材)作り(実技)★ 7. 事前指導5:ふれあい遊び(実技)※資料配布★ 8. 事前指導6:保育所体験学習のオリエンテーション
	[所要時間:約2時間]	
	[所要時間:約3時間]	
育児体験の内容	◇2グループに分かれ、50分ずつ乳児クラスと幼児クラスを体験。 1. 保育所所長の話 2. 乳児クラスでの体験 ・抱っこ ・あやす、遊ぶ ・おむつ交換 ・授乳や食事風景の観察 3. 幼児クラスでの体験 ・プール遊びの準備体操 ・着替えの援助	◇0,1,2歳児の各クラスに数人ずつ配属。 80分でクラスをローテーションした。 1. 保育所所長の話 2. 乳児クラスでの体験(午前中) ・抱っこ・あやす・遊ぶ・おむつ交換 ・授乳や食事風景の観察 ・水遊びの着替えの援助 ・紙芝居やゲームの参加観察 ・午睡時の着替えの援助と寝かしつけ★ 3. 乳児クラスでの体験(午睡後)★ ・午睡後の着替えの援助 ・おやつの観察、一緒におやつを食べる
	[所要時間:約2時間]	
	[所要時間:3時間あまり]	
事後指導の内容	1. 保育所での反省会(体験後) ・各自感想を述べ合う ・保育所所長の話 2. 大学での振り返り ・「子ども・子育てに対する意識調査」② ・体験の様子を録画したビデオを視聴 ・感想を述べ合う	1. 保育所での反省会(体験途中・午睡中)★ ・「子ども・子育てに対する意識調査」② ・各自感想を述べ合う ・保育所所長の話
	[所要時間:1時間30分]	
	[所要時間:1時間15分]	

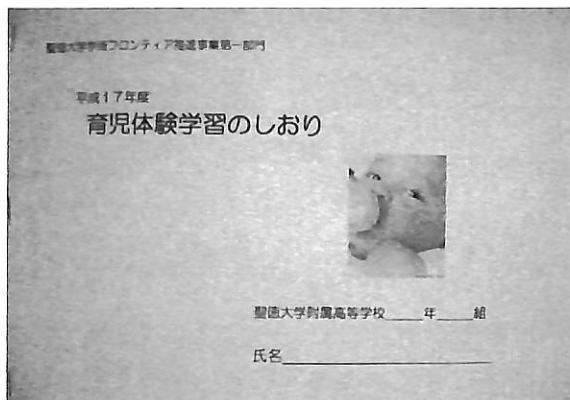
【表Ⅱ-2 高校生の育児体験学習—プログラム変更・改善理由—】

項目	平成17年度 プログラム
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的は変わらないが、高校生に見やすく分かりやすいものにするため、しおりの書き方の文章表現を減らし、図示を多くした。
実施日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年目は2日連続にできなかつたが、2年目は事前打ち合わせの段階で2日連続となるよう日程調整を行つた。
対象児	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年目は、限られた時間内で、生徒全員が十分に乳幼児とかかわるよう、対象児を0~2歳児に絞ることにした。
事前指導の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 慣れない場所で初対面の担当者による指導を受けるためか、1年目は生徒たちに強い緊張が見られた。そこで、2年目は事前指導の内容の順番を変え、実技から行うこととした。 ・ 1年目に比べ2年日の内容が増え、所要時間も1時間増えているが、これは乳児とのかかわり方についてより多角的に学ぶためである。乳児とかかわるための教材を作り、実際にふれあって遊ぶにはどうしたらよいかを知る。また、遊びのプログラムの中で生徒自身が子どもの頃の遊びや気持ちを思い出し、子どもをより身近に感じられるということが高校生同士の会話から窺えた。 ・ ビデオ教材変更の理由は、「発達」について理論的に学んだ1年目であったが、生徒の中には幼稚園出身者もあり、実際に育児体験学習を行う「保育所」というものがどんなところなのかをイメージ出来ずに体験に臨むことを避けるためである。
育児体験の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体験の時間を午後までとし、1年目よりも2年目の方は長時間乳児とかかわる時間を設けた。このことにより慣れるまで時間がかかったり、多少うまくいかない事態があつたりしても焦らずじっくりとかかわることが可能となる。 ・ 午睡前後の乳児の様子を観て、さらに実際にかかわることでより子どもとの距離が縮まり、子どもからの信頼を感じてかかわる喜びを味わうことが出来るよう午睡前後に同じクラスに入ることとした。
事後指導の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 午睡中の時間を利用して反省会を行うようにした。保育士もこの時間帯ならば動きがとり易いということと、反省会のための保育室を確保し易いということ、午前中の体験直後に行うことからより鮮明な実感を引き出すことが可能であること、さらにその実感や反省を午後の場面ですぐに生かすことができることなどの理由による。

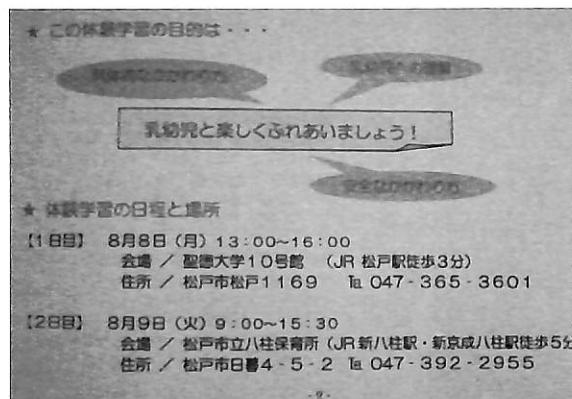
○参加生徒用「育児体験学習のしおり」(H17年度高校生版)

生徒にプログラムの目的や内容が理解しやすいようH16年度のものよりも視覚的に図式化して示すような工夫をした。(全11ページ)

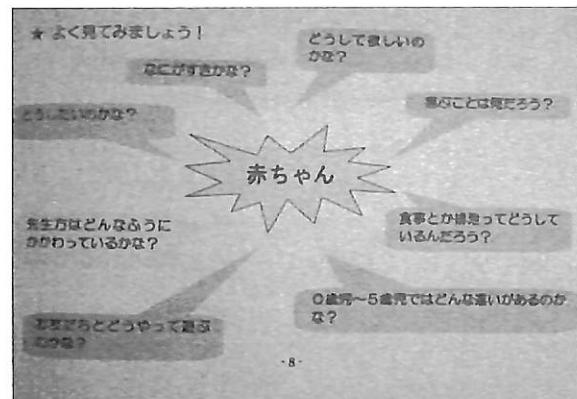
「H17年度 育児体験学習のしおり」(高校生)



【図 II - 7 表紙】



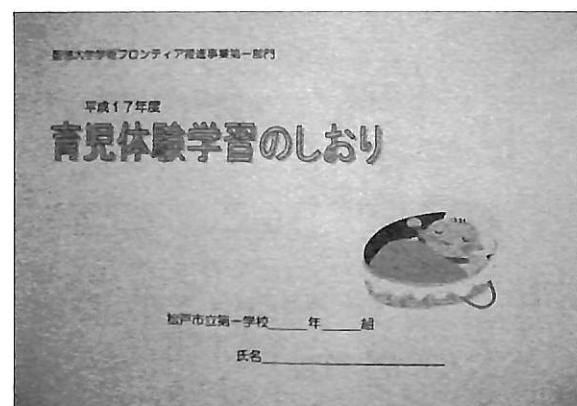
【図 II - 8 体験学習の目的】



【図 II - 9 赤ちゃんとふれあう際の観点】

参考

右は、中学生用のしおりの表紙。しおりの内容は場所や日程などの細かい点を除いてほぼ同様の内容になっている。



【図 II - 10 H17年度 中学生の育児体験学習のしおり】

2) 高校生の育児体験学習プログラムの試行結果

学術フロンティア推進事業第一部門の17年度研究計画に従い、前年度のプログラムの試行から得られた反省を基に改善したプログラムに沿い、次のように高校生の育児体験学習を試行することとした。

(1) 事前指導の様子

育児体験学習の参加者は、聖徳大学附属高等学校の保育・幼児教育進学希望者13名であった。実施日は2005年の8月8日・9日の連日2日間とした。

参加した生徒は、慣れない場所で初対面の指導者から指導を受けるので、緊張していた。しかし、事前指導の会場が聖徳大学の新校舎10号館3階の託児室ということもあり、室内の様子に興味を示したり、室内に用意されている人形を見たりして、期待を高めていたようである。

○オリエンテーションと子育てに対する意識調査アンケートの記入時には、保育者を目指したいというだけあって、育児体験学習に臨む真剣さが感じられた。

○手洗いの実技では、暑い季節ということもあり、洗った後の気持ちよさを実感し、幾分緊張感もほぐれた様子であった。

赤ちゃん人形の抱っこやおむつ交換の体験では、消極的に思えたが、担当者がコツを教えたり、よいところを認めたりしていくうちに、積極的になり、納得するまで何度も挑戦しようとする姿が見られた。特に、首のすわった赤ちゃんと首のすわらない赤ちゃんの抱っここの仕方の違いや、抱っこした時の母親と赤ちゃんの「目」の距離などの具体的な説明には熱心に耳を傾けていた。



【赤ちゃん人形の抱っこ】



【赤ちゃん人形のおむつ換え】



【妊婦体験ジャケット】

○妊婦体験ジャケットの着用は、赤ちゃん人形での体験が終わった生徒から順次試みるようとした。はじめに着用した生徒は、「重い」といいはずかしそうにすぐに脱いでしまった。交代して妊婦体験ジャケットを着用した生徒たちは、次第に歩いたり座ったり、下に落ちているものを拾ってみたりと、様々な動きに挑戦していた。「思っていたよりも動きにくい」「下を向いても足元が見えない」等といいながら確かめていた。その言葉に刺激され、初めに妊婦体験ジャケットを着用した生徒は再度装着し、様々な動きを試みていた。また、互いにジャケットの装着を手伝う姿も見られた。「時間があれば、階段を歩いてみたい」「この状態で1～3歳の子どもがいたら大変だね」「掃除や料理、洗濯などできるかな」など、実際の生活場面を想定した発言もあり、関心の高さが窺えた。

○ビデオ視聴を通しての講義では乳児はかわいいがかわいの方は難しそうと感じたようである。「たくさんかわいがこわい気がする」と期待と不安の声が聞かれた。

○スライム作りでは、液体が固まっていく不思議さや色の美しさ、感触の気持ちよさなどに感動したり喜んだりする姿が見られた。また、作ったスライムを伸ばしたり丸めたりし、遊びに夢中になっていた。

○ふれあい遊びは、「あんたがたどこさ」の歌に合わせて個々に体を動かすものや、円形になり集団で楽しむ内容のものにした。生徒たちは「知ってる」「懐かしい」等といいながら楽しんでいた。また、資料として配布されたふれあい遊びを目にして「よくやったよね」「昔を思い出す」等と口々に言葉に出して反応していた。



【ビデオ視聴の様子】



【スライム作り】

<考察>

子育てに対する意識調査記入後、講義ではなく実際に動きを伴う実技から入ったことで、生徒は必要以上に緊張することなく事前指導に臨めたと思われる。内容が同じであっても展開の順序を考慮することは大切である。

前年度の反省をもとに、時間を約1時間多く取り、新たに妊娠体験ジャケットの着用、玩具製作（スライム作り）、ふれあい遊びを内容に加えた。

妊娠体験ジャケットの着用には高い関心を示し、友達の発言を受けて再度ジャケットを着用し、自分が体験していない動きを試みていた。生徒の会話の様子から、生徒は、この体験を近い将来の自分のこととして受け止め、生活の中での具体的な場面を次々に想定している様子からも関心の高さが窺えた。

スライム作りでは、幼い頃遊んだ経験を思い出し生徒同士の会話が弾み、ふれあい遊びでは、リズムに合わせて同じように身体を動かすことで楽しさを共有できたと思われる。このことから、保育所での育児体験学習時に、生徒が乳幼児を目の前にして直接生かせない内容であっても、生徒自身が、幼少期を思い出すきっかけとして間接的な意味があると捉えることができる。

事前指導の時間は3時間位が適当であると考えるが、内容、展開順位については、さらに検討を重ねていきたい。

(2) 保育所での育児体験学習

前年度の反省から、対象を0～2歳児までに限定し、午睡後も乳幼児とかかわることを生徒に体験させたいため、体験の時間を午後までと延長した。生徒は0～2歳児の各クラスに数人ずつ配属させていただき、80分でクラスをローテーションして保育に参加した。また、生徒の配属クラスを午睡の前後が同じになるようにした。

①体験の内容

- ・保育所の育児体験学習で体験できた内容は次の通りであった。
- ・抱っこ、あやす
- ・おむつ交換
- ・水遊びの着替えの援助
- ・紙芝居やゲームの参加観察
- ・寝かしつけ
- ・遊ぶ（がらがら、にぎにぎ、等）
- ・授乳や食事場面の観察と援助
- ・遊ぶ（ブロック、スライム、絵本等）
- ・午睡前後の着替えの援助
- ・おやつの援助と観察

②保育所長による話

所長の話は、見学の仕方・配属クラスについての簡単な説明に留めていただき、乳幼児の午睡の時間に詳しく話を聞くことにした。高校生は、身支度を整え自分の配属クラスを確認し早く子どもとかかわりたい様子であった。職員室に来た幼児に微笑みかけたり「おはよう」と声をかけたりするなどの姿が見られた。



【オリエンテーションの様子】

③生徒の様子

初めは、不安そうに数人固まって乳幼児の様子を見ていたが、次第に「乳幼児とかかわりたい」という思いが行動に表れていた。人形とは違う本当の乳児を前に緊張したり戸惑ったりしている様子であった。

特に泣いたりぐずったりしている乳児とのかかわりに困惑していた。生徒にはどうすることもできないので保育士がかかわると、乳児は次第に落ち着きを取り戻し安心したように保育士によりかかっていた。その様子を見て生徒も安堵していた。

保育士の配慮で、機嫌のよさそうな乳児を抱かせていただいた生徒は、緊張と戸惑いを隠し切れない様子であった。次第に、乳児の様子や反応を見ながら、好みそうな玩具を差し出しかかっていた。

水遊びでは、1歳児の乳児とじっくりかかわりながら遊びの相手をしたり、着替える時におむつをしてあげたりする体験をしていた。「動くので大変」「紙おむつなので赤ちゃん人形でやった時よりやり易い」等の声が聞かれた。



【抱っこや観察】



【おむつ換え】

プールから上がってきた2歳児の体を拭いたり洋服を着せたりする体験もしていた。裸のまま逃げ出す子に振り回されながらも「かわいい」と子どもとかかわることを楽しんでいた。乳幼児の方から、生徒の所へ寄って来たり話しかけてきたりすることで、生徒も心が和み、次第に自然体になれたようである。

プールに入れない一人の子どもと1対1でかかわることになった生徒は、黙ったまま絵本を見たりブロックで遊んだりしていたが、子どもの「もう一回読んで」の一言から、一転して明るく積極的に言葉をかけてかかわっていた。



【着替え】



【水遊び】



【1対1のかかわり】

食事の場面では、1～2歳児が自分でスプーンを使って食べる姿に驚いていた。また、パジャマに着替える時、保育士が子どもを励まし見守ったり子どもができないところを援助したりしている姿を感じ取り、早速、同じように実践しようとする生徒の姿も見られた。

生徒は、子どもが予想以上にスライムに興味を示し集中して遊ぶ姿を見て「お土産にしてよかったです」と喜んでいた。

違う色を混ぜ合わせたり、同色を沢山集めたり、反対に少しのスライムの感触をいつまでも手で楽しんだり、床に落ちたスライムをひたすら収集したりするなど子どもの姿をおもしろいと受け止め、一緒に遊んでいた。

(3) 事後指導

①所長の話

保育所という職場、保育士という仕事、幼保一元化や総合施設などの現在の課題、そして乳幼児の年齢による特徴などについて話をしていただく。生徒にとっては難しい内容であったが、実際育児体験学習をした後なので、保育における課題や乳幼児の姿を、より身近なこととして受け止めることができたようである。

②生徒の感想

<0歳児>

- ・0歳児が意外としっかりしている。言葉は少ないが表情や動きで意志を伝える。また、握ったり押したりする力が強い。
- ・0歳児がなついてくれなくて大変であった。保育士さんがあやすとすぐ泣きやむ。自分でも後で、事前指導で体験した「いないいないばー」の遊びをやってみたら興味を示してくれたので嬉しかった。

<1歳児>

- ・1歳児が食事をする時に傍らで「おいしいよ」「もぐもぐしよう」などと声をかけた。顔をしっかり見て一生懸命食べようとしていた子どももいたが「もういい」といわんばかりに口を閉じてしまう子どももいた。0歳児より1歳児は自分の主張がはっきりしているのであやし方が分かる。1歳の違いは大きいと感じた。
- ・1歳児の子どもが「ママ」と言ってきた。どんな気持ちで言ったのだろうと不思議に思ったが、頼られているようで嬉しかった。
- ・おむつ替えを実際にやってみた。そのうち4人の子どもはパンツ式だったのでやり易かった。事前指導で赤ちゃん人形を使って擬似体験学習をしたことが役立った。
- ・タライの中に入って水あそびをしている1歳児の様子を見た。一人でよく遊ぶと感心した。一つ一つの行動を見ていると同じことを繰り返しながら何かを試しているようであった。目が合った時安心したような表情になった。傍にいてあげることが大切なのだと思った。

<2歳児>

- ・2歳児から水をかけられてしまった。反応を見ているのだと思った。着替えも自分でやらないでどのようにかかわってくれるか反応を見ているようであった。着せてあげると、急に表情が明るくなりなついてきたのかわいいと思った。その後は担当の保育士に教えてもらいながら、子どものできないところを手伝った。待っていたらよいのか手伝ったらよいのか同じ2歳児でも一人一人違うので、かかわり方は難しいと思った。
- ・子どもの傍にいてもどのようにかかわったらよいのか分からなかった。同じようにして遊んでいるうちに子どものほうからなついてきてくれた。いろいろなことをよく喋るのには驚いた。また、多くの言葉を知っている。1歳児に比べて2歳児は大きいと感じた。
- ・何回話しかけても反応がない子どもが、しばらくして子どものほうから話しかけてきた時は嬉しかった。自分にかかわってくれる人のことは、黙っていても意識しているのだと思った。

- ・着替えの時、裸のまま走りまわって逃げていた子どもを捕まえて着替えをさせた。捕まえてほしかったようにこにこして甘えてきた。これがきっかけとなりブロックで一緒に遊ぶことができ嬉しかった。

<考察>

事前指導と保育所での体験学習を連日で実施したことにより、事前指導での生徒の期待と意欲が持続し、翌日の積極的な取り組みに繋がった。

生徒が、乳幼児とのかかわりにおいて充実感を持つことができた理由として2つのことが考えられる。1つ目は、午睡後まで体験時間を延ばし約3時間としたこと。2つ目は、対象を0～2歳児としたことである。加えて、「夏」という季節柄水遊びやプール遊びをするので着替えの回数が多かったこと。午睡の前後を入れると、最低4回は着替えをすることになる。着替えや午睡時の寝かしつけは、子どもと具体的・直接的にふれあいかわる必要があること。これらのことから、生徒はその場の状況から必要感を感じ取って援助や介助をすることができたと考えられる。もちろんうまく出来た・出来ないは別として子どもとかかわるチャンスはあったと思われる。

3歳以上の子どもに比べて、ダイナミックな動きが少なく落ち着いた雰囲気で介助できたことがあげられる。また、0～2歳児の表現（要求、欲求）は、言葉だけでは通じないことも多いので子どもの様子をよく観察することに繋がったといえる。生徒はよく子どもを観察したからこそ、無理に子どもを自分のほうに引き寄せせず、子どもの日常生活の中に自然に入っていけたのではないだろうか。ぐずっている赤ちゃんに困惑したり、裸のまま逃げ回る子どもの理解に戸惑ったり、なかなか食事が進まない子どもを心配したりしながら「子ども」という存在のイメージを塗り替えたのではないだろうか。

日程を連続して育児体験学習が出来るよう調整したこと、時間を増やし午睡前後のかかわりに着目したことは、本研究においても効果的であった。事後指導としての反省会は、保育所に本研究の趣旨を伝え連携しながら検討をする必要がある。

3) 「子ども・子育てに対する意識調査」の結果

1. 事前調査

目的

本調査の目的は、育児体験学習を経験する前の高校生が、子どもや子育てに対して抱いているイメージを明らかにすることである。また、育児体験学習後にも同様の調査を行うことにより、育児体験学習が子どもや子育てなどについての態度に与える影響についても検討する。同時に、育児体験学習プログラムの一環として本調査を行うことにより、参加者の子どもや子育てに対する意識を活性化することも目的とする。

方法

調査対象者 育児体験学習に参加した高校3年生女子 13名

調査項目 調査項目は、以下のようであった。

- ①過去の育児体験・保育体験：これまで、「育児体験」「保育体験」などをしたことがあるか、あるとしたらその時期、場所、目的
- ②生育環境：きょうだいの数とそのうちの何番目であるか、幼い頃に年下のきょうだいやいとこと遊んだ経験、幼い頃のいちばん楽しかった思い出、父母の就労状況、幼稚園・保育所への通園状況、学童保育の経験の有無
- ③現在の状況：乳幼児と遊ぶことがあるか、乳児を抱いたことがあるか、乳児の世話をしたことがあるか、小さな子どもに対するイメージとその理由、子育てに対してのイメージとその理由
- ④将来設計：自分の結婚についての考え、自分の子どもについての考え、就労に対しての考え、子どもを育てるのは誰か
- ⑤この育児体験学習への期待

手続き 調査は、育児体験学習プログラムの一環として、事前指導の冒頭で一斉に行われた。調査用紙を配布し、事後調査との対応をとるための記名を求めた。対象者は自分のペースで回答していくが、所要時間は約30分であった。調査項目への回答は、設問により、選択式、自由記述によって行われた。小さな子どもに対するイメージと子育てに対するイメージについては、30項目について5件法で回答を求めた（まったくそうだ：1、まったくそうではない：5）上で、最も強いものを1つだけ選ばせた。

結果

①過去の育児体験・保育体験

これまでに、育児体験や保育体験をしたことのある生徒は8名であり、その時期は小学校6年時が1名、中学校2年時が1名、中学校3年時が5名、高校2年時が2名、

高校3年時が1名（複数回答）であり、複数回経験している生徒は3回が1名、2回が1名であった。体験の場所は、幼稚園が1名、保育園が5名、保健所が1名であった（複数回答）。目的としては、学校の家庭科の授業が1名、学校の職業体験・職場体験が5名、学校の行事（1日保育体験）が1名、学校のクラブ・部活動（児童文化クラブ）が2名、個人のボランティアとして、応募したり学校で行ったりしたのが2名、入っていたボランティアグループの活動としてが1名であった（複数回答）

②生育環境

きょうだい数は3人が6名と最も多く、ついで1人が4名、2人、4人、5人以上が各1名であり、そのうち第1子が8名、第2子が1名、第3子が4名であった。幼い頃、年下の子どもと遊んだ経験は、「いつも遊んだ」7名、「たびたび遊んだ」「時々遊んだ」各2名、「あまり遊ばなかった」「まったく遊ばなかった」各1名であった。また、幼い頃のいちばん楽しかった思い出については、日常の遊びに関すること、家族との恒例行事、旅行や動物園などのイベント的なもの、幼稚園での行事があげられた。それらの思い出に登場するのは、日常の遊びに関してはきょうだい、友達が多く、イベント的なものについては家族、親戚が多かった。全員の父親が、対象者が生まれたときから働いており、また、7名の母親が働いていた。母親の就労開始時期は、対象者が生まれたときからが4名、3歳頃からが3名、小学校入学頃からが1名、中学校入学頃からが2名であった。幼稚園に通っていた生徒が9名、保育所に通っていた生徒が5名であり、通園開始時期は0歳からが3名、1歳からが2名、3歳からが4名、4歳からが3名、5歳からが1名であり、学童保育に通った生徒は2名であった。

③現在の状況

現在、乳幼児と遊ぶ機会について、いつも遊んでいる生徒、たびたび遊んでいる生徒が各1名、時々遊んでいる生徒が5名、あまり遊んでいない生徒1名、滅多に遊んでいない生徒2名、まったく遊んでいない生徒が3名であった。全員が乳児を抱いたことがあるが、乳児の世話をしたことがある生徒は10名であり、世話の種類としては、遊ぶことをあげた生徒が最も多く10名、あやすが9名、ミルクを飲ませたことがあるものが8名、おむつの交換、着替え、寝かしつけるが各5名、ミルクの用意が4名、風呂に入れるが3名、夜泣きの世話、病気の看病、食事を与える、食事を作るが同一人物で1名いた。（複数回答）。

小さな子どもに対するイメージの結果を図II-11、図II-12に示す。図II-11は項目ごとの対象者の回答の割合、図II-12はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

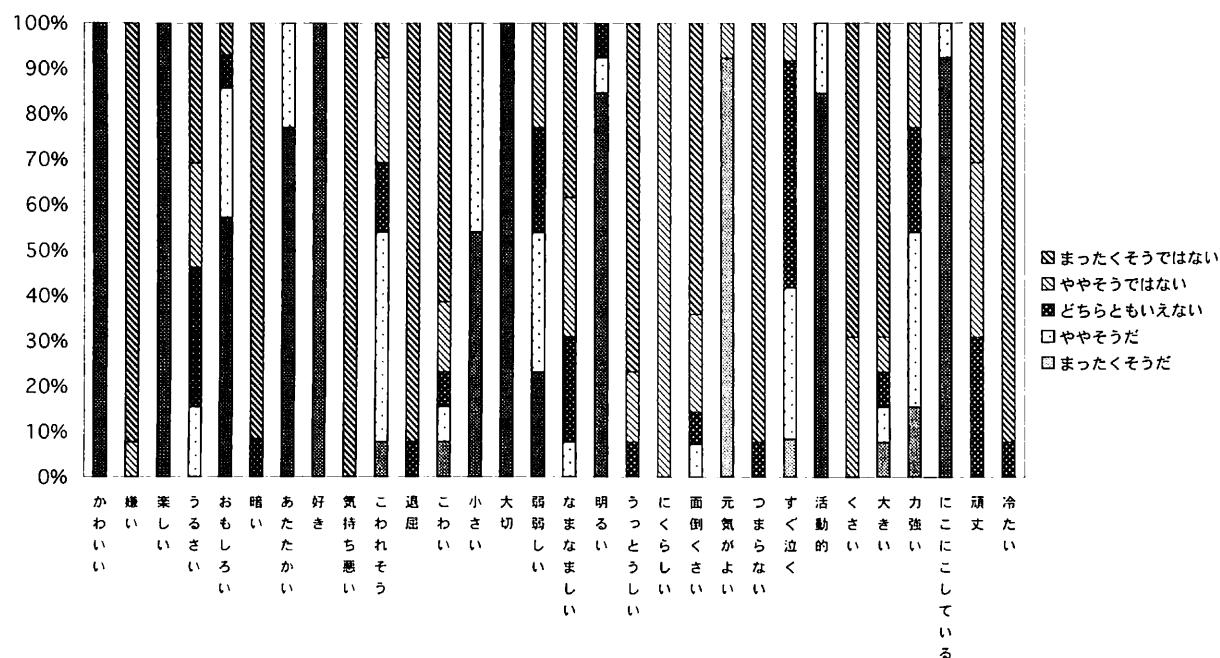


図 II-11 子どものイメージ (事前調査)

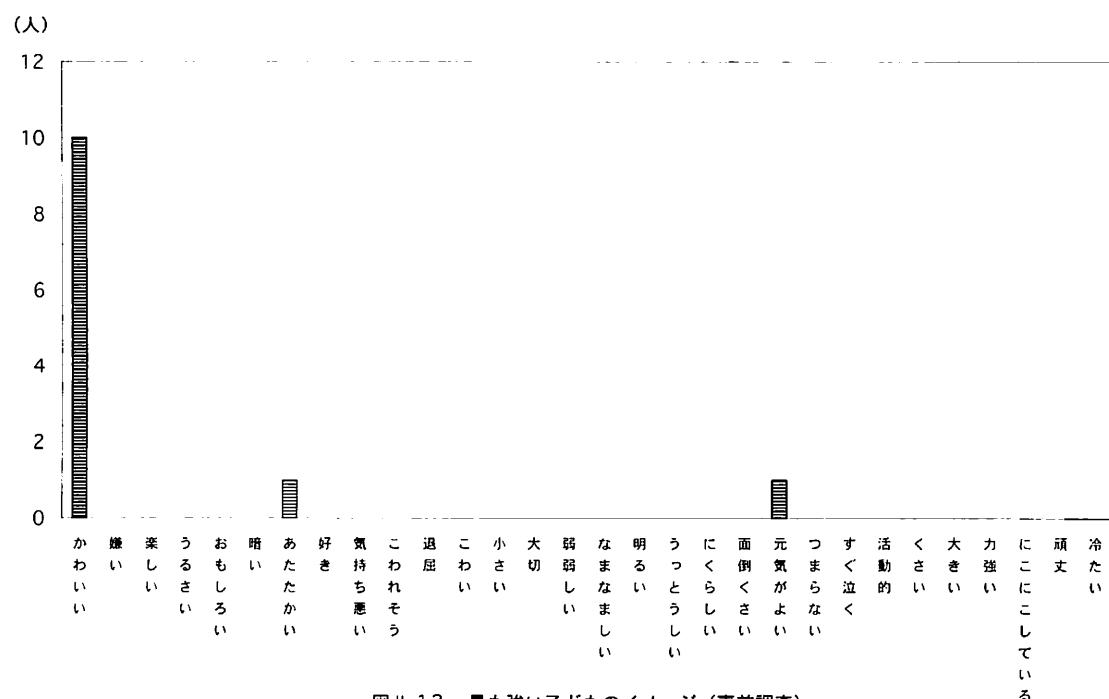


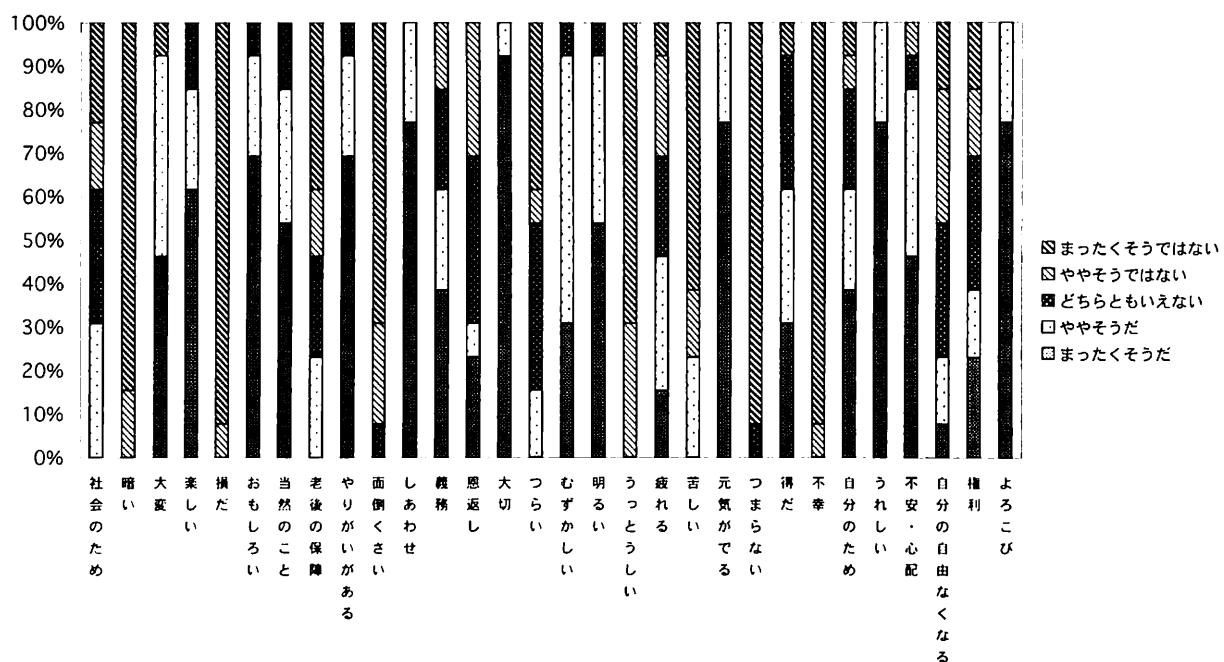
図 II-12 最も強い子どものイメージ (事前調査)

半数以上の生徒が肯定したのは、「かわいい」「楽しい」「おもしろい」「あたたかい」「好き」「こわれそう」「小さい」「大切」「弱々しい」「明るい」「元気がよい」「活動的」「力強い」「にこにこしている」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「嫌い」「うるさい」「暗い」「気持ち悪い」「退屈」「こわい」「なまなましい」「うつとうしい」

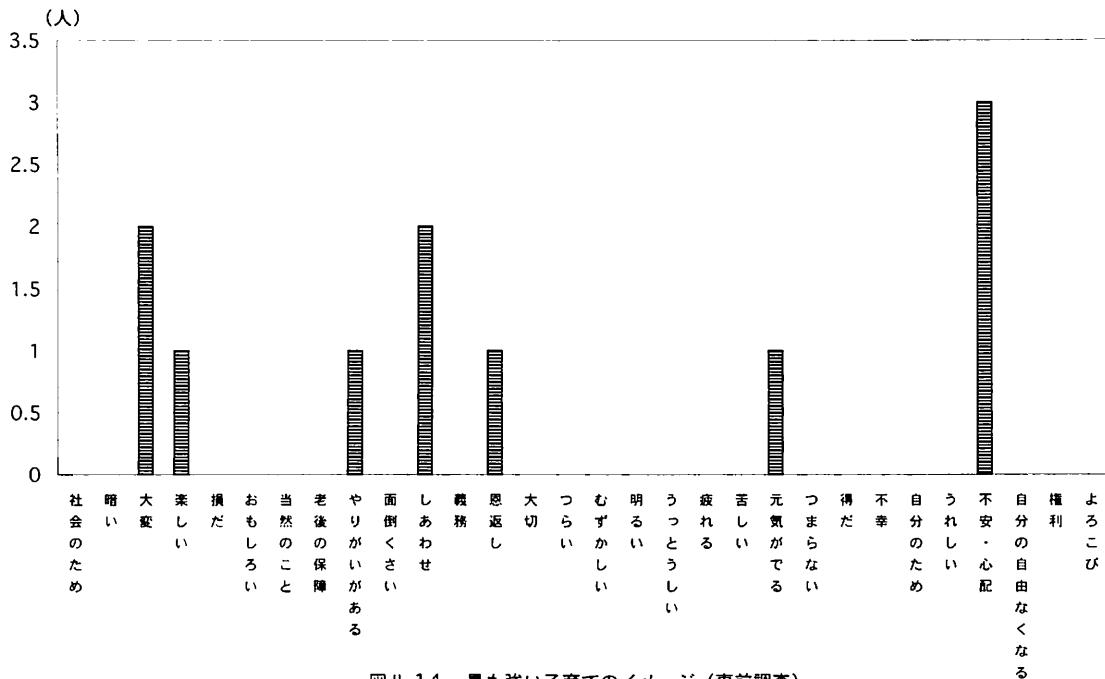
「にくらしい」「面倒くさい」「つまらない」「くさい」「大きい」「頑丈」「冷たい」であった。「すぐ泣く」は、肯定・否定ともにあり、中立の回答も多かった。また、最も強い子どもの印象は、「かわいい」が10名で最も多く、ついで「あたたかい」「元気がよい」各1名であった。そのような印象を持つ理由としては、表情や行動、外見をあげる生徒が多く、実際に子どもと接したり世話をしたりした経験からと答える生徒もいた。

子育てに対するイメージの結果を図II-13、図II-14に示す。図II-13は項目ごとの対象者の回答の割合、図II-14はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

半数以上の生徒が肯定したのは、「大変」「楽しい」「おもしろい」「当然」「やりがいがある」「しあわせ」「義務」「大切」「むずかしい」「明るい」「元気ができる」「得だ」「自分のため」「うれしい」「不安・心配」「よろこび」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「暗い」「損だ」「老後の保障」「面倒くさい」「うつとうしい」「苦しい」「つまらない」「不幸」であった。「社会のため」「恩返し」「つらい」「疲れる」「自分の自由がなくなる」「権利」は、肯定・否定ともにあり、中立の回答も多かった。また、最も強い子育てのイメージは「不安・心配」が最も多く3名、次いで「大変」「しあわせ」各2名、「楽しい」「やりがいがある」「元気が出る」「よろこび」が各1名であった。そのような印象を持つ理由としては、親や周りの人たちの姿を見たり、話を聞いたりしたことがあげられている。また、自分の将来の家庭における乳児の存在や、子どもと関わることによって引き起こされる自身の感情、自分の育児に対する自信や知識のなさ、子どもが生まれてきたことそのものに対する感謝などもあげられた。



図II-13 子育てのイメージ（事前調査）



図II-14 最も強い子育てのイメージ（事前調査）

④将来設計

自分の結婚については考えたことがあるのは12名、そのうち結婚したい生徒が11名、結婚したくない生徒が1名だった。結婚したい理由として、「自分の家庭を持ちたい」11名、「あこがれ」10名、「好きな人と暮らしたい」8名が多く、「なんとなく」「子どもがほしい」各1名であった。結婚したくない理由としては、「なんとなく」「自分には結婚生活は向いていない」「仕事を続けたい」があげられた（複数回答）。

自分の子どもについても考えたことがあるのは12名、その全員が子どもがほしいと答えた。子どもがほしい理由として、「子どもが好き」12名、「あこがれ」11名、「楽しそう」8名が多く、「子どもを持って一人前」3名、「なんとなく」1名であった（複数回答）。

就労について、将来働きたいと考えている生徒は12名、働きたくないと考えている生徒は1名であった、働きたいと考えている生徒に対して、いつまで働きたいかをたずねたところ、「年をとって働けなくなるまで」5名、「50歳くらいまで」2名、「子どもができるまで」3名、「結婚するまで」1名、「結婚まで働き子どもが成長したらまた働く」1名という回答であった。また、仕事と子育ての両立についてたずねたところ、10名は考えたことがあり、3名は考えたことがなかった。仕事と子育ての両立について考えたことのある生徒に対して、その考え方を問うと「両立させたい」3名、「両立させたいが難しそう」7名であった。

子どもを育てるのは誰だと思うかという質問に対しては、10名が「子どもの両親」

と答え、1名が「子どもの母親」、3名が「(子ども自身も含めて) 周りの人たち全員」と答えた。

⑤育児体験学習への期待

この育児体験学習に期待することとしては、ほとんどの生徒が「子どもとの接し方を知りたい」と答えた。また、子どもの心理や行動特性、それに対するおとなとの対応についても知りたいという意見が述べられていた。また、今回の経験を将来に活かしたいという期待も多くの生徒が持っていた。

考 察

今回、この育児体験学習に参加した生徒の約6割は、過去に何らかの形で育児体験・保育体験を行っている。最も多いのは学校の職業体験・職場体験としてであるが、少數ながら学校の授業でも行われている。体験的な学習を取り入れる学校が増えてきていることが見て取れ、このような取り組みは、今後一層多くなることが望まれよう。また、今回の参加者は、職業としての保育者を志す生徒たちであり、個人でボランティアに応募したり、このような体験ができそうな団体（クラブ・部活動を含む）に所属したりしていることも多く、早い時期から自分の興味・関心に従って、自主的に学習している様子がうかがえる。今回の参加も、このような意欲の表れと考えられるだろう。

生育環境としてきょうだいの数をきいたところ、約7割の生徒がきょうだいがいると答えており、出生順も上の生徒が多かった。このことによるものか、幼い頃に年下の子どもと遊ぶという経験を持つものが多かったが、高校生となった現在、小さな子どもと遊ぶ機会は激減したようである。この結果は、平成16年度のものと一致しており、一般にいわれている小さい子どもと接する機会の少なさを示している。少子化とともに、乳幼児と高校生との生活時間・空間の接点のなさが、その原因の一つと考えられるであろう。異年齢間の交流の少なさが問題であるとするならば、両者をつなぐ場の一つとして、本プログラムの意義があると考える。

本調査の対象者は、先述したように職業としての保育者を志望するものであり、本プログラムが「職場体験」としてもとらえられている可能性はある。このような対象者の特性のためか、「子ども」に対するイメージは、全体として好意的なものであった。子どものイメージとして最も強いのは「かわいい」であり、そのイメージの源泉は、一般的に流布している子ども観、たまたま見かけた子どもの様子などであり、自分の実感とは隔たった観念として子どものイメージのように見受けられる。こうした子どものイメージが持たれるのも、子どもと接する場が少ないとすることが影響していよう。一方で、自分が実際に子どもと関わった経験から子どものイメージを作り上げている生徒も見受けられた。 いずれにしても、子どもと直接接する機会を設けることが、子どもをどのよ

うにとらえるかということに、少なからず影響を及ぼすものと考えられる。

「子育て」のイメージについても同様のことがいえる。全体として子育てを重要なものとして位置づけている。最も強い子育てのイメージは子どものイメージほど集中してはいないが、最も多くの生徒があげたのが「不安・心配」というものであった。そのイメージの源泉は、肯定的なものにしろ、否定的なものにしろ、自分の親や周りの人、あるいはメディアなどで見聞きしたことが大きいようである。特に、日々様々なメディアで発信されている子育てについての言説を、そのまま取り込んだかのような意見が多い。調査対象者が子どもや子育てに強い関心を持っているがために、こうした情報をより強く自分の中に取り入れてしまうのかもしれない。また、子どもが当事者（加害者・被害者とも）となる事件や事故が報道されるたびに、親の責任や子どもへの接し方が問題とされ、あるいは親の悲しみについてふれられる。こうした内容が、将来親となる可能性がある人たちに、ある種のプレッシャーを与えていたりする可能性についても考えられなければならないだろう。

メディアや身近な人たちからの情報が影響を与えていたりするものとしては、将来の就労についての考え方があげられよう。いわゆる「M字カーブ（女性の就労者が、いわゆる子育て世代に少なく、M字型になっている）」にのった考えをもつ生徒も含め、子どもを育てている時期には仕事はしないと考えている生徒が4割を超える。仕事と子育ての両立は難しいと考えている生徒は、このことについて考えたことがある生徒の7割にのぼる。「子育ては大変」「働きながら子どもを育てるのはもっと大変」という社会通念（と現実）を変えていくことが期待される。

現在、子どもが減少することの問題として、社会の維持が困難になるということがあげられているが、子育てを「社会のため」ととらえるのは、肯定・否定、中立の立場がほぼ拮抗している。一方で「義務」ととらえる生徒が多い。また、「自分のため」であるという生徒は多いが、一方で「権利」は3つの立場がほぼ同数である。「老後の保障」は否定的な生徒が多い。自分が将来子どもをもちたいと考える理由としては、子どもが好きであること、あこがれ、楽しそうであることがあげられている。こうした結果は、「子どもの価値」をどこに認めるかという問題につながる。本調査の対象者にとっては、子どもを育てるということは個人のためであり、子どもに心理的価値を認めていたりする生徒が多いといえよう。

昨年度、同じ高校3年生女子に、ほぼ同じ調査を行った。全体的な傾向は似ているものの、細かな相違点も多い。この違いは、1年という時間の流れによるものか、あるいは対象者となった個人の経験や考え方方が異なるためなののかは、2つの調査からは明らかにはできない。今後も引き続き、同様な調査を、できればより大きな集団を対象にして実施し、検証していくことが必要であろう。

2. 事後調査

目的

本調査の目的は、育児体験学習を経験した後の高校生が、子どもや子育てに対して抱いているイメージを明らかにすることである。また、育児体験学習前に行った同様の調査と比較することにより、育児体験学習が子どもや子育てなどについての態度に与える影響についても検討する。同時に、育児体験学習プログラムの一環として本調査を行うことにより、参加者が保育所での「ふれあい体験」を振り返り、そこで得られたものを定着させることも目的とする。

方法

調査対象者 事前調査の対象者のうち、保育所での「ふれあい体験」を欠席した1名を除く12名

調査項目 調査項目は以下のようであった。

- ①保育所での「ふれあい体験」：乳幼児と遊んだか、どのような遊びをしたか、その際どのようなことを感じたか、乳児を抱いたか、その際どのようなことを感じたか、乳児の世話をしたか、どのような世話をしたか、実際に乳幼児と関わってみて最も印象に残っていること
- ②現在の状況：小さな子どもに対するイメージとその理由、子育てに対するイメージとその理由
- ③将来設計：自分の結婚についての考え、自分の子どもについての考え、就労に対する考え方、子どもを育てるのは誰か
- ④この育児体験学習全体の感想

手続き 保育所で、乳幼児の午睡中、保育所長との反省会の後に調査を行った。他は事前調査に準ずる。なお、調査終了後に午睡からさめた乳幼児と関わり、一緒におやつを食べ、その後保育所を辞した。

結果

①保育所での「ふれあい体験」

保育所で乳幼児と一緒に遊んだかという質問に対しては、「たくさん遊んだ」8名、「まあまあ遊んだ」4名であった。遊びの種類については、水遊びが多く、他にもブロックや粘土などのおもちゃを使った遊び、ごっこ遊び、お絵かき、身体を使った遊びが行われていた。おもちゃの中には、参加者自身が事前指導の一環として自作したおもちゃも含まれていた。また、子どもと遊んで感じたことは、「楽しかった」「うれしかった」という感想が多かった。また、遊びの様子から子どもの気持ちや興味の持ち

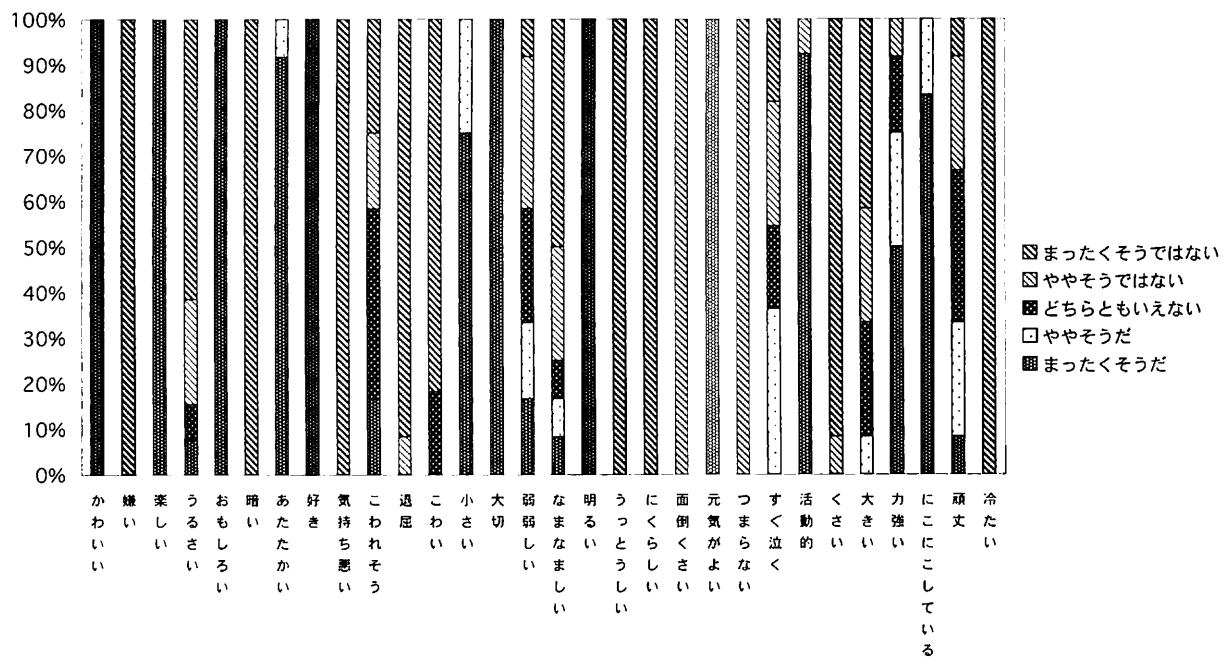
方について考えたり、個人差に気づいたりしたという記述もあった。

乳児を抱いてみた生徒は6名で、その感想としては「小さい」「あたたかい」「やわらかい」というものが多くあげられた。また、「自分の予想と異なっていた」という感想も複数みられた。乳児の世話をした生徒は6名で、世話の種類（複数回答）は「遊ぶ」6名、「着替え」5名、「寝かしつける」「あやす」各4名、「おむつ交換」3名、「食事の世話」2名であった。

乳幼児と関わって最も印象に残っていることとして、多くの生徒が具体的な場面やエピソードをあげていた。また、個人差や年齢差があることを実感したという生徒も多かった。

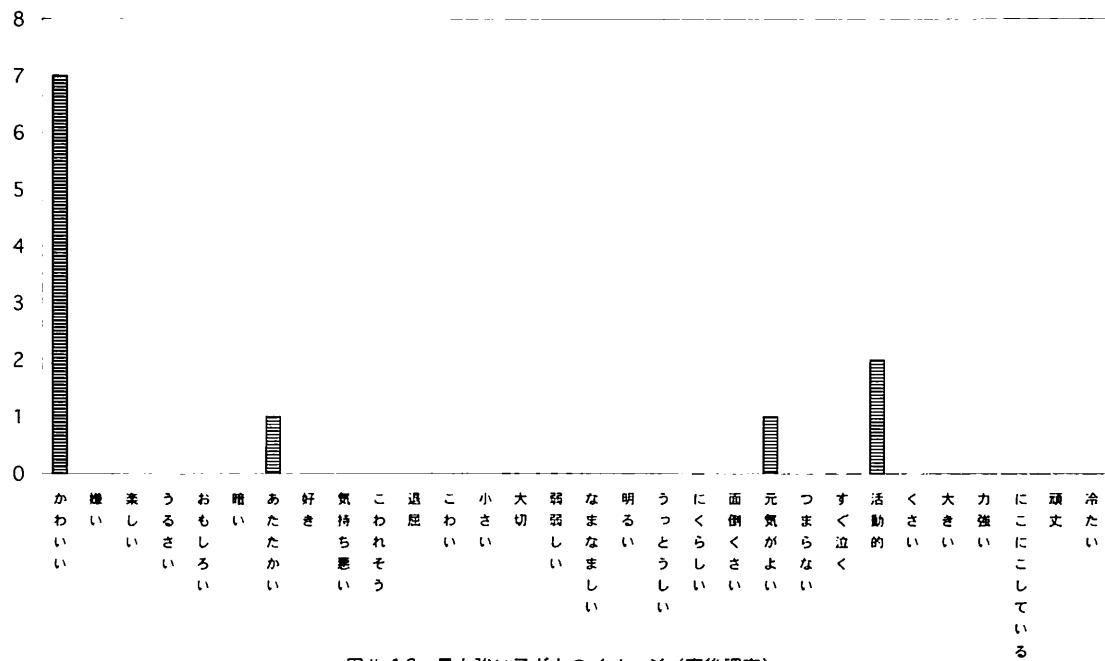
②現在の状況

小さな子どもに対するイメージの結果を図II-15、図II-16に示す。図II-15は項目ごとの対象者の回答の割合、図II-16はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。



図II-15 子どものイメージ（事後調査）

(人)

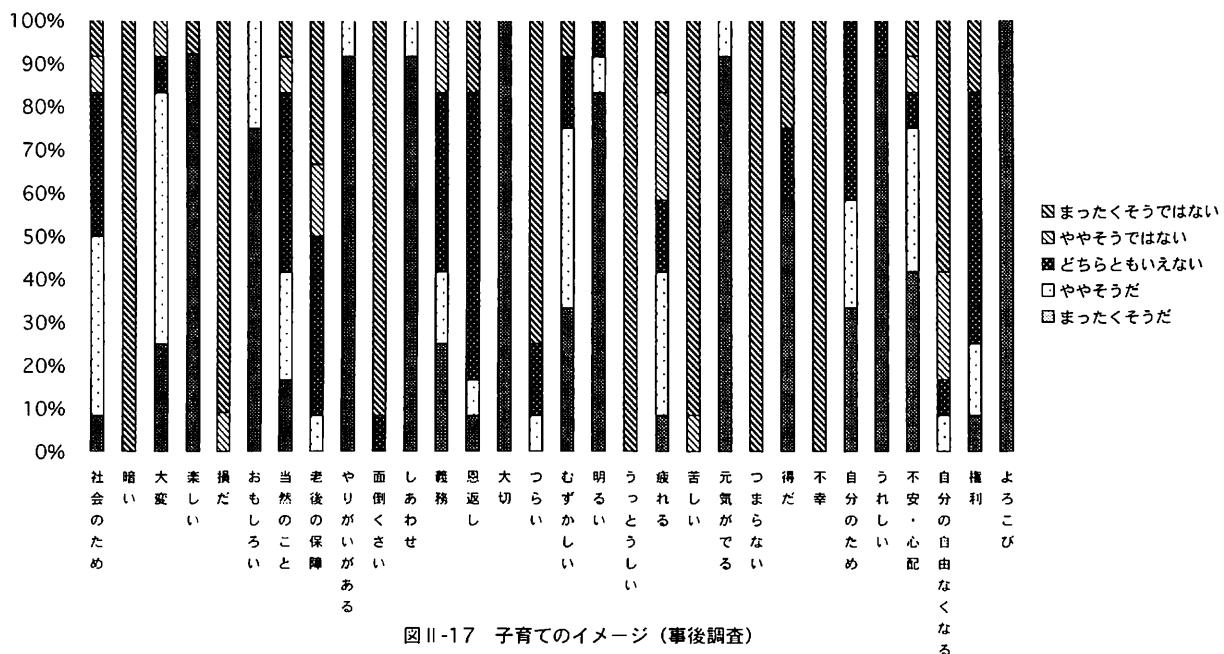


図II-16 最も強い子どものイメージ（事後調査）

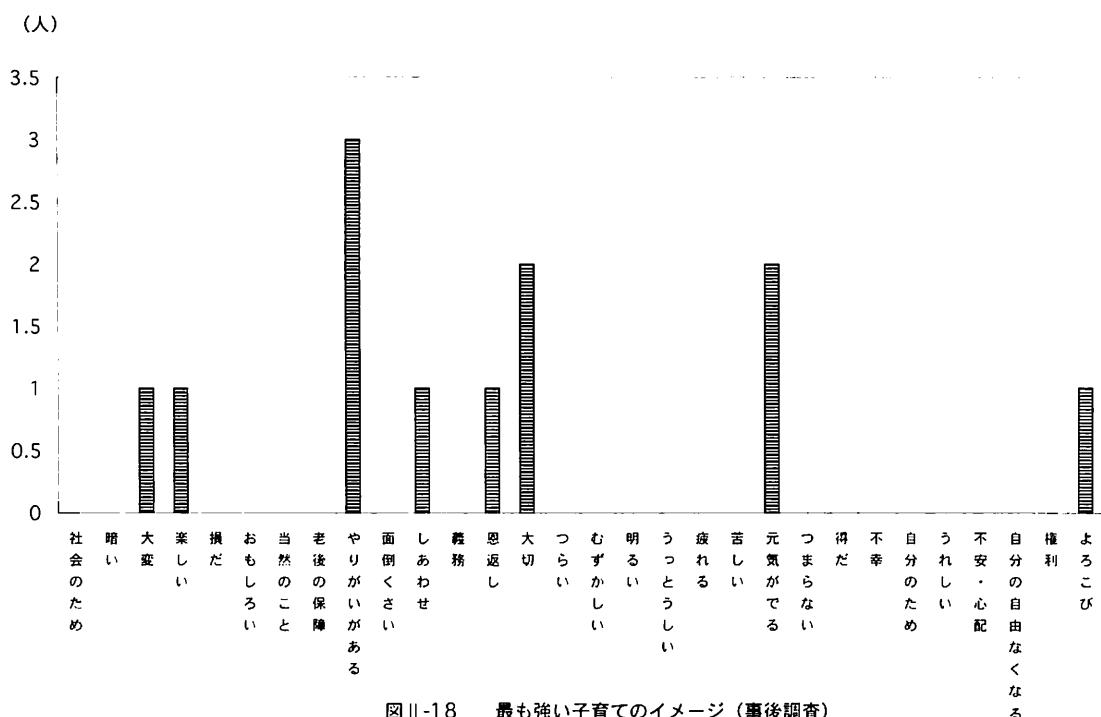
半数以上の生徒が肯定したのは、「かわいい」「楽しい」「おもしろい」「あたたかい」「好き」「小さい」「大切」「明るい」「元気がよい」「活動的」「力強い」「にこにこしている」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「嫌い」「うるさい」「暗い」「気持ち悪い」「退屈」「こわい」「生々しい」「うつとうしい」「にくらしい」「面倒くさい」「つまらない」「くさい」「大きい」「冷たい」であった。「こわれそう」「弱々しい」「すぐ泣く」「頑丈」は、肯定・否定ともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子どもの印象は、「かわいい」が7名で最も多く、ついで「活動的」2名、「あたたかい」「元気がよい」各1名、であった。そのような印象を持つ理由としては、実際に子どもと接したことや具体的なエピソードをあげる生徒がほとんどであった。

子育てに対するイメージの結果を図II-17、図II-18に示す。図II-17は項目ごとの対象者の回答の割合、図II-18はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

半数以上の生徒が肯定したのは、「社会のため」「大変」「楽しい」「おもしろい」「やりがいがある」「しあわせ」「大切」「むずかしい」「明るい」「元気ができる」「得だ」「自分のため」「うれしい」「不安・心配」「よろこび」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「暗い」「損だ」「老後の保障」「面倒くさい」「つらい」「うつとうしい」「苦しい」「つまらない」「不幸」「自分の自由がなくなる」であった。「当然のこと」「義務」「恩返し」「疲れる」「権利」は、肯定・否定ともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子育てのイメージは「やりがいがある」が最も多く3名、次いで



図II-17 子育てのイメージ（事後調査）



図II-18 最も強い子育てのイメージ（事後調査）

「大切」「元気がでる」各2名、「大変」「楽しい」「しあわせ」「恩返し」「よろこび」が各1名であった。そのような印象を持つ理由としては、子どもと実際に接し、その関わりの中で感じたことをあげている生徒が多くったが、一般論として、子どもが大きくなっていくときに考えられる問題点、子どもは「預かりもの（回答ママ）」であるという考え方、子どもが生まれてきたことそのものへの感謝をあげている生徒もいた。

③将来設計

自分の結婚については考えたことがあるのは12名で、その全員が結婚したいと答えた。結婚したい理由として、「あこがれ」「自分の家庭を持ちたい」各11名、「好きな人と暮らしたい」9名が多く、「なんとなく」「当然のこと」「子どもがほしい」各1名であった。

自分の子どもについても考えたことがあるのは12名、その全員が子どもがほしいと答えた。子どもがほしい理由として、「子どもが好き」12名、「楽しそう」11名、「あこがれ」10名が多く、「子どもを持って一人前」2名、「なんとなく」「当然のこと」各1名であった（複数回答）。

就労について、将来働きたいと考えている生徒は11名、働きたくないと考えている生徒は1名であった、働きたいと考えている生徒に対して、いつまで働きたいかをたずねたところ、「年をとって働けなくなるまで」4名、「子どもができるまで」4名、「結婚するまで」1名、「結婚、あるいは子どもができるまで働き子どもが成長したらまた働く」2名という回答であった。また、仕事と子育ての両立についてたずねたところ、9名は考えたことがあり、2名は考えたことがなかった。仕事と子育ての両立について考えたことのある生徒に対して、その考え方を問うと「両立させたい」4名、「両立させたいが難しそう」5名であった。

子どもを育てるのは誰だと思うかという質問に対しては、10名が「子どもの両親」と答え、2名が「子どもの母親」と答えた。

考 察

結果のところでも述べたが、保育所での「ふれあい体験」についての質問に対する自由記述の多くでは、具体的なエピソードが述べられ、それに対する感想が書かれている。具体的なエピソードとは、ある特定の場面での乳幼児の言動であったり、それに対する自分の対応への乳幼児の反応であったりした。感想も、肯定的なものが多い。また、「人形とは違う」「自分の思っていたのと違う」という感想を書いた生徒もあり、現実の乳幼児と関わることの意義が、ここにもあるといえよう。

子どもに対するイメージは、事前調査でも好意的であったが、事後調査ではそれがより鮮明になったといえる。全員が「まったくそうだ」あるいは「まったくそうではない」と答えた項目が大幅に増え、参加者に共通のイメージが生まれたとも考えられる。最も強いイメージが「かわいい」であることは事前調査と同じであるが、その割合は低下した。事前調査では誰もあげなかつた「活動的」が次点であり、これは、育児体験学習、特に保育所での「ふれあい体験」の影響が大きいと考えられる。一般論としての子どものイメージを作り上げるのに、乳幼児と実際に接する体験がベースになっていることは、

実体験の持つ重みを示していよう。たった一度の体験で、ある事柄に対する態度が形成されることはよく見られることではあるが、平成16年度の意識調査でも述べたように、育児体験プログラムを開発していくときに、留意すべき点である。

子育てに対するイメージでは、肯定・否定の割合が変化した項目があった。肯定から否定へ、否定から肯定へという大きな変化ではないが、「当然」「義務」は肯定から中立へ、「つらい」「自分の自由がなくなる」は中立から否定へ、「社会のため」は中立から肯定へと変化した。また、子育てに対するイメージのうち、最も強いものとしてあがった項目は、事前調査と大きく変化した。事後調査では、「やりがいがある」をあげた生徒が増えて最多になった、さらに、事前調査では皆無であった「大切」と答えた生徒が、増加した「元気ができる」と同数で次点である。事前調査で最も多かった「不安・心配」をあげた生徒はいなくなり、全体的にみて、子育てをより肯定的にとらえるようになったといえよう。その原因として、やはり育児体験学習プログラムに参加したことが考えられる。最も強いイメージの源泉について、子どものイメージの時と同様、保育所での「ふれあい体験」で、実際に乳幼児と関わったことから得られた様々な思いがあげられている。現実の乳幼児と親しく関わることで、「子ども観」のみならず「子育て観」をも変容する可能性が示唆されよう。

そして、このような体験は、自身の結婚や子ども、就労についての考えを変える場合もある。就労について、いつまで働きたいかという質問に対する回答が、事前調査と事後調査とで変化した生徒がいた。ある生徒は、事前調査では「歳をとって働けなくなるまで」と答えたが、事後調査では「子どもができたら一度やめて、手が離したらもう一度働きたい」と答えている。このケースは、育児体験学習をすることにより、子育ての重要さを認識し、仕事と子育てとを秤にかけたときに子育ての方に傾いたのだと解釈できるだろう。同様に、「50歳くらいまで」から「子どもができるまで」に変化した生徒もいる。逆に、「50歳くらいまで」から「歳をとって働けなくなるまで」へ変化した生徒もいる。この場合は、育児体験学習を通して、保育者という職業により魅力を感じるようになったのかもしれない。

仕事と子育ての両立に関しては、「両立させたいが難しそう」から「両立させたい」へ変わった生徒がいた。参加者が職業としての保育者を志望しているということと併せて考えると、育児体験学習に参加したことにより、職業としての保育と自分の子どもを育てるのこととの双方への意欲が、より高まったといえるのではないだろうか。

さらに、「子どもを育てるのは誰か」についての考えが変化した生徒もいる。事前調査の際には「一人の力ではなく、その子どもの周りのいるすべてのおとな」と答えた生徒が、事後調査の際には「子どもの母親」と答えている。この生徒の事後調査での自由記述をみると、楽しい、子どもはかわいい、といったことが繰り返し述べられており、子

どもや子育てに対して肯定的な気持ちを持つあまり、その時期を「独り占め」したいと考えたのだろうか。一方で、育児体験学習に参加したことで、もともとの保育者になりたいという気持ちがより強くなったという感想を述べている。保育所で1日過ごし、保育者という仕事をすばらしいと思うのにもかかわらず、「子どもを育てるのは母親である」と考えるようになったこのケースは、今後の育児体験学習プログラムを考えていく上で、重要な示唆を与えるものであるだろう。

以上のように、育児体験学習プログラムは、参加者の子どもや子育てに対するイメージをより肯定的にする影響を与えるといえる。特に乳幼児と直接関わることで、現実の乳幼児を実感し、相互交渉の相手として乳幼児をとらえることを可能にし、さらに、個人差や発達差を目の当たりにすることにより、乳幼児が成長途上にあることを認識する。このような体験は、現在小さな子どもと関わる機会のほとんどない高校生にとって貴重なものであろう。

3. 中学生の育児体験学習

1) 中学生の育児体験学習プログラムの作成過程

(1) 保育園と中学校との連絡

体験学習に際しては、中学校と保育園との連絡・調整が必要である。そのためには、中学校の管理者と実習担当教諭（家庭科担当教諭）との連絡や中学生の育児体験学習の受け入れ園の開拓が必要である。

受け入れ園の選定に先がけて、松戸市の「チャーリッシュフロア」（野菊野保育園）と、「まめっちょフロア」（子すづめ保育園）の2カ所を見学した。どちらも、中学生の育児体験学習を一緒に進めていけるという感触を得たが、松戸市立第一中学校と距離的に近いという条件から、野菊野保育園に協力を依頼した。

中学校との連絡・調整では、保育園から提示された10名の受け入れ枠を伝え、参加生徒の募集を依頼した。参加希望の生徒は6名存在したが、結果的に当日の参加者は4名であった。

(2) プログラム内容の検討

①事前指導の内容の充実を図る

- ・緊張感をほぐすため、講義から入らず、実技を先に行う。まず、衛生面と安全教育のために「手洗いの仕方」「うがいの仕方」を学ぶ。
- ・育児の擬似体験学習として「妊娠体験ジャケット着用」による生活動作体験や赤ちゃんの「抱き方」「寝かせ方」「おむつ交換」を行う。
- ・遊びのきっかけづくりとして「スライム作り」「玩具製作」「ふれあい遊び」を入れる。
- ・乳幼児の安全についての講義を聞き、ビデオ「保育所の一日」を視聴し保育所での乳幼児の生活を理解する。

②体験学習の体験内容を検討する。

- ・チャーリッシュフロアでの育児体験学習として、親子のかかわりや乳幼児の様子を観察する。また、作った「おもちゃ」を使って乳幼児と自発的にかかわる。
- ・野菊野保育園での育児体験学習として、0～5歳児のクラスの乳幼児とのふれあいを体験する。また、体験時間を午後までとし、午睡後の乳幼児の様子を観察したりかかわったりする。

③事後指導の場所や時間を検討する。

- ・野菊野保育園で、乳幼児が午睡中に保育室を借りて行う。

- ・副園長と主任保育士、生徒の話し合いの時間を設ける。
- ・乳幼児とかかわった直後に、育児体験学習を振り返る。

④その他の配慮事項

- ・「育児体験学習のしおり」の内容を検討し、図示を多くして生徒に分かりやすくする。
- ・乳幼児が安全に遊べる「おもちゃ」製作に必要な材料を準備する。また、製作にあたっては生徒自身も楽しみ、育児体験学習への意欲を高められるようにする。

表3 【中学生の育児体験学習プログラム】

項目	平成17年度プログラム	
目的	実際に乳幼児と触れ合うことにより、乳幼児の実際を体感し、子育ての楽しさと難しさを知る。	
実施日	2005年 8月1日、2日、3日(3日間)	
参加者	千葉県松戸市立第一中学校 1年生3名、2年生1名 計4名	
体験先	チエリッシュフロア(子育て支援センター)・野菊野保育園	
対象	チエリッシュフロア(0~3歳児の親子)／野菊野保育園(0~5歳児)	
1日目 8月1日 (月)	1. オリエンテーション 2. 「子ども・子育てに対する意識調査」① 3. 事前指導1：育児の擬似体験学習 ①手洗いの仕方とうがい ②赤ちゃん人形の抱き方、寝かせ方、おむつ交換の仕方 ③「妊婦体験ジャケット」着用体験 4. 事前指導2：乳児の生活についての講義及びビデオ視聴「保育所の一日」 5. 事前指導3：スライム製作・ふれあい遊びなどの実技学習 6. 事前指導4：保育園体験のオリエンテーション [所要時間:3時間]	
2日目 8月2日 (火)	<チエリッシュフロア> 1. 副園長の話 2. チエリッシュフロアでの体験 ・親子のかかわりを観察する ・親同士のかかわりを観察する ・乳幼児とかかわる(あやす、遊ぶ) ・作った「おもちゃ」を使って遊ぶ ・みんなと一緒に体操をする [所要時間:3時間]	
3日目 8月3日 (水)	<野菊野保育園> 1. 副園長の話 2. 乳児クラスと幼児クラスでの体験 ・乳幼児とかかわる(抱く、あやす、おむつ交換をする、遊ぶ) ・授乳、食事、おやつの観察及び介助 ・午睡時の着替えや寝かしつけの援助等 3. 保育園での反省会(午睡中に実施) ・各自感想を述べ合う。 ・副園長と主任保育士を交えての話し合い ・「子ども・子育てに対する意識調査」② [所要時間:3時間30分]	

2) 中学生の育児体験学習プログラムの試行結果

(1) 事前指導の様子

参加者4名は、中学1年生3名、2年生1名であった。非常に少人数ではあったが、公立中学校との初めての連携事業として実施できたことに大きな意味があったと考える。初めは見知らぬ会場で初対面の研究員と顔を合わせ、幾分緊張している様子であったが、子育てについての意識調査の後すぐに手洗いの仕方の指導を受け、赤ちゃん人形での育児の疑似体験に入った頃には大分ほぐれてきた。



【手洗いの仕方】



【ビデオ視聴の様子】



【人形を使った抱っこや寝かせ方】

緊張が和らいだところで保育所で生活する乳児の姿を映したビデオ教材を見ながら担当者が保育所の生活や乳児の様子について解説を交えた。ビデオを視聴している表情は場面により変化がみられ、解説も真剣に聞いていた。

若干の休憩時間とはさみ、妊婦体験ジャケット⇒スライム作り⇒タオルのボールやガラガラ作り⇒ふれあい遊びと実技学習が続き、飽きることなく楽しそうに行っていた。

特にスライム作りは感触を楽しみながら大分リラックスしたようで、手を動かしながら自然に自分たちの子どもの頃の遊びの話題が出てきた。出来上がったスライムをなかなかビニール袋にしまおうとせずいつまでも遊んでいたい様子であった。

おもちゃ作りでは、おもちゃ自体は単純で簡単に出来るものを用意していたが、1つ1つ凝った色彩や模様が工夫されており、かなり時間がかかった。

絵本の紹介では、小さい頃に出会った絵本を思い出し、歓声が上がっていた。



【スライム作り】



【おもちゃ作り】

<考察>

人形を使った疑似育児体験やおもちゃ作りに担当者は一方的に「指導」するというよりも一緒に参加するような形で行った。そのためか、事前指導が進んでいくうちに学校生活や自分の幼児期のことなどの話題が出てくるなど生徒の方も次第にリラックスする様子が見られた。特に、スライムやおもちゃ作りなど手を動かして何かを作りながら井戸端会議のような雰囲気になったときにその様子が窺えた。しかし、今回は参加希望者を募っての女子生徒のみの育児体験学習であり、もともと興味や意欲のある生徒が対象である。今後、育児体験学習に対して興味や関心の薄い生徒や男子生徒、あるいはもっと大勢の生徒を想定したプログラムとして改善していくという課題が残る。

(2) 子育て支援フロアでの育児体験学習

野菊野保育園の副園長とチェリッシュフロアの保育士を交え、事前オリエンテーションを受けてから參加した。オリエンテーションで乳幼児とのかかわり方として伝えられたことは以下の3点である。

- ・フロアの母親同士が話をしているときにふらふらしている子どもにかかわる。
- ・母親に声をかけて赤ちゃんを抱っこさせてもらう。
- ・専任保育士と参加親子全員で行う「手遊び」や「体操」の時間に参加する。



【保育園でのオリエンテーション】

※参加時間：チェリッシュフロアの開始から終了まで（9：30～11：30）

①生徒の様子

- 引率者と一緒にフロアに入る。生徒たちは事前指導のときに作った手作りおもちゃを持参し、乳幼児とかかわるためのきっかけとして使った。
- フロアは何時に来てもよいことになっていて、親子の出足は初めの20～30分はそれほど多くなく、しかも比較的月齢の低い乳幼児が多かった。生徒たちは戸惑いを見せながらも前日の事前学習以来の期待もあり、物怖じせず積極的に乳幼児や母親たちの方へ近づいていった。
- 生徒たちは、自分から声をかけて乳幼児とかかわったり、保育士の仲立ちにより乳幼児を抱っこさせてもらったり、フロアのおもちゃで一緒に遊ぶなどの姿が見られた。



【チェリッシュフロアでの様子】

- 親子が続々と参加し始め次第にフロアが混んでくると、2歳児以上の幼児が増え、移動や動きが激しくなり、生徒たちにもやや疲れが見え始めた。一方では、作ってきたタオルのボールやガラガラなどを使って盛んにいろいろな乳幼児とかかわろうとする生徒も見られた。母親同士も仲間との交流でリラックスしており終始協力的でよい雰囲気の中での体験であった。
- フロアの最後に親子のふれあい遊びや体操などを保育士が行う時間があり、そこに参加させてもらう。母親の代わりに乳幼児とペアを組んで行ったり、保育士の動きを真似て体を動かしたりしたが、照れながら行っている様子であった。しかし、終了時にはどの生徒も充実感溢れる表情であった。

②反省会

この日の子育て支援フロアの参加親子は全部で64組であった。フロア終了後、副園長、主任保育士、担当の保育士を交えて反省会を行った。

a. 生徒の感想

<乳児の観察>

- ・小さい赤ちゃんは「何してるんだろう？」とキョロキョロしていた。
- ・相手の赤ちゃんが自分の誘いかけにのってきてくれてかかわりやすかった。
- ・活発な子、すぐに泣いてしまう子、いろいろいて面白かった。
- ・元気な子、泣いている子、話しかけると逃げてしまう子、などいろいろいたが、おもちゃで遊べて積極的にかかわれたのでよかった。
- ・ボールが好きな子、電車のおもちゃが好きな子などみんな好きなものが違っていた。
- ・内気な子と元気な子の差が大きいと感じた。
- ・なついてくれる子もいたし、人見知りする子もいた。
- ・動くものに興味があった。
- ・赤ちゃんは、回るおもちゃやこちらの動作の真似をする。
- ・初めフロアが空いている頃はおもちゃで遊んでいたが、知り合いが到着したりして人数が増えてくると相手の名前を呼んで遊んでいた。

<母親観察>

- ・母親同士で「夜泣き」のことが話題になっていた。
- ・初めてフロアに来た親子がいたが、上手に自己紹介していて、互いに子どもの年齢を聞きあっていた。

<育児体験>

- ・面白かったが、疲れた。しかし、勉強になった。
- ・おもちゃなどを使って積極的に赤ちゃんとかかわることができてよかったです。
- ・本物の赤ちゃんを抱っこするときはドキドキした。また、動くので重く感じた。
- ・相手をしてあげたかったのに自分の顔をみた赤ちゃんが「ウッ」となったのはショックだった。
- ・相手の子どもが楽しんでくれると嬉しい。

b. 副園長および子育て支援フロアの担当保育士の話

- ・フロアに参加してくる子どもは家庭にいる子どもが多いため保育園の子どもたちと違って母親と離れにくい。そこを積極的にかかわってくれて嬉しかった。
- ・子どもは一人ひとりみな違うため育児書どおりにはなかなかいかない。このフロアに来て母親は我が子と他の子との違いを感じる。それを生徒たちが短時間の体験で気づいてくれたのは大変よかったです。

③実施上の留意点

引率者は、フロアでの活動には入り込まず、生徒の様子を把握しながら見守るようにした。また、保育士と援助の仕方について話し合うなどを状況に応じて行うこととした。

<考察>

生徒によって自分から積極的に親子とかかわろうとする者、1人では心細いのか友達と一緒に行動する者、緊張した面持ちの者、乳幼児を前ににこにこと笑顔の者など様々な様子がみられた。引率者は、安全面には十分な配慮が必要ではあるが、余程の場面でない限り極力声をかけずに見守ることにした。

生徒たちはフロアの保育士の助けを得ながらも、勇気を出して自分から母親に声をかけて乳幼児とかかわらせてもらったり、乳幼児からのかかわりに応えたり、親子の様子を間近で感じ取ったりしていた。ここでの体験の意味は、生徒自身がありのままに育児を体感することにあると言える。また、時には少し身を引いて観察することも有意義なことであると考える。

持参した乳幼児向けの手作りおもちゃは一緒に遊ぶための適度なきっかけとなっていた。生徒たちはよく乳幼児のペースを感じ取っており、無理におもちゃで遊ばせようと押し付けている姿は見られなかった。

体験後の反省会では、乳幼児とふれあえた手応えや1人1人みな異なる存在であることや、我が子を大切に守り育てている母親の姿を感じ取ることができたようであった。終了後の生徒たちの充実感あふれる表情から、自分自身を含め、どんな命も愛され尊重されるべき存在であることを感じ取ってくれたのではないかと思われた。このように、子育て支援フロアで今まさに育児の真っ最中である親子とかかわることが出来た体験の意義は非常に大きいと言える。

(3) 野菊野保育園での育児体験学習

育児体験学習の第3日目は、午前10時から午後4時まで野菊野保育園での実習であった。生徒はエプロン持参で参加し、意欲満々であった。10時半からの2時間と午後2時半から1時間、クラスをローテーションして保育に参加し、それぞれの配属クラスのデイリープログラムの流れに入れてもらった。午後の配属クラスへ行く前に0、1、2歳児クラスを全員体験してから各クラスへ移動した。

①体験の内容

保育園での体験学習で経験できた内容は次のとおりであった。

- ・食事、授乳の補助、おむつ交換
- ・乳幼児の抱っこや寝かしつけ
- ・乳幼児をあやす、遊ぶ
- ・2歳児以上のクラスでスライムで遊ぶ
- ・幼児クラスで描画や製作活動を見学
- ・幼児クラスの午睡時の寝かしつけ



【食事】

②生徒の様子

○子育て支援フロアと保育園に2日続けて参加ということで慣れてきたのと同時に、前日の保育士の話のとおり、保育園の乳幼児は人懐っこく乳幼児の方から盛んに働きかけてきてくれるので生徒たちを喜ばせた。

○乳児クラスではこの日も自分が作った手作りおもちゃ（ガラガラなど）を使って乳児をあやしたり、一緒に遊んだりした。

○なかなか泣き止まず困ってしまうような場面でもすぐ近くに保育士が複数いて声をかけたり、代わったりしてくれたためそれほど大変なことにはならずには済んでいた。



【授乳】

○2歳児以上のクラスでは保育士が事前学習で作ったスライムと一緒にかかわる時間を設けてもらつたことも嬉しかった様子である。

○4、5歳児クラスのホールでの午睡準備の場面に参加した生徒は複数の幼児から同時にかかわりを求められたり、立ち去ることをいやがれられたり、引っ張ったり叩いたりして自分のところに留めようとする幼児たちの反応に戸惑い、困った様子を見せていた。

○昼食を別室でとらせてもらっている間、生徒たちはすっかりリラックスし、興奮気味で口数が多くなっていた。午後の時間が終了する頃には、立ち去り難い様子で、「また来たい！」という声がきかれ、実際に保育士に願い出ている生徒もいた。



【赤ちゃんと遊ぶ】



【スライムで遊ぶ】

(4) 事後指導の結果

①昼食後の反省会

午前中の体験と午後の体験との間で反省会を設けた。午前中の体験直後であるため、印象が鮮明なうちに体験を振り返ることができた。

a. 生徒の感想

<乳幼児とのかかわり（前日の子育てフロアとの比較）>

- ・4歳児クラスで、子どもの方から来てくれて、すぐに全員と話せるようになって隣のクラスの子にも「こっちに来て」と言われ、すぐに仲良くなれるんだなと思った。
- ・3歳児クラスの中に一歩入ったら、子どもたちがワーアーっと寄って来てくれて本当に可愛くてみんなどんどん話しかけてきてくれてすごく嬉しかった。
- ・向こうからひゅっと来てくれる。立っているとスッと手をつないできてくれて、昨日のフロアの子どもとは全然違った。
- ・母親とずっと一緒にいる子どもは、まだ「お母さん、お母さん」という感じで知らない人が入ってくると「何、この人」という感じだが、保育園の子どもは自分の方から来てくれてかかわりやすかった。

<乳幼児について>

- ・転んだりしてちょっと泣いてもすぐに泣き止んでしまう感じで強いなと思った。

昨日のフロアの子どもは一度泣くとお母さんの方にずっとくっついている感じだった。

- ・年齢の差もあるのだろうが、母親がいなくても泣かない。泣いたときも理由は「バカって言われた」とかそういう感じで、友達とけんかもする年なんだなと思った。
- ・魚がビチビチ跳ねるみたいな感じで元気だった。
- ・ごはんを食べているときお茶をついでいたら「お茶少な目にして」とかいろんな注文をしてくる子どももいた。用意しているときに後ろで遊んでいて先生に怒られている子もいた。手洗いのときに、「オレが先だよ」と言ってまだ自己中心的だなと思った。
- ・3歳では、しゃべるのが好きみたいで、しゃべるのがすごく早くて聞き取れなくて聞き取れないときは「もういいや」という感じになった。一人の子がしゃべるとみんな話しかけてきて真似をする。一人の子が何かしているとみんなも同じようにやりたがる。
- ・わざとご飯を顔につけて「見て見て」とふざけたりする。

<食事について>

- ・食事は、たくさん食べる子もいたし、「食べたくない」という子もいてそれぞれ食べる量が違うんだなと思った。自分におかずを取ってくれようとする子もいた。
- ・食事のとき手で食べようとする子もいたが、口の中が空っぽになるとスプーンを指差して口を開けて「ほらもう口の中ないよ」と意思表示してくれた。

<午睡について>

- ・お昼寝のとき、自分たちが寝かしつけようとしても騒いでしまって全然寝ないので先生が抱っこしたりするだけですぐ眠たそうになってびっくりした。

<スライムや手作りおもちゃで遊んでみて>

- ・スライムを伸ばしたり、混ぜたり、ちぎったりした。片付けるのが大変だった。
- ・スライムの色を見て「すっぱそうなキャンディー」とか「ミミズ～」と言ったりした。
- ・スライムを触っては「つめた～い」と何度も言っていた。
- ・スライムを「むにゅむにゅねんど」と言っていた。
- ・初めはおもちゃを独り占めしようとしていたがそのうちに友達と一緒に遊んでいた。
- ・欲張りな子がいて2つ一遍に持ったりしていた。
- ・4歳児クラスでは、ボールのおもちゃはすぐに飽きられた。
- ・0歳児クラスはガラガラやボールを喜んでくれた。投げたり、舐めたりしていた。
- ・おもちゃは音がすることに興味を持っていた。
- ・あんなに舐めるとは思わなかったので、おもちゃによって材料にむくものとむかなかいものがあるのだと思った。

b. 主任保育士の話

- ・寝かしつけるコツとしては、子どもは身体を触ってもらうと気持ちいい場所がいろいろあって、頭とか眉間とか背中とか、足、耳たぶなどいろいろである。その子によっ

て好きな場所があるので毎日かかわっているとそれが分かる。中には日によって違うリクエストを出してくる子どももいる。また、確かに年齢が大きくなると少し寝にくくということはある。

- ・食事は今は手づかみであっても自分で食べる楽しさを経験して欲しいと思っている。
- ・食事量は、個人差のほかに体調も影響があるので調理法を変えたりして対応できるようにしている。
- ・大きいクラスになると言葉で意思表示するようになるので、いろいろな注文が出てくるようになる。好き嫌いがあると嫌がる場合もあるが、少しづつ食べられるようにしていく。
- ・4、5歳になると友達と遊ぶようになるが、1歳でも「ちょうどい」と言われると執着がなくすぐに手離してしまう反面、このおもちゃがいいという気持ちを出してくる姿も見られる。

②体験終了後の事後指導

全ての体験終了後に各自の感想を聞き、「子ども・子育てに対する意識調査」への記入を行った。感想の内容自体は前日とそれほど変わらないが1つひとつの言葉に実感がこもっていた。全員疲れた様子ではあったが、表情は明るく満足感が現われていた。

担当者の方からは、子どもへの興味を今後も持ち続けて欲しいことと機会があるならばまたこのような場を選んで是非参加して欲しいということのみ伝え、体験についての意味づけは敢えて行わずにまとめとした。

<考察>

中学生の育児体験学習の結果として次の3点が考えられる。

1. クラスへの配属人数について

園にとって乳幼児の生活の流れを大きく乱すことなく生徒を受け入れ、生徒にとって乳幼児とじっくりかかわることが可能になるためには、配属人数が少ないことが望ましい。今回は特に4名と少ない人数であったため、生徒たちの希望するクラスへの配属が可能となった。今後、より多くの人数での育児体験学習を想定すると、この点をどうするかということが課題となる。

2. 受け入れ態勢について

園側が非常に好意的に生徒たちを受け入れてくれたことにより、生徒1人1人が満足できる体験となった。園としての姿勢が個々のクラスの保育士に浸透しており、生徒たちは各クラスで温かく迎え入れてもらった。他者により温かく受け入れられたことを実感できたことにより、生徒たちはより積極的に育児体験学習に向かうことができたと言える。

3. プログラムの日程について

2日間連続した体験学習プログラムである点も体験の内容にプラスに作用した要因となっていたのではないか。今回は、前日の親子フロアでの乳幼児とのふれあい体験があることにより、翌日の保育園での育児体験学習への意欲を高める結果となった。もし、仮に親子フロアでのふれあい体験が思うようにいかない生徒がいた場合でも、連続した時間の中で最初の体験の意味を新たにしていくことが十分可能である。育児の様々な局面に出会うという意味で、単発の体験ではあっても2日間連続していることの意義がここにあるのではないだろうか。プログラムの内容については今後さらに検討すべき課題である。

3) 「子ども・子育てに対する意識調査」の結果

(1) 体験者の事前・事後の意識調査

1. 事前調査

目的

本調査の目的は、育児体験学習を経験する前の中学生が、子どもや子育てに対して抱いているイメージを明らかにすることである。また、育児体験学習後にも同様の調査を行うことにより、育児体験学習が子どもや子育てなどについての態度に与える影響についても検討する。同時に、育児体験学習プログラムの一環として本調査を行うことにより、参加者の子どもや子育てに対する意識を活性化することも目的とする。

方法

調査対象者 育児体験学習に参加した中学生女子4名（1年生3名、2年生1名）

調査項目 調査項目は、以下のようであった。

- ①過去の育児体験・保育体験：これまで、「育児体験」「保育体験」などをしたことがあるか、あるとしたらその時期、場所、目的
- ②生育環境：きょうだいの数とそのうちの何番目であるか、幼い頃に年下のきょうだいやいとこと遊んだ経験、幼い頃のいちばん楽しかった思い出、父母の就労状況、幼稚園・保育所への通園状況、学童保育の経験の有無
- ③現在の状況：乳幼児と遊ぶことがあるか、乳児を抱いたことがあるか、乳児の世話をしたことがあるか、小さな子どもに対するイメージとその理由、子育てに対してのイメージとその理由
- ④将来設計：自分の結婚についての考え方、自分の子どもについての考え方、就労に対する考え方、子どもを育てるのは誰か
- ⑤この育児体験学習への期待

手続き 調査は、育児体験学習プログラムの一環として、事前指導の冒頭で一斉に行われた。調査用紙を配布し、事後調査との対応をとるための記名を求めた。対象者は自分のペースで回答していくが、所要時間は約30分であった。調査項目への回答は、設問により、選択式、自由記述によって行われた。小さな子どもに対するイメージと子育てに対するイメージについては、30項目について5件法で回答を求めた（まったくそうだ：1、まったくそうではない：5）上で、最も強いものを1つだけ選ばせた。

結果

①過去の育児体験・保育体験

これまでに、育児体験や保育体験をしたことのある生徒は1名であり、その時期は

小学校5、6年時、体験の場所は無回答だが、目的としては、学校の授業として、1年生と遊んだり世話をしたりしたというものであった。

②生育環境

きょうだい数は2人が3名であり、第1子である人、第2子である人が各2名であった。幼い頃、年下の子どもと遊んだ経験は、「いつも遊んだ」1名、「時々遊んだ」2名であった。また、幼い頃のいちばん楽しかった思い出については、日常の遊びに関すること、家族との旅行などイベント的なもの、小学校1年の時に県展の絵をはじめて描いたことがあげられた。全員の父親が、対象者が生まれたときから働いており、また、2名の母親が働いていた。母親の就労開始時期は、2名とも小学校入学頃からであった。幼稚園に通っていた生徒が3名、保育所に通っていた生徒が1名であり、通園開始時期は2歳からが1名、4歳からが3名、5歳からが1名であり、学童保育に通った生徒は1名であった。

③現在の状況

現在、乳幼児と遊ぶ機会について、たびたび遊んでいる生徒が1名、時々遊んでいる生徒が2名、あまり遊んでいない生徒が1名であった。全員が乳児を抱いたことがあるが、乳児の世話をしたことがある生徒は3名であり、世話の種類としては、着替え、あやす、遊ぶことをあげた生徒が最も多く3名、おむつの交換2名、ミルクを飲ませる、ねかしつけるが各1名いた。(複数回答)。

小さな子どもに対するイメージの結果は以下の通りである。半数以上の生徒が肯定したのは、「かわいい」「楽しい」「おもしろい」「あたたかい」「好き」「こわれそう」「小さい」「大切」「明るい」「元気がよい」「すぐ泣く」「活動的」「にこにこしている」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「嫌い」「うるさい」「暗い」「気持ち悪い」「退屈」「こわい」「なまなましい」「うつとうしい」「にくらしい」「面倒くさい」「つまらない」「くさい」「大きい」「頑丈」「冷たい」であった。「弱々しい」「力強い」は、肯定・否定とともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子どもの印象は、「かわいい」が3名、「笑顔」1名であった。そのような印象を持つ理由としては、表情や行動、外見をあげる生徒が多く、実際に子どもと接したり世話をしたりした経験からと答える生徒もいた。

子育てに対するイメージの結果は以下の通りである。半数以上の生徒が肯定したのは、「大変」「楽しい」「おもしろい」「当然」「やりがいがある」「しあわせ」「義務」「大切」「つらい」「むずかしい」「明るい」「自分のため」「うれしい」「不安・心配」「よろこび」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「社会のため」「暗い」「損だ」「老後の保障」「面倒くさい」「恩返し」「うつとうしい」「疲れる」「元氣ができる」「つまらない」「得だ」「不幸」「権利」であった。「苦しい」「自分の自由がなくなる」

は、肯定・否定ともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子育てのイメージは「大変」「楽しい」「やりがいがある」「愛情」と、各1名ずつ分かれた。そのような印象を持つ理由としては、実際に世話をした経験からという生徒もいたが、一般的な子どものイメージや思い入れを答えるものが多かった。

④将来設計

自分の結婚については考えたことがあるのは3名、そのうち結婚したい生徒が2名、結婚したくない生徒が1名だった。結婚したい理由として、「自分の家庭を持ちたい」「好きな人と暮らしたい」が各2名、「なんとなく」「あこがれ」「当然のこと」が各1名であった。結婚したくない理由としては、「結婚に幻滅している」「自分には結婚生活は向いていない」「仕事を続けたい」があげられた（複数回答）。

自分の子どもについて考えたことがあるのは4名で、子どもがほしい生徒が3名、ほしくない生徒が1名であった。子どもがほしい理由として、「子どもが好き」3名、「楽しそう」2名、「なんとなく」「あこがれ」「子どもを持って一人前」「当然のこと」各1名であった。子どもがほしくない理由としては、「1人で、あるいは配偶者と2人だけで暮らしたい」「自分には子どもは育てられない」各1名であった。（複数回答）。

就労について、全員が将来働きたいと考えていた。いつまで働きたいかをたずねたところ、「年をとって働けなくなるまで」「50歳くらいまで」「子どもができるまで」「出産まで働き子どもが成長したらまた働く」各1名という回答であった。また、仕事と子育ての両立についてたずねたところ、全員考えたことがなかった。

子どもを育てるのは誰だと思うかという質問に対しては、3名が「子どもの両親」と答え、1名が「みんな」と答えた。

⑤育児体験学習への期待

この育児体験学習に期待することとしては、ほとんどの生徒が「子どもの接し方を知りたい」と答えた。また、子どもの好きなことと嫌いなこと、大人の対応に対する反応について知りたいという意見も述べられていた。

考 察

今回、この育児体験学習に参加した生徒は、過去に乳幼児を対象とした育児体験・保育体験を行ったことがなく、この育児体験学習が初めての機会となる。そのため、「子どもとはどのようなものなのか知りたい」という期待をもったのだろう。

生育環境としてきょうだいの数をきいたところ、回答したすべての生徒がきょうだいがいると答えているが、2人きょうだいばかりであり、出生順が上の生徒がと下の生徒（末っ子）とに分かれた。そのためか、幼い頃に年下の子どもと遊ぶという経験はあまり豊富とはいえない。中学生となった現在も、小さな子どもと遊ぶ機会にはあまり恵まれ

ていないようである。一般に、少子化の影響もあり最近の子どもたちは異年齢児との交流が少なくなってきており、特に自分より年少の子どもと関わる機会がほとんどないといわれているが、確かに小さい子どもと接する機会は少ないといえよう。これは、平成16年度、17年度の高校生の調査の結果とも一致する。過去の育児体験・保育体験についていた際に、小学校の高学年の時、1年生と関わった経験があると答えた生徒がいたが、これは、少しでも異年齢児との交流を進めようとする学校としての取り組みなのかもしれない。繰り返し述べるが、異年齢児が関わる機会の減少は、きょうだい数が減ったことによる影響もあるだろうが、日常生活を送る上で、乳幼児と中学生・高校生との接点がほとんどないこともその原因の一つと考えられる。両者の交流が希薄であることが問題であるとするならば、本プログラムの意義の一つとして、短い時間ではあっても乳幼児と中学生・高校生とが共にいる場を提供するということがあげられよう。

本調査の対象者のもつ「子ども」に対するイメージは、全体として好意的なものであった。子どものイメージとして最も強いのは「かわいい」であり、そのイメージの源泉は、一般的に流布している子ども観、たまたま見かけた子どもの様子などであり、自分の実感とは隔たった観念としての子どものイメージのように見受けられる。こうした子どものイメージが持たれるのも、子どもと接する場が少ないとこれが影響していよう。一方で、自分が実際に子どもと関わった経験から子どものイメージを作り上げている生徒も見受けられた。いずれにしても、子どもと直接接する機会を設けることが、子どもをどのようにとらえるかということに、少なからず影響を及ぼすものと考えられる。

「子育て」のイメージについては、全体として「いいことも悪いこともある」という受けとめられ方をしているようである。最も強い子育てのイメージは各人で異なるが、肯定的に受けとめている生徒の方が多い。そのイメージの源泉は、肯定的なものにしろ、否定的なものにしろ、一般に流布している子ども観、子育て観を反映しているようで、観念的であるといえる。中学1年生、あるいは2年生という年齢を考えると、また、これまで小さな子どもとほとんど接する機会がなかったことを考えると、これは無理のないことであろう。

現実感に乏しいのは、自分の将来についての回答でも同じである。たとえば、「子どもはほしいしづと働き続けたい」と思いながら、仕事と子育ての両立ということには考えが及ばない。あるいは、「結婚については考えたことはないが、子どもはほしいと思う」など。一方で、働き方についていわゆる「M字カーブ（女性の就労者が、いわゆる子育て世代に少なく、M字型になっている）」にのった考え方をもつ生徒もいる。これは、まさに現実的なものである。ここに、中学生がおかれているアンバランスな位置を見ることができよう。年齢的に当然のことではあるが、自分自身の将来について、具体的に考えるだけの知識も情報も方法もまだ十分にもたずにいながら、現実はこうであると突きつ

けられる。ゆっくりと大きくなることを保証する必要があるのではないか。また、本プログラムは、自分自身で考えていくための材料のいくつかを提供できるものでなければならないだろう。

2. 事後調査

目的

本調査の目的は、育児体験学習を経験した後の中学生が、子どもや子育てに対して抱いているイメージを明らかにすることである。また、育児体験学習前に行った同様の調査と比較することにより、育児体験学習が子どもや子育てなどについての態度に与える影響についても検討する。同時に、育児体験学習プログラムの一環として本調査を行うことにより、参加者が保育所での「ふれあい体験」を振り返り、そこで得られたものを定着させることも目的とする。

方法

調査対象者 事前調査の対象者と同一の4名

調査項目 調査項目は以下のようであった。

- ①保育所での「ふれあい体験」：乳幼児と遊んだか、どのような遊びをしたか、その際どのようなことを感じたか、乳児を抱いたか、その際どのようなことを感じたか、乳児の世話をしたか、どのような世話をしたか、実際に乳幼児と関わってみて最も印象に残っていること
- ②現在の状況：小さな子どもに対するイメージとその理由、子育てに対してのイメージとその理由
- ③将来設計：自分の結婚についての考え、自分の子どもについての考え、就労に対しての考え、子どもを育てるのは誰か
- ④この育児体験学習全体の感想

手続き 保育所で、すべての体験学習が終了した後に実施した。他は事前調査に準ずる。

結果

①保育所での「ふれあい体験」

保育所で乳幼児と一緒に遊んだかという質問に対しては、「たくさん遊んだ」3名、「まあまあ遊んだ」1名であった。遊びの種類については、ボール遊びやおもちゃでの遊び、本を読むこと、おしゃべりなどが行われていた。おもちゃの中には、参加者自身が事前指導の一環として自作したおもちゃ（スライムなど）も含まれていた。また、子どもと遊んで感じたことは、「かわいい」「うれしい」という感想が多かった。また、

子どもがよくしゃべることに気づいた、慕ってくれたという感想も多かった。

全員が乳児を抱いてみており、その感想として、3名が「重い」「ずっしり」と感じていたが、1名は親戚の1歳児と比較して軽く感じていた。他には、「あたたかい」「やわらかい」「少しこわい」という感想を寄せた。乳児の世話をした生徒も全員で、世話の種類（複数回答）は「遊ぶ」4名、「ミルクを飲ませる」「着替え」「寝かしつける」「あやす」「食事の世話」各3名、「おむつ交換」1名であった。

乳幼児と関わって最も印象に残っていることとして、「かわいい」と答えた生徒が多かった。また、「乳幼児が自分になつたことがうれしい」という感想も多かった。具体的な場面を示し、楽しかったという生徒もいた。

②現在の状況

小さな子どもに対するイメージの結果は以下の通りである。半数以上の生徒が肯定したのは、「かわいい」「楽しい」「おもしろい」「あたたかい」「好き」「小さい」「大切」「明るい」「元気がよい」「すぐ泣く」「活動的」「力強い」「にこにこしている」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「嫌い」「暗い」「気持ち悪い」「退屈」「こわい」「弱々しい」「なまなましい」「うつとうしい」「にくらしい」「面倒くさい」「つまらない」「くさい」「大きい」「頑丈」「冷たい」であった。「うるさい」「こわれそう」は、肯定・否定とともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子どもの印象は、「明るい」2名、「かわいい」1名であった。そのような印象を持つ理由としては、表情や行動、外見をあげる生徒が多かった。

子育てに対するイメージの結果は以下の通りである。半数以上の生徒が肯定したのは、「大変」「楽しい」「おもしろい」「やりがいがある」「しあわせ」「義務」「大切」「つらい」「むずかしい」「明るい」「疲れる」「元気がでる」「得だ」「自分のため」「うれしい」「よろこび」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「暗い」「損だ」「老後の保障」「面倒くさい」「恩返し」「うつとうしい」「苦しい」「つまらない」「不幸」「自分の自由がなくなる」であった。「社会のため」「当然」「不安・心配」「権利」は、肯定・否定とともにあり、中立的回答も多かった。また、最も強い子育てのイメージは「むずかしい」2名、「楽しい」「愛」各1名だった。そのような印象を持つ理由としては、実際に世話をしたり、かかわったりした経験からという生徒もいたが、一般的な子どもや子育てのイメージを答えるものもいた。

③将来設計

自分の結婚については考えたことがあるのは3名で、そのうち2人が結婚したいと答えた。結婚したい理由として、「好きな人と暮らしたい」2名、「なんとなく」「あこがれ」「自分の家庭を持ちたい」各1名であった。結婚したくない理由としては、「結婚に幻滅している」「自分には結婚生活に向いていない」「仕事を続けたい」があげら

れた（複数回答）。

自分の子どもについて考えたことがあるのは4名で、子どもがほしい生徒が3名、ほしくない生徒が1名であった。子どもがほしい理由として、「あこがれ」「楽しそう」「子どもが好き」各3名、「なんとなく」2名、「子どもを持って一人前」「当然のこと」各1名であった。子どもがほしくない理由としては、「なんとなく」「自分には子どもは育てられない」各1名であった。（複数回答）。

就労について、全員が将来働きたいと考えていた。いつまで働きたいかをたずねたところ、「年をとって働けなくなるまで」「50歳くらいまで」「子どもができるまで」「出産まで働き子どもが成長したらまた働く」各1名という回答であった。また、仕事と子育ての両立についてたずねたところ、考えたことがある生徒が2名、考えたことがない生徒が2名で、考えたことのある生徒に対してその内容を問うたところ、「両立させたい」「両立させたいがむずかしそう」が各1名であった。

子どもを育てるのは誰だと思うかという質問に対しては、3名が「子どもの両親」と答え、1名が「みんな」と答えた。

考 察

子どもに対するイメージは、事前調査でも好意的であったが、事後調査ではそれがより鮮明になったといえる。全員が「まったくそうだ」あるいは「まったくそうではない」と答えた項目が大幅に増え、参加者に共通のイメージが生まれたとも考えられる。最も強いイメージが「明るい」になり、事前調査の「かわいい」から変化した。事後調査でも「かわいい」をあげている生徒もいるが、合計8回の調査のうち、「かわいい」が最多にならなかつたのははじめてである。これは、育児体験学習、特に保育所での「ふれあい体験」の影響が大きいと考えられる。ほとんど乳幼児と関わったことのない参加者にとって、乳幼児の「明るさ」は、ある意味で衝撃だったのかもしれない。

また、子育てに対するイメージも、事前調査と事後調査とでは大きく変化した。全体的に、事後調査の方が肯定的になったといえよう。最も強いものとしてあがった項目は、「むずかしい」が増え、逆に否定的になったように見えるが、本プログラムに参加したことにより、特に保育所で乳幼児との「ふれあい体験」を経験したことにより、実際の子どもとはどのようなものであるか、子どもと関わるとはどのようなことであるかの一端に触れ、頭のみで考えていた子どもや子育てについて、身体でも考え始めたということを示しているのではないだろうか。

本プログラムの参加者たちが身体でも考え始めたということは、仕事と子育てとの両立について、このプログラム期間中に考えてみたものがいるということからも示唆されよう。

繰り返しになるが、本プログラムに参加した中学生は、これまでほとんど小さな子どもと関わってきていない。それどころか、本人たち自身が、ついこの間まで小さな子どもとして「関わられる」存在だったのである。思春期の入り口に立った子どもたちが、より小さい、人生を始めたばかりの子どもたちに出会うことは、自分たちが育ってきた過程や今の自分を見つめ直す好機になるのではないだろうか。そして、できることならば自分を自覺的に肯定し、これから自分の自分を考えはじめるきっかけとすることを望む。育児体験学習プログラムの意義は、このような点にあるだろう。

（2）非体験者の意識調査

目的

本調査の目的は、育児体験学習を経験しない中学生が、子どもや子育てに対して抱いているイメージを明らかにすることである。加えて、体験者の事前調査の結果と比較することも目的とする。

方法

調査対象者 育児体験学習への参加者と同じ学校に通う中学1年生261名（男子136名、女子125名）

調査項目 体験者への事前調査の項目に準ずる。ただし、⑤育児体験学習への期待は除き、その代わりとして「今後機会があれば、育児体験・保育体験をしてみたいか」を聞いた。

手続き 体験者への調査手続きに準ずる。ただし、実施は学校に依頼し、記名も求めなかった。

結果

①過去の育児体験・保育体験

これまでに育児体験・保育体験したことのある生徒は11%であった。体験したことのある生徒のうち、その時期（複数回答）は、小学校低学年が24%、小学校高学年が97%、中学校1年が38%であり、実施場所（複数回答）は幼稚園が10%、保育所が28%、児童館が14%、学校が14%、その他が35%であった。目的（複数回答）としては学校の授業が3%、学校の行事としてが17%、学校のクラブ・部活動でが3%、個人のボランティアとしてが31%、その他が41%であった。

②生育環境

きょうだいの数は1人が11%、2人が53%、3人が27%、4人が7%、5人以上が2%であり、第1子である人が51%、第2子である人が35%、第3子である人が13%、

第4子である人が0.8%、第5子以上である人は0%であった。幼い頃、年下の子どもと遊んだ経験は、「いつも遊んだ」32%、「たびたび遊んだ」18%「時々遊んだ」29%、「あまり遊ばなかった」6%、「めったに遊ばなかった」3%、「まったく遊ばなかった」7%であった。また、幼い頃のいちばん楽しかった思い出については、日常の遊びに関すること、家族との行事、旅行や遊園地などのイベント的なもの、幼稚園・保育所での行事などがあげられた。それらの思い出に登場するのは、日常の遊びに関するときょうだい、友達が多く、イベント的なものについては家族、親戚が多かった。94%の父親が働いており、その就労開始時期は生まれたときからが91%、3歳頃からが3%、小学校入学の頃からが1%、中学校入学以降が3%であった。また、66%の母親が働いており、母親の就労開始時期は、生まれたときからが20%、3歳頃からが11%、小学校入学の頃からが40%、中学校入学の頃からが21%、それ以降が8%であった。幼稚園に通っていた生徒が82%、保育所に通っていた生徒が20%であり、どちらにも通っていないものが0.4%いた（四捨五入のため合計が100%にならない）。通園開始時期は0歳からが5%、1歳からが3%、2歳からが5%、3歳からが29%、4歳からが38%、5歳からが15%であり、学童保育に通った生徒は13%であった。

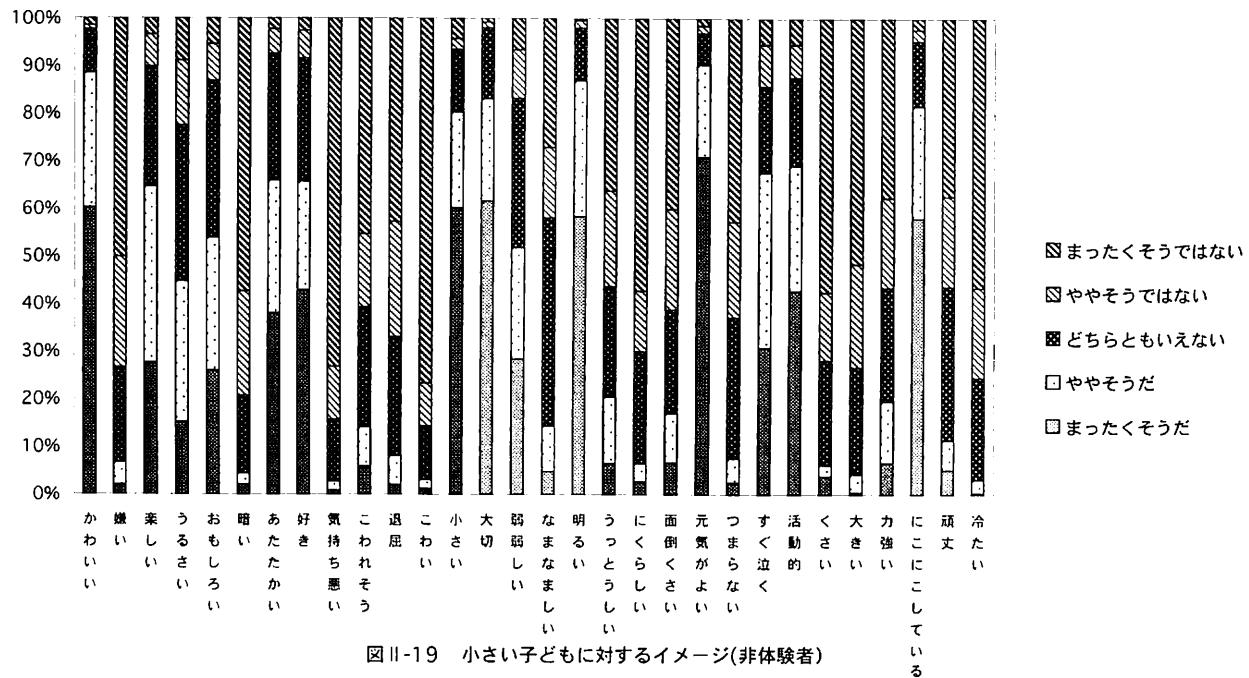
③現在の状況

現在、乳幼児と遊ぶ機会について、いつも遊んでいる生徒が3%、たびたび遊んでいる生徒が10%、時々遊んでいる生徒が27%、あまり遊んでいない生徒が18%、滅多に遊んでいない生徒11%、まったく遊んでいない生徒28%であった。乳児を抱いたことがある生徒は71%、乳児の世話をしたことがある生徒は48%であり、そのうちの世話の種類としては、遊ぶことをあげた生徒が最も多く89%、以下、あやす59%、寝かしつける43%、ミルクを飲ませる42%、着替えさせる31%、ミルクの用意25%、おむつの交換23%、お風呂に入れる11%であった（複数回答）。

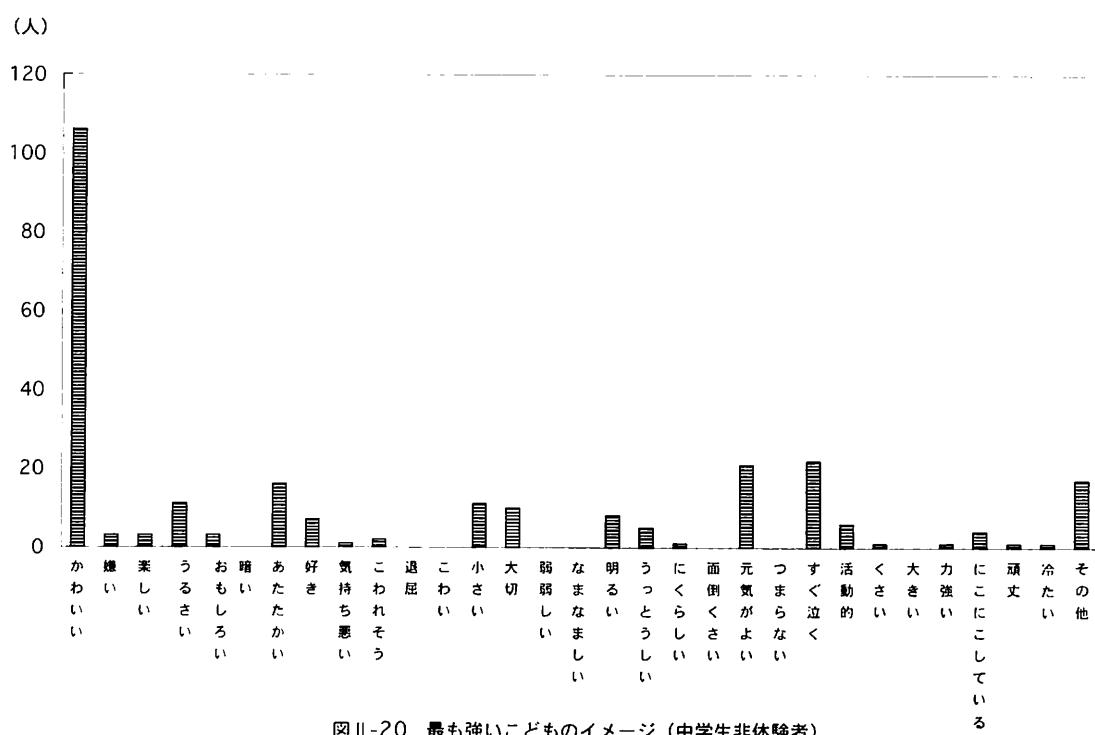
小さな子どもに対するイメージの結果を図II-19、図II-20に示す。図II-19は項目ごとの対象者の回答の割合、図II-20はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

半数以上の生徒が肯定したのは、「かわいい」「楽しい」「おもしろい」「あたたかい」「好き」「小さい」「大切」「弱々しい」「明るい」「元気がよい」「すぐ泣く」「活動的」「にこにこしている」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「嫌い」「暗い」「気持ち悪い」「こわれそう」「退屈」「こわい」「うつとうしい」「にくらしい」「面倒くさい」「つまらない」「くさい」「大きい」「力強い」「頑丈」「冷たい」であった。「うるさい」「なまなましい」は、肯定・否定とともにあり、中立の回答も多かった。また、最も強い子どもの印象は、「かわいい」が41%で最も多く、ついで「すぐ泣く」8%、「元気がよい」が8%と続く。そのような印象を持つ理由としては、表情や行動、外見をあ

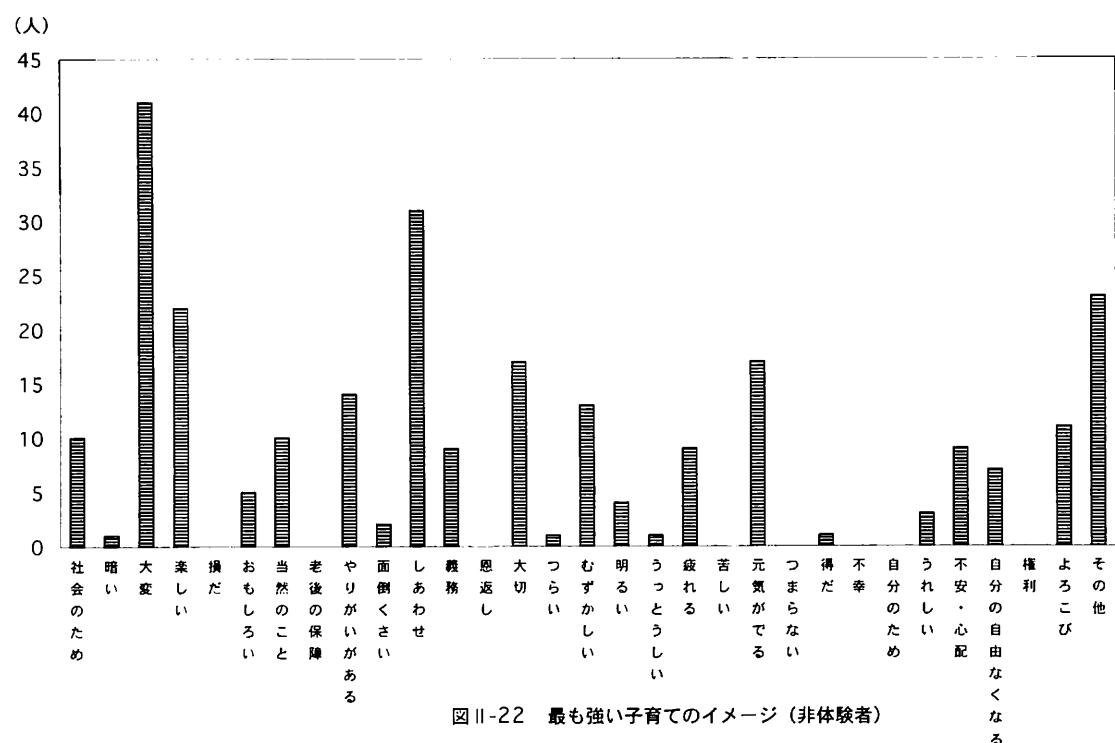
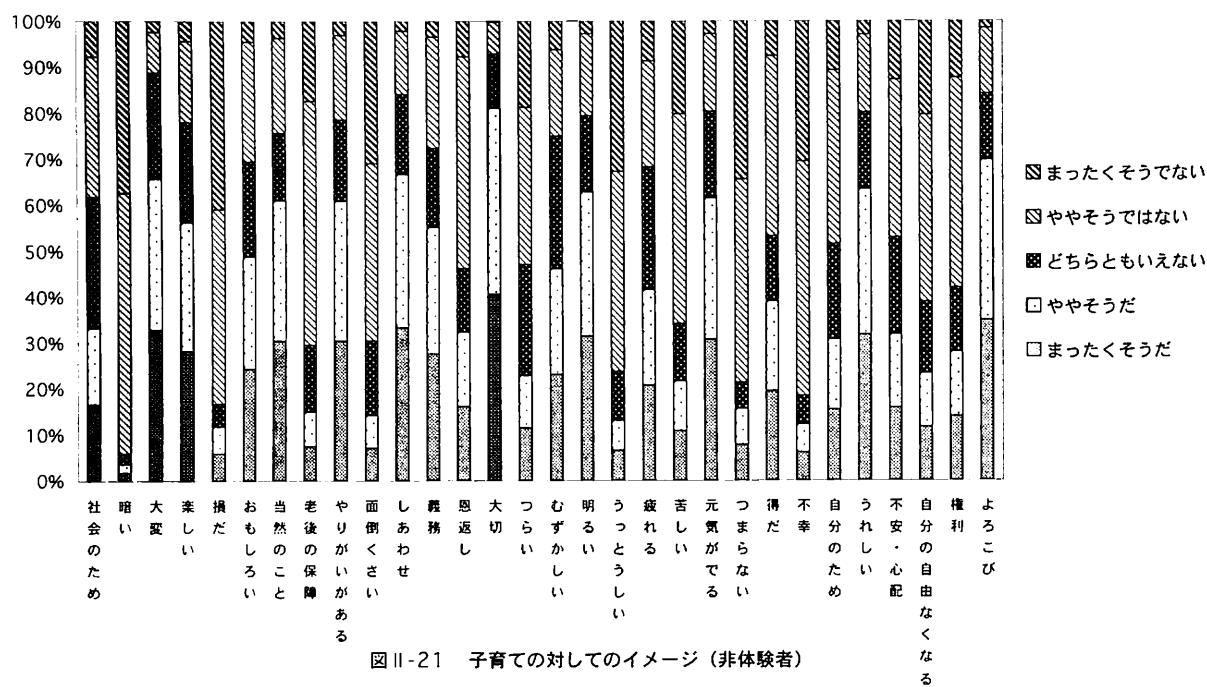
げる生徒が多く、実際に子どもと接した経験、街などで見かけた親子連れの姿からと答える対象者もいた。また、社会にとっての子どもの価値や「命」であることにふれた回答も複数みられた。



図II-19 小さな子どもに対するイメージ(非体験者)



図II-20 最も強い子どものイメージ(中学生非体験者)



子育てに対するイメージの結果を図Ⅱ-21、図Ⅱ-22に示す。図Ⅱ-21は項目ごとの対象者の回答の割合、図Ⅱ-22はそのうち最も強く感じるものとしてその項目をあげた人数である。

半数以上の生徒が肯定したのは、「大変」「楽しい」「おもしろい」「当然」「やりがいがある」「しあわせ」「義務」「大切」「明るい」「元氣ができる」「うれしい」「よろこび」の項目であり、半数以上の生徒が否定したのは、「暗い」「損だ」「老後の保障」「面倒くさい」「恩返し」「つらい」「うつとうしい」「苦しい」「つまらない」「不幸」「自分の自由がなくなる」「権利」であった。「社会のため」「むずかしい」「疲れる」「得だ」「自分のため」「不安・心配」は、肯定・否定ともにあり、中立の回答も多かった。また、最も強い子育ての印象は「大変」が最も多く17%、次いで「しあわせ」13%、「楽しい」9%と続く。そのような印象を持つ理由としては、親や身近な人たち、あるいは外でたまたま出会う人たちの姿を見たり話を聞いたりしたこと、テレビや本などからの情報、家族ができるということなどがあげられている。また、乳児の特性（泣く、成長する、病気をしやすい、世話が必要など）や親になるということそれ自体、さらには親としての責任・覚悟などについても述べられていた。また、現代の社会情勢、社会の存続や人間という種の存続についての記述も複数みられた。

④将来設計

自分の結婚については49%が考えたことがあり、そのうち結婚したい生徒が90%、結婚したくない生徒が10%だった。その理由を尋ねたところ、結婚に肯定的な理由としては「自分の家庭を持ちたい」93%「好きな人と暮らしたい」66%、「なんとなく」62%、「あこがれ」52%、「当然のこと」19%であった。結婚に否定的な理由としては、「仕事を続けたい」20%、「一人で自由に暮らしたい」27%、「面倒くさそう」17%、「必要を感じない」15%、「自分には結婚生活は向いていない」13%、「結婚に幻滅している」2%であった（複数回答。なお、結婚したいと答えた生徒が否定的な理由を選んでいる場合とその逆の場合もみられたため、ここでの割合は、結婚について考えたことのある生徒を基準とした）。

自分の子どもについては45%が考えたことがあり、そのうちほしい生徒が92%、ほしくない生徒が7%だった。自分が子どもを持つということについての肯定的な理由として、「子どもが好き」100%、「楽しそう」89%、「なんとなく」55%、「あこがれ」53%、「子どもを持って一人前」43%、「当然のこと」20%であった。否定的な理由としては、「自分には子どもは育てられない」17%、「面倒くさそう」16%、「一人で、あるいは配偶者と二人だけで暮らしたい」10%、「経済的負担が大きい」7%、「自分のやりたいことのじゃまになる」7%、「子どもが嫌い」4%、「自分の遺伝子を残したくない」3%、「今の社会に子どもを送り出したくない」3%であった（複数回答。なお、

子どもがほしいと答えた生徒が否定的な理由を選んでいる場合とその逆の場合もみられたため、ここでの割合は、子どもを持つことについて考えたことのある生徒を基準とした)。

就労について、将来働きたいと考えている生徒は92%、働きたくないと考えている生徒は4%であった、働きたいと考えている生徒に対して、いつまで働きたいかをたずねたところ、「年をとって働けなくなるまで」48%、「50歳くらいまで」22%「子どもができるまで」12%、「結婚するまで」9%であり、その他としては「結婚あるいは出産まで働き子どもが成長したらまた働く」「自分の気の済むまで」という回答や、特定の年齢をその理由（職業に起因する）とともにあげた生徒もいた。また、仕事と子育ての両立についてたずねたところ、37%は考えたことがあった。これらの生徒に対して、その考え方を問うと「両立させたい」55%、「両立させたいが難しそう」42%、「両立しない」1%であった。

子どもを育てるのは誰だと思うかという質問に対しては、75%が「子どもの両親」と答え、「子どもの父親」1%、「子どもの母親」11%、「子どもの祖父母」0.4%、「幼稚園や保育園の、学校の先生」0%、「地域の人たち」0.8%であった。また、「その他」6%では、上記の人たちを含めた「子どもに関わるすべての人」と答えたものがほとんどであった。

育児体験・保育体験についての興味をきいたところ、「おおいに興味がある」21%、「少し興味がある」24%、「その時にならないとわからない」23%、「あまり興味がない」15%、「まったく興味がない」14%であった。

考 察

調査の対象者数に大きな隔たりがあり、単純に比較することはできないが、育児体験学習プログラムに参加しなかった生徒の回答の傾向は、参加した生徒の事前調査の回答の傾向とほぼ同様であり、プログラム参加者が、同年代の他の者たちと比べて特に子どもや子育てについて肯定的な意見を持っているわけではないといえる。こうした生徒が育児体験学習プログラムに参加したことにより、子どもや子育てに対しての考え方を変化させたことは本節の（1）でみた通りだが、このような変化が、中学生一般に起こりうることが推測できる。

本調査の結果から、中学生の子ども観・子育て観について、メディアが大きな影響を与えていていることが示された。子どもや子育てに対して持つイメージの源泉についての回答で、「少子高齢社会の弊害」「人口が減少することの問題点」として日々報じられている内容が少なからずあげられた。こうしたことが、中学生に実感されているとは考えにくく（おとなも実感しているかどうかは疑問であるが）、テレビなどできいたことをその

まま自分の考えとして表明しているものと思われる。そこには、自分たちが将来子どもを産み育てることを期待されているという認識は乏しく、「当事者」意識に欠けている。子どもは「命だから大切」といった意見にも、同様のことがいえるだろう。しかしながら、このようなことは、対象者の年齢を考えれば当然のことかもしれない。自分たち自身が未だ「育てられている」立場であれば、子どもを産み育てる「当事者」として自身を考えることは難しいことだろう。

「育てられている」立場が色濃く影を落としていることは、「親」とは何かを記した意見にも見て取れる。特に子育てに対するイメージの源泉として、「親とは～する存在である」「親とは～であるべきだ」といった内容をあげた生徒が一定数いた。このような回答を寄せた生徒は、一般的な「親」イメージとともに、現実の自分自身の親、あるいは自分と親との関係について考え及んでいるのかもしれない。一般に、子どもを育てる立場になったとき、自分と親との関係を明確に意識することが必要だといわれるが、育児体験学習プログラムがそのきっかけを与えられるかもしれない。思春期の入口に立った生徒にとって、自身の親子関係についてさまざまな視点から考えていくための材料のいくつかを提供することも、育児体験学習プログラムの意義として考えられるべきであろう。

さて、今回の調査ではじめて男子生徒からの回答を得られた。男子と女子との回答傾向は、大筋では同じであるが、違いがみられる項目もあった。現在の小さな子どもと遊ぶ機会や、乳児の世話を経験の有無については、女子の方が比較的よく遊んでおり、世話をしたことがある生徒も多かった。また、将来の自分の結婚や子どものことについても、女子の方が考えたことのある生徒が多かった。小さな子どもに対するイメージや子育てに対するイメージでも、男子の方がどちらかといえば否定的なイメージや中立のイメージを持っている項目があった。このような結果には、接する機会が少ないと自体の影響に加え、ジェンダーの影響も見て取ることができよう。なお、「子どもを育てるのは誰か」という間にたいしては、男女ともに「子どもの両親」との回答が最も多く、率は少ないものの、男子では「父親」と答える生徒が「母親」と答える生徒よりも多く、女子の場合はこの逆である。当事者としての意識ではないかもしれないが、この辺りは、時代の流れを感じさせるものではある。

これまでの育児体験学習プログラムには、男子の参加がなかった。しかしながら、女子と比べて小さい子どもと接する機会の少ない、子どもや子育てに対して肯定的にとらえる程度の低い、さらにはそうしたことを「男らしくない」と思われている男子こそ、現実の子どもと接する機会を持つ必要性があるのではないだろうか。

4. プログラム試行後の聞き取り調査

育児体験学習プログラムを平成16年度は高校生の育児体験学習で平成17年度は高校生と中学生の育児体験学習で試行したが、さらに育児体験学習プログラムを充実していくために、受け入れ側の保育所（園）と参加した中学校側の考え方や感想等の聞き取り調査を行った。

○調査日 2006年1月12日(木)

○調査対象 野菊野保育園（副園長・主任保育士）

松戸市立八柱保育所（所長）

松戸市立第一中学校（家庭科教諭）

○調査方法 質問項目に添ってのインタビュー

以下は調査結果の一部である。

(1) 保育所（園）（野菊野保育園・松戸市立八柱保育所）

Q：体験学習の受け入れにあたって、どのような準備をされましたか？

A：〈日程・受け入れ人数・体験内容に関して〉

- ・保育園児の生活の流れや行事を考慮して日程を調整。
- ・受け入れの人数の検討（1クラスに2名程度が望ましい）

〈職員に対して〉

- ・体験の目的・スケジュールの周知をはかる。
 - ・職員全員が生徒一人一人に1回は声をかけるように心がける。
- 〈中学生・高校生に対して〉
- ・衛生面・安全面に特に留意する。
 - ・できるだけ無理なく体験できるようにする。

Q：実施にあたって特に配慮されたことは何ですか？

A：・やはり第1に衛生面。

- ・デイリープログラムに添いながら、年齢による発達の差を理解したり、十分な体験が得られるようなスケジュール。
- ・感動を伴う体験につながる活動場面の設定。
- ・総合的な学習の時間における「職場体験」では幼児クラスにしか受け入れていないが、今回はふれあい体験を重視して乳児クラスで体験できるようにした。

Q：育児体験学習のためにどのような事前学習が必要ですか？

A：・「手洗い」がなぜ大事か？「うがい」はどのような意味があるのか等を知り、いかに園が園児の衛生面・安全面に配慮しているかを伝える。

- ・保育園がどのような所であるかの予備知識をもって臨めるように。
- ・事前指導がないと、園児とのかかわりに時間を要し、きっかけがつかめずにど

のように関わってよいか戸惑うことが多い。

Q：乳幼児とのふれあい体験を通して中学生・高校生に感じてほしいと思うことは何ですか？

A：・湧き出る生命力や（子どもが言葉でなく身体で表現している）生きようとする意欲など生きている子どものすごさのようなを感じて欲しい。
・肌で感じるぬくもりを味わってもらいたい。
・子どもの小さな「命」は大人が守るべきものであること。
・現在の自分も小さな「命」を皆に守られ、大事にされて今に至っているということ。

Q：保育現場として「中学生・高校生の育児体験学習」について感じること、期待すること、要望について

A：・乳幼児にとっても年齢差のある中学生・高校生とのかかわりは楽しみにしており、意味も大きい。
・体験の感動が将来の職業選択や、子育てにどこかで役立つことを期待したい。

- ・保育所（園）が子育て支援の役割を担っているという認識をもち、積極的に地域の小学生・中学生・高校生の体験学習を受け入れ、連携にも協力的である。
- ・体験学習を受け入れる際、園児の生活の流れを第1に考えて日程や受け入れ人数を決め、特に衛生面・安全部面に留意していることがわかった。
- ・そのために、事前指導においても、保育所で衛生面・安全部面にいかに配慮しているかを知ってほしいと述べている。
- ・また、事前指導の効果は園児とのかかわりにおいて顕著に表れるため、体験学習の成果をあげるには、事前指導の内容として「保育所がどのような所であるか」を知っておく必要があることがわかった。

（2）中学校（松戸市立第一中学校）

Q：「育児体験学習」の参加希望者はどのように募集しましたか？

A：1・2年生の家庭科の授業や各担任から全体に呼びかけ、個々にも声をかけて募集した。

Q：「育児体験学習」に参加した生徒の反応・感想はいかがでしたか？

A：内容も、おもちゃ作りなどの準備をして参加できたこともよかったです。

Q：中学生にとって「育児体験学習」は必要だと思いますか？

その理由もお聞かせください。（以下□で囲んだ部分が回答）

A：ア 是非必要だと思う。

イ できればあった方がよい。

ウ あった方がよいが、時間的に無理がある。

エ 「職業体験」の1つとしてあればよい。

オ 必要性を感じない。

理由……保育園で実体験することで自分を振り返ったり、自分達より幼い乳幼児に接することで発見などがある。

Q：今後「育児体験学習」を継続していきたいと思いますか？

A：ア 継続したい。

イ 継続する必要はない。

ウ どちらとも言えない。

理由……継続したいが、校長や担当教師の異動もあるため。

Q：「育児体験学習」はどのような形で継続していきたいと思いますか？

A：ア 今後も全面的に大学に任せたい。

イ 今後は部分的に大学の協力を得ながら、学校として行いたい。

ウ 学校として全て独自に行っていきたい。

理由……やりたいが、現実には難しい。

Q：中学校の授業カリキュラムに位置づけることは、可能でしょうか？

A：可能であると思うが、授業数の関係で、内容を精選する必要がある。

Q：今回の「育児体験学習」実施への問題点・課題・要望をお聞かせください。

A：・参加した生徒は、やり遂げた喜び、自信となった。

・継続できれば、人数は増えると思うが、希望者を集めることが難しかった。

- ・今回の育児体験学習が、隣接する中学校と大学との連携の第一歩となったことは互いに大きな成果であった。
- ・授業数の関係で、夏季休業中の「ボランティア体験」として中学校で募集していくだけいたが、参加者を募るのが大変であった。継続していくためには、早めにポスターを掲示するなど事前のPRが必要である。
- ・実施時期もクラブ活動の活発でない春休みを利用したり、時期を分けて実施するなど、今後の検討課題である。
- ・学校現場として、「育児体験学習」を継続したいという考えは明確であるが、積極的に進めるには、時間的な制約や人事異動の心配などで思うようにいかないというのが現状のようである。

(3) 考察

研究員も中学生・高校生と共に育児体験学習に参加し、中学生・高校生の体感していることを感じることはできたが、それだけではなく、聞き取り調査を行ったことで、受け入れ側の保育所（園）の考え、思い、配慮等や、学校側の考え方や課題等を知ることができた。

育児体験、保育体験、職業体験、ふれあい体験、ボランティア体験などが盛んに行われているが、アンケートでも事前の話し合いはあっても、時間がとれないため、事後の話し合いや反省会がもてないという回答が多かった。事前にお願いする側の目的・趣旨と受け入れ側の現状や考えを十分に出し合いながら実施内容を考えることが大切であり、加えて実際にどうであったのかを出し合い、どうすればよいかを次回に生かしていく工夫をしなければ、成果は期待できない。

まとめと今後の課題

少子化・核家族化や地域での人間関係の希薄化などの進行により、子育ての中の家庭の孤立化とともに、乳幼児とふれあう経験のないまま親となり、親として子どもにどのように接したらよいかなど、基本的な育児に不安をもつ親が増えている。

そこで、次代の親となる中学生・高校生が乳幼児と出会い、ふれあい、交流することで、乳幼児に対する親愛の感情を醸成し、将来子育てに関わるときの貴重な予備体験となるような機会を提供できるよう、第1部門第1グループ（次世代育成）では、育児体験学習プログラムの開発に取り組んだ。

作成した育児体験学習プログラムを平成16年度には高校生を対象に試行し、平成17年度には修正を加えた育児体験学習プログラムを高校生と中学生を対象に試行した。

その結果、乳幼児とふれあう機会の殆ど無い現代の中学生・高校生が乳幼児とふれあうこと、生命の大切さや乳幼児そのものを五感を通して知ることができ、意義があったと考える。育児体験学習プログラムの意識調査の結果からも、事前調査で、「子どものイメージ」として最も強かった『かわいい』や、「子育てのイメージ」として最も強かった『大変は』、実際に乳幼児に接して、実感として感じたことではなく、自分の周りの人やメディアからの情報から影響されてできたイメージではないかと考えられた。しかし、事後調査ではただ『大変』だけではなく、『やりがいがある』『楽しい』も出てくるなど、「子ども観」のみならず「子育て観」にも変容が見られ、実際に触れて体感することの意義が大きいことが実証された。

また、体験学習が即、結婚や就労につながる訳ではないが、「仕事と子育て」を『両立させたいが難しそう』から『両立させたい』に変わった生徒がいるなど、育児体験学習プログラムは参加者の「子ども・子育てに対するイメージ」にプラスの影響を与えると言える。たとえマイナスになることがあったとしても、実際に自身で体験した結果であるという意義は大きい。

今回の意識調査では体験者と非体験者に大きな差異は見られなかったが、中学生・高校生が子どもを知り、子どもを育てるこの意義を理解し、子どもや家庭の大切さを理解できるよう、「子育て地域支援システム」づくりを目指し、保育所、幼稚園、乳児検診の場などを活用し、乳幼児とふれあう機会の提供を推進していきたい。

多様なライフスタイルを選択できる現代において、これから子どもを産み育てる若い世代に対し、子育ての喜びを認識できるよう啓発活動を展開したり、育児体験学習プログラムを検証し、広く活用できるようにしていくことが今後の課題と考える。

◇参考文献

- 1) 聖徳大学生涯学習研究所 (2004) 「学術フロンティア推進事業平成15年度研究成果報告書 第1部門 少子化に関する地域システムの研究」 pp.31~34
- 2) 原田正文 (2005) 「子育て現場の実態に即した次世代育成支援策を! 『大阪レポート』から23年後の子育て実態調査『兵庫レポート』が示すもの」、『発達』第26巻101号、ミネルヴァ書房、pp.24~27
- 3) 原田正文 (2004) 「変わる親子、変わる子育て—『大阪レポート』から23年後の子育て実態調査より—」『臨床心理学』第4巻第5号、金剛出版、pp.586~590
- 4) 服部祥子／原田正文 (1993) 「乳幼児の心身発達と環境 大阪レポートと精神医学的視点」名古屋大学出版会
- 5) 原田正文 (1993) 「育児不安を超えて 思春期に花ひらく子育て」朱鷺書房
- 6) 伊藤葉子 (2004) 「中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習の教育的効果の検討」乳幼児教育学研究13、乳幼児教育学会、pp.1~12
- 7) 金田利子編著 (2003) 「育てられている時代に育てることを学ぶ」新読書社
- 8) 武藤安子 (2005) 「『子ども役割』と『大人役割』の間—保育体験学習—」『幼児の教育』、フレーベル館、pp.4~7
- 9) 岡野雅子 (2002) 「中学生・高校生の保育体験学習に関する一考察—幼稚園・保育所側から見た課題」日本家庭科教育学会第45回大会研究発表要旨集、p.43
- 10) 砂上史子ほか (2004) 「高校家庭科における保育体験学習者の意識変容（第1報）」日本家庭科教育学会誌、第46巻第4号、pp.351~361
- 11) 砂上史子ほか (2005) 「高校家庭科における保育体験学習者の意識変容（第2報）」日本家庭科教育学会誌、第48巻第1号、pp.10~21

資料 1

幼稚園における子育て支援事業の実態調査 および中学校・高等学校で行われている育児体験の実態調査

(1) 幼稚園の育児支援の実態と課題

育児支援の実態について東京、埼玉、千葉の公立および私立幼稚園44園にアンケート調査を依頼し34園回収した。
アンケート調査の結果および考察は下記の通りである。

①「子育て支援事業」について

ア 「子育て相談」

- | | |
|----------------|-------|
| ・子育て相談を行っている | 96.9% |
| 行っていない | 3.1% |
| ・相談の方法………面 談 | 56.4% |
| 電話 | 25.5% |
| 連絡ノート | 14.5% |
| ・相談の対象………在 園 児 | 50.8% |
| 未収園児 | 31.7% |
| 卒 園 児 | 12.7% |

ほとんどの園が子育て支援事業の一端として「子育て相談」を行っている。
対象者も在園児が中心で内容も面談が多いことから特別に支援事業を設けるということではなく、子育てに対する保護者との連携を意識的に行っていると言えるのではないか。

その他（他園児、学区内の方）

- | | |
|--------------------|-------|
| ・相談の利用者………不特定の人が活用 | 53.1% |
| 特定の人が活用 | 25% |
| あまり活用されない | 12.5% |

イ 「施設開放」

- | | | |
|---------------|--|-------|
| ・施設開放を行っている | 100% | |
| a 《在園児への施設開放》 | 開放している | 97.1% |
| | 開放していない | 2.9% |
| 〈開放している施設〉 | 園 庭 | 64.7% |
| | その他（保育室・保護者用の部屋・ホール・絵本の部 屋・多目的室・会議室・プール） | |
| 〈開放している頻度〉 | 毎 日 | 81.8% |
| | その他（週に3回程度・不定期） | |
| 〈費 用〉 | 無 料 | 100% |

在園児に対しては園庭を毎日開放している園が殆どであり、「地域に開かれた幼稚園づくり」が定着しているといえる。

b 〈未就園児への施設開放〉	開放している	97.1%
	開放していない	2.9%
〈開放している施設〉	園 庭4	5.1%
	ホール	26.8%
	保育室	15.5%
	その他（未就園児の部屋・子育て支援室・プール・絵本の部屋・多目的室）	
〈開放している頻度〉	毎 日	24.2%
	月 1 回	24.2%
	月 2 回	18.2%
	週 3 回	12.1%
	週 1 回	9.1%
〈費 用〉	無 料	90.9%
	有 料	9.1%

未就園児に対しての施設開放は園庭やホールの限られた施設の開放であるが、殆どの園で取り組んでいる。さらに少数であるが未就園児の部屋や子育て支援室を開放している園もあり、子育て支援に意識的にとりくんでいることが窺える。

c 〈小学生への施設開放〉	開放している	44.1%
	開放していない	55.9%
〈開放している施設〉	園 庭	83.3%
	ホール	11.1%
	保育室	5.6%
〈開放している頻度〉	毎 日	47.1%
	その他（長期休業中・遊びに来た時）	
〈費 用〉	無 料	100%

開放していない園の方が若干多いが、小学校でも校庭開放を行っている状況もあり、積極的には行っていないと考えられる。

d 《その他の人への施設開放》	開放していない	71.9%
	開放している	28.1%
	(地域の人・子育てサークル・サッカークラブ)	
〈開放している施設〉	園 庭	46.7%
	ホール	26.7%
	保育室	20%
〈開放している頻度〉	週 1 回	30%
	不定期	30%
	毎 日	20%
	月 2 回	10%
	月 1 回	10%

開放していない園が多数であるが、開放している園の対象者に着目すると、地域に開放しており、在園児や未就園児への開放から広がりを見せていると言える。

ウ 「子育てについての学習会等」に関して

・「学習会等」を	開催している	57.6%
	開催していない	42.4%

a 「講演会」について

学習会をおこなっていると回答した園で講演会を開催しているのは 100%

・講演会の講師は医師・歯科医師・看護士・保健士など医療・保健関係者が	30.3%	
	大学の教員	21.2%
	園の教諭	15.2%
	教育委員会・福祉課など行政関係者	9.1%

子育て経験者	3.0%	
・「講演会のテーマ」	32.6%	
	子どもの心理	32.6%
	子どもの健康	32.6%
	家庭生活	16.3%
	大人の人間関係	7%

b 「学習会」について

開催している	57.9%
開催していない	42.1%

・学習会の講師は医師・歯科医師・看護士・保健士など医療・保健関係者が	36.8%
------------------------------------	-------

	園の教諭	10.5%
	教育委員会・福祉課など行政関係者	10.5%
	子育て経験者	10.5%
	大学の教員	5.3%
・ 「学習会のテーマ」	子どもの健康に関するもの	30.4%
	子どもの遊び	26.1%
	手 芸	13%
	料 理	13%
	その他（体操・ダンス）	
c 「学習会等」の対象	在園児の保護者	58.3%
	未就園児の保護者	29.2%
	他園の保護者	8.3%
	卒園児の保護者	4.2%
d 「学習会等」の開催の頻度	1年に2回程度	35.7%
	1月に1回程度	14.3%
	3ヶ月に1回程度	14.3%
	不定期	14.3%
	1年に1回程度	7.1%
	その他	
e 「学習会等」の費用	無料	100%
f 「学習会等」の参加状況	不特定の人が参加	40%
	特定の人が参加	30%
	テーマによって	25%

子育てについての学習会等を開催している園は半数を少し上回った程度で、開催していない園と二分している。内容については、「講演会」では子どもの心理や健康について、「学習会」では、子どもの健康に関するものと、子どもの遊びに関するものが多くあげられ、子どもの健康に関するテーマが、両者に共通して多く、園としても保護者としても重視していると言える。また、学習会の対象は、在園児や未就園児の保護者がほとんどであるが、他園や卒園児の保護者にも参加の枠を広げている園もある。

②「中学生・高校生を対象にする子育て体験事業」について

ア 「子育て体験事業」を	行っている	84.8%
	行っていない	15.2%

イ「体験事業の対象」	中学生 26園	高校生 4園
	3年生のみ 36%	1年生 50%
	2年生のみ 24%	2年生 50%
	1年生のみ 12%	
	1・2年生 12%	
	1・3年生 8%	
	2・3年生 4%	
	1・2・3年生 4%	
ウ「体験事業を引き受けている学校の数」		
	中学校	高校生
	1校 60%	1校 100%
	2校 32%	
	3校 8%	
エ「行っている頻度」	中学校	高校生
	1年に1回 32%	1年に3回 50%
	1年に2回 28%	1年に1回 50%
	1年に3回 20%	
	1月に1回 8%	
	2ヶ月に1回 4%	
オ「実施時期」	中学校	高校生
	1月から2月 31%	3月から4月 25%
	11月から12月 28.6%	7月から8月 25%
	9月から10月 23.8%	9月から10月 25%
	5月から6月 9.5%	11月から12月 25%
	3月から4月 4.8%	
カ「1回に来園する人数」		
	10名以内 30.8%	
	20名以内 23.1%	
	40名以内 15.4%	
	30名以内 7.7%	
	60名以内 7.7%	
	90名以内 7.7%	
	50名以内 3.8%	
	70名以内 3.8%	

キ 「園児の年齢」	6歳	82.1%
	3歳	10.7%
	2歳	3.6%
	7歳	3.6%
ク 「体験事業の内容」	一緒に遊ぶ	46.7%
	園が用意した特定の活動☆	26.7%
	中高生が準備した特定の活動☆	25%
	その他（中学生のみで環境整備）	
ケ 「特定の活動☆の内容」	ゲーム類	19.5%
	運動遊び	16.9%
	絵本	13%
	歌を歌う	11.7%
	紙芝居	10.4%
	ダンスをする	10.4%
	プレゼントを用意する	6.5%
	製作	5.2%
	人形劇	1.3%
コ 「配慮していること」	安全面	11件
	事前の連絡を十分に	10件
	楽しく、来てよかったですと思えるように	4件
サ 「体験事業の成果」		
a 園にとっての成果		
・年齢差の大きいお兄さん・お姉さんと関わりがもてる	27.7%	
・お兄さん・お姉さんにあこがれの気持ちをもったようである	22.8%	
・親切にしてもらって嬉しそうである	19.8%	
・自分たちのできることを見てもらう嬉しさを味わっているよう	15.8%	
・地域との関わりがもてる	10.9%	
・その他（平素より力いっぱいあそんでいる）		
b 中学生・高校生にとっての成果		
・子どもが可愛いと実感できる	15%	
・優しい気持ちがもてる	13.8%	
・子どもの頃を思い出し、自分の成長を振り返り、確認する	12.6%	
・心が和む・楽しい・嬉しい	12%	
・子ども達がいろんな感じ方や考え方を持っていることに気づく	10.8%	

- ・保育という仕事の一端を理解する 10.8%
- ・子どもの小ささを実感できる 7.8%
- ・関わることで、自分が年長者であることを自覚する 6.6%
- ・将来、保育者になりたいと思う 5.4%
- ・親への理解・感謝の気持ちがもてる 3%
- ・その他（子どものエネルギーを感じる・表情が豊かになる）

シ「体験事業をおこなっての問題点」

- ・中学校・高校の授業等の都合で日程が組まれる 24.1%
- ・次の実施に向けた反省会をもつことが難しい 20.7%
- ・行事が増えるため単発の経験で終わってしまう 19%
- ・中学校・高校の先生の意識に差がある 10.3%
- ・事前指導が十分でないと子どもが危ない 6.9%
- ・園の生活が途切れる 3.4%
- ・学校と連絡がとりにくい 3.4%
- ・学校と目的・意向などが異なる 1.7%
- ・その他

（楽しくなったところで、終わってしまい残念・個別評価標は園側の負担）

ほとんどの幼稚園が「中学生・高校生を対象に子育て体験事業」に取り組んでいる。体験事業の対象学校数は、1、2校で、1年に1～3回程度、1回に10名～20名の生徒が来園すると回答している園が多く、園の広さ、園児数などの規模や幼稚園教育の計画に組み入れることが可能な範囲で行っていると言えるのではないか。

また、対象は中学生が殆どであるが、学年は各学年にはらつきが見られ、家庭科・総合学習・職業体験など中学校側の目的によるようである。

体験事業を行うにあたっての配慮事項として安全面が多くあげられていたが、体の大きさや体力の異なる中学生・高校生と一緒に遊ぶということでは、安全面での十分な配慮が必要と言えよう。両者に意義ある内容にするためにも、事前の打ち合わせや連携をとることが大切な配慮点と言えよう。

体験事業を行って園児がお兄さん・お姉さんと触れ合い、憧れや親切にしてもらえた嬉しさなどさまざまな体験ができたことが成果と言える。さらに当事者同士だけではなく、教師や保護者にも中学生や高校生の姿を知ることができ、園にとっての成果と捉えている。中学生・高校生にとっての成果は、どの項目も平均している。このことは、幼児に対して可愛いと思ったり、優しい気持ちになったり、さまざまな感情体験をしているということであろう。

しかし、さまざまな成果がある一方で日程の組み方、実施後の反省会がもてない、単発の経験になってしまい、園の生活が途切れるなどの問題もある。

③アンケートの調査結果とまとめ

- ・ほとんどの園が子育て支援事業を行っており、育児支援の意義を踏まえてとりくんでいる。内容も在園児を中心とした取り組みから広がりが見られる。
- ・中学生・高校生を対象とした子育て体験事業については、ほとんどの園で行われており、幼児と中学生・高校生の両者の成長にとって意義ある事業として取り組まれているが、相互の連携が十分にとれないことや、継続的に充実した内容にしていくにはまだ問題がある。

(2) 中学生の育児体験の実態と課題

中学生の育児体験の実態を把握するための予備的なアンケート調査を行った。その結果および考察は下記の通りである。

埼玉県加須市・狭山市、東京都世田谷区の公立中学校合計14校の校長宛に郵送で調査を依頼した。

対象となった学校の規模は全クラス数	1 1～2 1	8 校
	2 1～3 0	5 校
	3 1～4 0	1 校

回答は選択式で複数回答可

[実施の傾向]

生徒を対象に子育て体験事業を行っている	1 1 校	
〈対象〉	3 年生	43%
	2 年生	29%
	1 年生	21%
〈頻度〉	1 年に 1 回程度	64%
〈時間〉	1 ～ 2 時間	67%
〈時期〉	11 月～12 月	33%
〈参加人数〉	40～50 人	40%
	一回につき 10～20 人	20%
	30～40 人	20%
	20～30 人	10%
〈実施場所〉	幼稚園	50%
	保育所	50%
〈カリキュラムの中での位置づけ〉	家庭科	69%
	総合学習	23%

その他（職業体験）

*担当者は各教科担当教諭が91%

[ねらいと内容]

〈子育て体験事業のねらい〉	子どもとのふれあい体験	42%
	保育体験	26%
	職業体験	16%
	育児体験	11%
〈子育て体験事業の内容〉	子どもたちと自由に遊ぶ	32%
	園側が準備した活動	32%
	中学校側が準備した活動	26%
(子ども達と一緒に使う場合と生徒達が 使う場合をあわせて)		

*園・中学校が準備した活動の具体的な内容は多岐にわたっているが、運動遊び、ゲーム類、製作遊び、絵本や紙芝居を行う場合が多くあった。プレゼントをあげるということも多く行われているようである。

[事前指導・事後指導]

〈事前指導〉	している	91%
	・園で行う活動の準備	51%
	・その他（ビデオや講義による学習・個人研究・ グループ研究）	

*事前指導を行っていない学校は、生徒自身が直接園と連絡を取り、時期や内容を決めるため、学校側は特に指導していないという回答であった。

〈事後指導〉	している	100%
	・感想文を書く	47%
	・その他（ビデオや講義による学習・個人研究・ グループ研究・保育記録さくせい・作品づくり）	

*生徒たちは、事前指導、事後指導とも熱心に取り組んだようである。

[成果]

すべての学校が、子育て体験事業を実施して、生徒、教師とともに成果があったと回答している。

〈生徒の成果〉	・こどもを可愛く思う
	・心が和み、楽しい
	・優しい気持ち
	・保育の仕事の一端の理解

- ・自分の成長の確認
 - ・保育者になりたい *心情的な成果が大きかったようである
- 〈教師の成果〉 生徒の育児・こどもに対する知識や関心の高まり
学校では見られない生徒の姿の発見

[問題点]

ほとんどの学校が何らかの問題を感じているようである。

- ・単発の経験になる
 - ・事前・事後に園と連絡をとりにくい
 - ・園側の都合が優先される
 - ・学校生活に組み込むのが難しい
 - ・こどもへの接し方
 - ・園までの移動と安全確保
- *園側が感じているものと対応しているようである。

[配慮点] 自由記述

- ・事前に園側と細かく打ち合わせを行い、実施計画については前年度の反省、園側の意見などをとり入れている。また、同じ学校で生徒に幼児の特性を話し、具体的な接し方まで指導している。
- ・園側への感謝の心を忘れないようにしている。

[意見] 自由記述

- ・大変貴重な取り組みであり、今後も積極的に行いたいし、回数も増やしたい。

実施していない学校

- ・授業時数の関係、園が遠い・受け入れがない、総合学習のテーマが異なる、教科担当の教諭が変わり指導計画からはずれしたことなどがあげられた。
- *実施していない学校でも体制が整えば実施したいと考えている。また生徒会活動や生徒個人のボランティアとして、あるいは生徒個人の興味・関心からの保育体験は行われているようである。

(3) 高校生の育児体験の実態と課題

高等学校における育児体験の実態を把握するための予備的な調査を行った。その結果及び考察は下記の通りである。

千葉、東京都の高等学校7校についての調査である。回答は選択式で、複数回答を可とした。

[実施状況]

生徒を対象に子育て体験事業を行っているのは7校中3校である。

調査対象数が少ないので、多いかどうかを論ずることはできないが、中学校の14校中11校実施に比べると、高等学校の実施はやや少ないとみることができる。

〈対象学年〉	2年生	1校
	3年生	2校

〈頻度〉	1年に	1回
------	-----	----

*生徒は2、3回を希望しているが、事前、事後指導も入れるとかなりの授業回数が必要で、実施回数が制約される。

〈時期〉	9月以降
------	------

〈カリキュラムの中での位置づけ〉	家庭科の授業
------------------	--------

〈実施場所〉	保育所	2校
	幼稚園	1校

〈行っていない理由〉

- ・時間的な余裕がない
- ・高等学校で子育て体験事業までやる必要があるか疑問である。
- ・学校でやることが増え、学力低下の一因にもなりうる。

*子育て体験が高等学校の学習内容として位地づけられていない場合には実施が難しい状況が読み取れる。

*平成15年度からは家庭科の単位が4単位から2単位に半減したため実施が難しくなるという回答もあった。

[ねらいと内容]

〈子育て体験のねらい〉	子どもとのふれ合い	3校
	保育体験	1校
	(高等学校が用意した特定の活動を生徒達がする)	
〈学校が用意した特別の活動〉	運動遊び	2校
	製作に関する遊び	2校
	プレゼントをあげる	2校
	絵本	1校
	歌を歌う	1校

[事前指導]	行っている	3校
--------	-------	----

- ・ビデオによる学習や講義を聞く
- ・幼稚園や保育所で行う活動の準備やプレゼントづくり
- ・妊婦体験（保育体験をあげた1校）

	・人形での育児模擬体験（保育体験をあげた1校）	
[事後指導]	行っている 3校	
	・感想文を書く	
	・体験活動の写真を貼る	1校
[成 果]	生徒の取り組み大変熱心	3校
〈生徒の成果〉		
	・こどもが可愛いと実感できた	3校
	・心が和んだ、楽しかった、嬉しかった	3校
	・優しい気持ちがもてた	3校
	・子どもの頃を思い出し、自分の成長を振り返り、確認できた 3校	
	・子どもの小ささを実感できた	2校
	・子ども達がいろいろな感じ方や考え方をもっていることに気づいた	2校
	・子ども達とかかわる中で、自分が年長者であることを自覚した	2校
	* 質問の仕方が課題である。また、成果を教師がどのように把握したかについては不明であり、聞き取りなどによる調査が必要である。	
〈教師の成果〉		
	・日常の学校生活ではみられない生徒の姿を見ることができた	3校
	・生徒が子育ての意義や家庭をもつことの重要性を学ぶ機会になると認識した	3校
	* 子育て体験が生徒にとっても、教師にとっても大変すばらしい体験になったと実施の成果が実感されている。	
[配慮点]	自由記述 1校	
	・事前指導を十分にする	
	・手みやげを生徒の手作りのものとし、製作している時間にも幼児へのイメージをふくらませ、心の準備をさせる	
	* 本調査で、さまざまな配慮事項が把握できることが、プログラムの実施上重要である。	
[問題点]	学校の生活に組み込むのが難しく、単発の経験になることを指摘している。	

資料2

浜松市立可美中学校聞き取り調査のまとめ

1. 目的

子育て支援学習プログラム研究のため、保育所や幼稚園での職業体験学習を実践している中学校を訪問し、当事者からの聞き取りにより体験学習の過程および実際を知り、次世代育成支援の育児体験学習プログラム作成の参考にする。

2. 訪問調査日時

平成16年6月11日（金）14時～17時

3. 訪問先

静岡県浜松市立可美中学校

4. 調査方法

3年生学年主任教諭1名、3年生で幼児教育機関へ体験訪問した生徒2名を対象に、聞き取り調査を行った

5. 内容

1) 体験学習の位置づけ

可美中学校では、総合的な学習の時間を利用し、自分の未来を見つめると同時に、社会・人との関わり方を学ぶことを目的に、進路指導の一環として職場体験学習をプログラム化している。

2) 実施過程

①身近な人の職業調べ・職場訪問：2年生1学期に自分の身近な人の職業（浜松市内）を調査し、その職場を訪問する。

②体験発表：2年生8月の野外学習（宿泊研修）において①の結果を発表する。

③職場訪問・体験。：2年生11月、自分が将来目指したい職業を念頭に置き、それぞれの職場（静岡県西部地域）へ訪問・職業体験を依頼し、実践する。

④職場体験発表会：2年生2月、③の職業体験の結果や今後の方向性についてまとめたものを、保護者や外部者を招き、14のブースに分かれ発表する。職業分類と人数の内訳は、以下のとおりである。

「飲食関係」：5名、「ファッショング関係」：11名、「理・美容関係」：5名、「動物関係」：7名、「スポーツ関係」：13名、「保育・幼児教育関係」：10名、「教育関係」：4名、「医療・福祉関係」：5名、「警察関係」：3名、「弁護士関係」：3名、「情報関係」：9名、「製造関係」：6名、「芸術関係」：9名、「その他」：11名

この発表会により、さらに職業や人との関係についての気づきを深めることができ

ている。その際、以下の内容を模造紙にまとめ、参加者の前でプレゼンテーションを行っている。

事例1. A・Kさん

《将来目指している職業》

保育士

《訪問先》

浜松市内の保育所

《訪問前のその職業についての考え方》

子どものことや世話をすることが好きな人に向いている職業だと思っていた。4～5歳くらいの子どもを預かっているのだと思っていた。

《訪問してみての感想》

やっぱり大変な仕事。小さい子どもが何を話しているのかわからないのでとても疲れた。でも、可愛くて、楽しかった。

《これから自分の方向性・やるべきこと・やらなければならないこと》

他人の子どもの面倒を見るためには、まず自分がしっかりとし、他人のことも雑になってしまふから、「責任」をしっかりと持てるようにしたい。

《学んだこと・わかったこと》

- ・必要な資格：国家資格の保育士
- ・保育士の仕事とは：子どもの世話。子どもたちが楽しく過ごせるようにすること（歌や遊び、体操など）。食事や排泄の指導。母親たちへの教育指導。怪我や病気をさせずに元気に保護者に戻すこと。
- ・子どもとの接し方：子どもの目の高さで接する。気持ちを考える。子どもの気持ちを理解する。子どもと信頼関係を作る。
- ・嬉しいこと：子どもの成長が見られたとき。
- ・大切なこと：笑顔。怒らずに言うことを聞かせること。
- ・保育士に向いている人：子どもが好き。親と関わることも好き。穏やか。カッとしている。人との関わりの上手な人。働いている母親の手伝いをしたい人。

⑤修学旅行での職場訪問・体験Ⅱ：3年生4月の関西方面への修学旅行で、地元では体験できない68コースの職場訪問を実施する。事前の依頼交渉は教師の助けを得るものができるだけ生徒が交渉することを前提としている。さらに、訪問先への移動手段・方法などは生徒の判断に委ねられている。

⑥関西職場訪問発表会：3年生6月・7月に実施。事前に訪問した結果を各自がまとめて発表する。

全員が自分が目指した職業に関連する職場を訪問した結果について、④を事前の学習と位置づけ、「学んだこと・わかったこと」、「課題となったこと」、「身につけたこと」「準備と事前研修」についてまとめている。それを踏まえ、以下の項目について整理している。

事例2．H・Mさん

《将来目指している職業》

幼稚園教諭

《訪問先》

O教育大学附属幼稚園

《事前学習：関西職場訪問のための準備・事前研修》

- ・幼児たちが帰った後でも先生方は次の日の準備などを沢山していた。
- ・目上の人との接し方や敬語の使い方などを改めて学んだ。
- ・インタビューでどの先生もピアノは弾けたほうがいいとおっしゃっていたので、ピアノを多少弹けるようにしたい。
- ・O教育大学には、沢山の学科があり、幼稚園教諭になるための勉強はもちろん、他の職業に就くため勉強もどのような事をしているかをしっかり見てきたい。
- ・O教育大学附属幼稚園では、前に訪問した地元の幼稚園との違いや共通点をしっかり学んできたい。

《当日：訪問先で学んだこと・わかったこと・課題となったこと、感想等》

- ・大学は勉強をするだけの場所だと思っていたが、大学にも部活のようなものがあると初めて知った。また、付属図書館や付属幼稚園、付属小学校などの施設もあり、教師を目指すのにとても整った環境であると思った。教室も私たちが使っている教室の倍以上の大きさのものもあり、さまざまな広さの教室で学生さんたちが同じ夢を持つて頑張っていた。
- ・付属幼稚園では、子どもたちが帰宅した後の訪問であったため、直接子どもたちと接することはできなかったが、園長や先生方の話を聞いて、苦労することが沢山あっても、「幼稚園教諭になりたい!」と思う気持ちが大切なんだと思った。歴史や伝統のある幼稚園は私の想像とは逆で、「遊びながら学ぶ」ということを大事にし、子どもたちが毎日通っていることがわかった。

《関西職場訪問で身に付けたこと・力》

社会のマナー

《これから自分の方向性（今後の課題）・やるべきこと・やった方がいいこと》

勉強

《振り返りの記述(進路学習を通しての、自分の未来・社会・人との関わり合いとつながり)》

今回の職場を訪問して、「努力すること」を学んだ。努力なしでは将来の夢を実現させることはできない。だから私は今一番頑張らないといけないことを見つけ精一杯努力したい。

5. 考察

学術フロンティア推進事業第1部門第1グループにおける「次世代育成のための育児支援体験学習プログラム」作成の足がかりとして、体験学習を計画的に実践している静岡県浜松市立可美中学校を訪問し、聞き取り調査を行った。そこで行われていた進路指導は、計画的でしかも生徒の力を信じ、持っている能力を最大限に活かしたプログラムのもとで実践されていた。このプログラムは本研究班の計画に大いに参考になる内容であった。

可美中学校では、生徒が自分の未来をしっかりと見つめられるよう、3つの目標（1. 自分を知る、2. 他を知る、3. 自他を高める）を掲げ、段階にそって計画的に実践している。

具体的な方法として、初めに一番身近な人の職業調べから始め、次に自分がなりたい職業を地元で見つけ、その職場への訪問の計画書を作成した後、実践している。家族の単位が小さくなり、人間関係が希薄になりがちな現代社会を生きる中学生にとって、多様な生活をしている人間理解を深める体験学習の有効性については、先行研究でも実証され、多くの中学校で取り入れられている。しかし、今回聞き取り調査を行った可美中学校では、さらにその体験を生徒一人一人が整理し、学内外の人たちに理解してもらうプレゼンテーションをする過程を通じ、生徒の体験に意味づけをおこなっている。プレゼンテーションの実施においては、自己の体験をどのようにしたら他者に理解してもらえるか、いかにして他者を理解するかが意識的に指導され、人との関わりの中で今後の課題を明確にさせている。最終目標として、「こうなりたい」という自分たちの未来への願いや希望に結び付けている。

そのような過程を経て、限定された地元の地域からさらに自己の可能性を高めるために、関西の修学旅行での職場訪問に繋げている。

関西の修学旅行への準備も、生徒の自主性を最大限に尊重し、事前情報の収集にはじまり、訪問先決定までを自由に活動させ、教師が連絡を取った後は、具体的な訪問時間、訪問内容、訪問手段などの詳細については生徒に任せている。それにより、生徒たちは自己の目標を再確認するとともに、他者を訪問する際のマナーの重要性を実感している。事例2に紹介した、H・Mさんが「関西職場訪問で身に付けたこと・力」は何か、の質問に対し、「社会のマナー」と答えているように、他者と接する最

も大切なことをしっかり学んでいることがわかる。これは、活字や映像などの教材をもってしてはかなわない、最大の実践成果であると考える。

可美中学校の関西方面修学旅行で実施された職場訪問は68コースと多様なものであった。その中で保育・幼児教育関係機関への職場訪問は、10コース15名である。保育士や幼稚園教諭の養成校やおもちゃの店など乳幼児産業関連の店や、幼稚園などを訪れた生徒たちは、訪問後に自分たちの実践結果を振り返り、自分の夢を実現するためにはまず今の勉強を頑張ることが大切であると一様に述べている。

前述したように体験学習の効果は講義形式の教育方法では学び得ない成果をもたらしている。しかし、より大きな成果を期待するのであれば、今回聞き取り調査をした可美中学校の実践過程のように、周到な準備としっかりとした計画に沿った手順が求められることが明らかになった。これにより、本研究の次世代育成のための育児体験学習プログラム開発への貴重な示唆を得ることができた。

参考文献

1. 松村京子「幼児との交流時における高校生の対児行動」
小児保健研究, vol 61, No. 1, 2002, pp.66~72
2. 中嶋明子「高校家庭科における保育体験学習者の意識変容（第1報）」
日本家庭科教育学会誌, vol 46, No. 4, 2004, pp.351~361

【研究組織】

担当頁

◎ 塩 美佐枝	聖徳大学 人文学部児童学科	教 授	研究にあたって
小櫃 芳江	聖徳大学 短期大学部保育科	教 授	研究目的、研究経過、まとめ
村田 光子	聖徳大学 人文学部児童学科	助教授	I 1、II 1、II 4、まとめ
永井 妙子	聖徳大学 短期大学部保育科	助教授	I 2, 2)、II 2, 2)、II 3, 1)
矢萩 恭子	聖徳大学 人文学部児童学科	講 師	I 2, 1)、II 2, 1)、II 3, 2)、II 4
吉田佐治子	聖徳大学 短期大学部保育科	講 師	I 2, 3)、II 2, 3)、II 3, 3)

注：◎は第5部門主任、編集

<学術フロンティア推進事業報告シリーズバックナンバー案内>

No.	タイトル	発行年月	判型	頁数
1	『少子化に関する地域システムの研究』	2004.3	A4	100
2	『韓国の平生学習とまちづくりとまちづくりの推進』	2004.3	A4	155
3	『高齢者の生きがい対策と 人材活性化に関する研究』	2004.3	A4	196 (+100)
4	『少子社会における子どものための 地域活動の展開』	2005.3	A4	196 (+100)
5	『生涯学習指導者の養成と活用に関する研究』	2005.3	A4	46 (+162)
6	『第6回生涯学習フォーラム』	2005.3	A4	120 (+58)
7	『地域の教育力の向上と子ほめ運動の現状』	2005.3	B5	202
8	『地域福祉まちづくりの現状と実践的展開』	2005.3	A4	102
9	『北欧視察研修報告－北欧の子育て支援－ デンマーク・スウェーデンを訪ねて』	2005.11	A4	71 (+15)
10	『創年学入門』	2005.8	A5	65
11	『第7回生涯学習フォーラム』	2005.12	A4	97 (+34)
12	『創年学入門 Vol. 2』	2006.5	A5	48
13	『生涯学習指導者の養成と活用に関する研究Ⅱ』	2006.3	A4	183

中学生・高校生の育児体験プログラムの開発

(第1部門「少子化に関する地域システムの研究」研究報告書)

平成15年～19年文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」
「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」

2006(平成18)年3月31日 聖徳大学 生涯学習研究所

聖徳大学 生涯学習研究所 学術フロンティア推進事業

住所：〒271-8551 千葉県松戸市松戸1169 聖徳大学生涯学習研究所

電話：047-365-5691 Fax：047-365-5692

E-mail : frontier@seitoku.ac.jp 学術フロンティアURL : <http://hello.smilies.jp/lli-studies/>

聖徳大学 生涯学習研究所 学術フロンティア推進事業
住所：〒271-8551 千葉県松戸市松戸1169 聖徳大学生涯学習研究所
電話：047-365-5691 Fax：047-365-5692
E-mail：frontier@seitoku.ac.jp 学術フロンティアURL：<http://hello.smilies.jp/ill-studies>